



第40回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [21] 報告書

大学入試の多様化を考える
— 新学習指導要領と総合型選抜の拡大 —

令和 7 (2025) 年 3 月
東北大学高度教養教育・学生支援機構
大学入試学会

第 40 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [21]）

大学入試の多様化を考える
——新学習指導要領と総合型選抜の拡大——

- ◇ 日 時 : 2024 年 9 月 27 日（金）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学青葉山新キャンパス
青葉山コモンズ 2 階大講義室 翠生ホール（及びオンライン配信）
〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻青葉 468-1
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構
◇ 共 催 : 大学入試学会

プログラム

- | | | |
|---------|---|----------|
| 司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構助教 | 林 如玉 |
| 開 会 の 辞 | 東北大学総長 | 富永 悌二 |
| 来 賓 挨 拶 | 文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長 | 片柳 成彬 氏 |
| 共催者挨拶 | 大学入試学会理事長 | 倉元 直樹 |
| 基 調 講 演 | 高校教育の転換と大学入試のジレンマ
東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 宮本 友弘 |
| (休憩) | | |
| 現状報告 1 | 加速する大学入試の多様化と高校現場の実態
——出願書類作成指導に関する調査から—— | |
| | 宮城県佐沼高等学校教諭 | 加美山 若奈 氏 |
| 現状報告 2 | 多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか
——西日本の地方公立高校の現場より—— | |
| | 山口県立下関西高等学校教諭 | 松村 成通 氏 |
| (休憩) | | |
| 討 議 | 指定討論 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 倉元 直樹 |
| | 討議司会 東京大学教授 | 中村 高康 氏 |
| | 東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授 | 駒形 一路 |
| 閉 会 の 辞 | 東北大学理事・副学長 | 滝澤 博胤 |

第40回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [21]）

大学入試の多様化を考える ——新学習指導要領と総合型選抜の拡大——

目 次

第40回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
来賓挨拶	5
共催者挨拶	7
第Ⅰ部 基調講演	
基調講演者紹介	9
基調講演： 高校教育の転換と大学入試のジレンマ 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 宮本 友弘 氏	10
第Ⅱ部 現状報告	
現状報告者紹介	29
現状報告1： 加速する大学入試の多様化と高校現場の実態 ——出願書類作成指導に関する調査から—— 宮城県佐沼高等学校教諭 加美山 若奈 氏	31
資料	35
現状報告2： 多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか ——西日本の地方公立高校の現場より—— 山口県立下関西高等学校教諭 松村 成通 氏	38
資料	45
第Ⅲ部 討 議 ——パネルディスカッション——	
指定討論者紹介	49

討議	50
閉会の辞	72

講評

講評 1：	第 40 回東北大学高等教育フォーラムに参加して				
	青森県立青森北高等学校	奈良	孝史	教諭	75
講評 2：	東北大学高等教育フォーラムに参加して				
	岩手県立盛岡第三高等学校	小原	謙一	進路指導主事	78
講評 3：	第 40 回東北大学高等教育フォーラムに参加して				
	仙台市立仙台青陵中等教育学校	星山	史門	教諭	81
講評 4：	第 40 回東北大学高等教育フォーラムに参加して				
	秋田県立本荘高等学校	平田	哲久	進路指導主事	84
講評 5：	入試研究を通して考える高大連携・高大接続の未来				
	山形県立米沢興譲館高等学校	高橋	渉	教諭	87
講評 6：	フォーラムに参加して感じた思いと今後に向けて				
	福島県立福島高等学校	渡邊	優輔	進路指導主事	90

アンケート・参加者統計

第 40 回東北大学高等教育フォーラムアンケート	95
アンケート自由記述	96
参加者統計	104

第40回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



第40回東北大学高等教育フォーラム(新時代の大学教育を考える[21])／
大学入試学会第1回大会(創立記念大会)公開シンポジウム

JARUAS
大学入試学会
The Japan Association for Research on University Admissions

大学入試の 多様化を考える

新学習指導要領と総合型選抜の拡大

2024年 **9.27** [金曜日]

[時間]13:00～17:00(受付開始 12:00)
[会場]東北大学青葉山新キャンパス
青葉山コモンズ(農学部)
2階大講義室(学生ホール)
来場参加
オンライン配信(同時配信)※要事前申込
[共催]大学入試学会

令和7(2025)年度入試から新しい学習指導要領の下で学んだ高校生が大学受験期を迎える。各大学は学習指導要領の変更に対応すべく、様々な準備を進めている。多くの関係者に大きな変更点として認識されているのは「情報」の大学入学共通テストへの導入であろう。専門的に情報を教えられる高等学校教員の配置に大きな地域差があることから、地域間格差の拡大が懸念されている。また、国語や地理歴史、公民における教科・科目構成の見直しも大学入試に大きな影響を与えかねない変更である。さらに、探究学習をはじめとする「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められている高校現場では、評価の変更も含めて対応に追われていることだろう。

このような目に見える変化と軌を一にして進んでいるのが、大学入試の一層の多様化である。わが国の大学入試制度を画一的なものと認識し、政策的に多様化が推進されて久しいが、その勢いは止まるところを知らない。令和3(2021)年度入試では、国公立大学合わせた大学入学者のうち、一般選抜を経て入学した者の割合が5割を切った。学校推薦型選抜と総合型選抜を合わせて「年内入試」と称する、不正確ながらも印象的で耳に残る用語も生まれた。探究学習は年内入試の拡大を推し進めるとする見方もある。

本フォーラムでは昨年末に誕生した大学入試学会との共催で、このような変化が大学入試と高校教育の現場に何をもたらしているのか、各種のデータを交えながらの議論を試み

る。基調講演者は初中等教育の教育政策や学習指導要領に詳しく、主として教育心理学の観点から主体性を含む情意機能の評価について研究を重ねてきた東北大学教授で大学入試学会事務局長の宮本友弘氏が担当する。また、高等学校からの現状報告として、学校推薦型選抜や総合型選抜で用いられる本人記載書類について調査を行った宮城県佐沼高等学校教諭の加美山若奈氏、様々な高校の進路指導の実情に詳しい山口県立下関西高等学校教諭の松村成通氏に依頼した。高校や大学の先生方、関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待している。

本フォーラムは大学入試学会第1回大会（創立記念大会）初日の公開シンポジウムとしても位置付けられている。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、および、アンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音から起こした原稿に対し、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現の修正を加えたものである。招待参加者の原稿については、体裁の統一に関わる部分を除いて、表現の修正は行っていない。

編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

（編集担当：東北大学 高度教養教育・学生
支援機構高等教育開発部門入試開発室

教授 倉元直樹
助教 林 如玉)

開 会 の 辞

東北大学総長
富永 悌二

林如玉助教（司会）：

本日は、ご来場、オンラインのそれぞれで、全国から多数の皆様にご参加をいただき、誠にありがとうございます。

それでは、予定の時刻となりましたので、これより第40回東北大学高等教育フォーラム「大学入試の多様化を考える—新学習指導要領と総合型選抜の拡大—」を始めさせていただきます。

ご案内のとおり、本フォーラムは東北大学と大学入試学会の共催であり学会の第1回大会として実施するものであります。本日は東北大学の林が総合司会を担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、主催者を代表し、富永悌二東北大学総長よりご挨拶を申し上げます。富永先生、よろしくお願いいたします。

富永悌二総長：

ご紹介いただきました東北大学総長の富永でございます。開会に当たりまして一言ご挨拶を申し上げます。

このフォーラムは今回、通算40回目、21年目を迎えます。今回は昨年設立されました大学入試学会の第1回大会の公開シンポジウムを兼ねております。このように多くの皆様にご参加いただきまして誠にありがとうございます。また、本日ご来賓としてご出席いただきました文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長の片柳成彬様をはじめとしまして、お忙しい中、基調講演、現状報告、指定討論をお引き受けくださった先生方に厚く御礼申し上げます。

今回のテーマは、「大学入試の多様化を考え



る—新学習指導要領と総合型選抜の拡大—」であります。来春、キャンパスに迎え入れる学生を対象とした2025年度入試は、新しい学習指導要領のもとで学んだ高校生が、大学入試を受験する最初の年ということになります。

大学はその準備に追われておりますが、高校の現場も大きな変化に直面していると聞き及んでおります。今回のフォーラムは、変化に伴って生じる様々な課題に立ち向かい、受験生にとってより良い大学入試のあり方を模索するために、高校と大学が共通理解を深める場を提供したいとの思いで企画されたと伺っております。

基調講演を務めるのは本学の宮本友弘教授です。現在、東北大学の入試の運営に関して中心的な役割を果たされております。専門は心理学で長年の間、初等中等教育における評価の問題を研究してこられました。本日は学術的な観点から直面する複雑な状況を整理して、今後どんな展望が描けるのかということについてお話いただける予定です。

また現状報告者としてご登壇いただきますのは、2名の高校の先生方です。地元宮城県の佐沼高等学校にお勤めの加美山若奈先生、

それから山口県下関西高等学校にお勤めの松村成通先生です。このお二方には高校での大学入試の多様化に対応する大学進学指導の実態について、豊富な経験をもとにご報告いただきます。現在、都市部と比較して、郡部の高等学校は一層厳しい環境条件に置かれております。日本全国の地方の高等学校の現状について、参加者が理解を深めていただく機会になると考えております。

基調講演、それから現状報告の後は、討議の時間を設けてございます。本イベントの共催である大学入試学会の理事長をお務めの本学の倉元直樹教授には、指定討論者として基調講演と現状報告を基に、内容の濃いディスカッションとなるよう進めていただけるものと期待しております。

今後、急速に進む少子化に対応すべく、大学も変革の時期を迎えております。報道等でご存知の方も多いかと思いますが、東北大学は国際卓越研究大学の唯一の認定候補となり、ほどなく初めての認定大学として選定される見込みでございます。社会の期待に応えて、世界に伍する研究大学として活躍するには、様々な課題を乗り越えていかなければなりません。社会の将来を支える優秀な若者を育て続けていくということも非常に大切で、これは本学のみならず全国の大学共通の責務であります。新しい時代に即した大学入学者選抜のあり方を研究して整備していくことはこれまで以上に重要な課題とも言えます。

本日のフォーラムにおいて、活発なご議論が展開されることを期待して、開会の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

林如玉助教（司会）：

富永総長，ありがとうございました。

来 賓 挨 拶

文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長

片柳 成彬 氏

林如玉助教（司会）：

続きまして、来賓としてご出席いただいております、文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室、片柳成彬室長からご挨拶を頂戴いたします。

では、片柳室長、よろしくお願いいたします。

片柳成彬室長：

ただいまご紹介にあずかりました文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長の片柳成彬と申します、よろしくお願いいたします。

本日、第40回東北大学高等教育フォーラム、大学入試学会第1回大会創立記念大会の公開シンポジウムが開催されますことにつきまして、まずもって、お慶びを申し上げます。本フォーラムにつきましては、昨年12月に設立されました大学入試学会との共催ということで始めているものということでありまして、公開シンポジウムとしても位置づけられていると伺っております。

今ほどご挨拶いただきました冨永総長また大学入試学会の倉元理事長を初め、本フォーラムの開催にご尽力をいただいております東北大学の関係者の皆様、大学入試学会の関係者の皆様に深く敬意を表するとともに本日ご参加いただいております皆様におかれましては、日頃より大学入試の円滑な実施、またその工夫ですとか改善に多大なご尽力をいただきまして、この場を借りて御礼申し上げます。

本フォーラムにおきましては、「大学入試の多様化を考える－新学習指導要領と総合型選抜の拡大－」をテーマに実施されるということでご



ざいますけれども、これから本格シーズンを迎えます令和7年度入学者選抜では、初めて新学習指導要領における課程を修了した生徒さんの選抜でありまして、まさに時期を得た本日のテーマではないかと思っております。ある種この新しい選抜に対して、高等学校の先生方からすれば、どのように生徒さんを指導していくべきか、また指導してきたのか、というような悩みですとか、また、大学側の立場からすれば、どのように選抜を実施し評価をしていくのかということについて、まさにそれぞれの立場で尽力されてきた方々がお集まりのことと思います。本日より始まりますプログラムの中で、活発な議論を通じて、教育行政、高校、大学といった様々な立場から、大学入試改革に繋がる必要な情報が得られることを期待しております。

さて、一つこの場をお借りして、昨年度実施されました令和6年度大学入学者選抜におけるお礼を申し上げます。本年1月1日に発生いたしました令和6年能登半島地震に伴いまして入学者選抜におきましても、様々な対応が求められていたかと思いますが、皆様のご尽力がございまして、昨年度実施の試験につつま

してはおおむね円滑に実施をさせていただくことができました。改めてこの場をお借りして感謝申し上げます。

そしてこうした中で着実に実施をいただきました各大学の個別選抜におきましては、学力の3要素、これらを多面的・総合的に評価する入学者選抜が進んできておりまして、直近の令和6年度入学者選抜においても約5割が例えば総合型・学校推薦型というような形で入学してきている生徒・学生さんたちがおられまして、また一般選抜の中でも、例えば7割以上の国立大学においても、学力検査以外の資料等を評価するなど、多様な評価方法が取り入れられ始めております。

さらに、本日のテーマでもあります、総合型選抜に関して申し上げますと、大学単位ということで見ますと、国公私全体で約9割にも近い大学さんで導入しているというような状況に至っておりまして、文科省の方でも調査研究を行っているところですが、その中でも、総合型選抜に関しましては「受験生を多面的・総合的に評価する選抜ができた」、「学力検査を重視した入試では、選抜できない資質を持つ入学者を選抜することができた」、「受験生の個性や特性を評価する選抜ができた」というようなお声を多くいただいております、総合型選抜の効果をまさに実感するに至っているところかと思います。

他方でその課題としてございますけれども、「選抜に関する業務関係の負担感」、「評価する観点の設計が難しい」、「評価結果も点数化が難しい」こういったような意見も多く挙げられていたところです。例えば負担の話などにつきましては、なかなか総合型選抜と切り離せない部分もございますので、簡単に解決されるものではないかと思いますけれども、だからこそ本日のような場を通じて少しでも課題解決に向けた手がかりを見つけていただければと思います。

文部科学省の方でも好事例をいろいろまとめるというようなことでの情報発信をしていき

いと思っております、隔年でその好事例集を作るようなことをしております。また、今まさに作業を進めているところでもありまして、また皆様にご協力をいただければと思います。

少子化や人口減少の波は今に始まったものではございませんけれども、それらも含めた社会変化という、こういったものが進んでいく中で、入学者選抜においても、1人1人をやはり総合的・多面的に丁寧に評価をするということの重要性は増すばかりだと思えます。

そのためにも、入試の多様化を進めていくことはさらに重要だと思っております。そのまさに一助となるであろう本日のシンポジウムが実り多いものになることを改めてお祈りを申し上げます、私からのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

林如玉助教（司会）：

片柳室長、ありがとうございました。

共 催 者 挨 拶

東北大学教授／大学入試学会理事長

倉元 直樹

林如玉助教（司会）：

続きまして、共催者を代表しまして、東北大学教授・大学入試学会理事長、倉元直樹先生からご挨拶を頂戴いたします。倉元先生、よろしくお願いいたします。

倉元直樹理事長：

ただいまご紹介にあずかりました、大学入試学会理事長の倉元直樹と申します、よろしくお願いいたします。

私自身は、実はこのフォーラムに第 1 回から関わっておりまして、今回も企画のところに加わったということで、こんなタイミングでこんなところからご挨拶させていただくのは、何だか非常に奇妙な感じもいたします。

大学入試学会という組織を昨年 12 月中に立ち上げました。新しい学会といたしましては、本日までに 173 名という会員を頂戴しているんですけれども、これだけ多くの方にご参加いただき、また、オンラインという形で 290 名ほどの方が聞かれているという場所をお借りして、初めてのオープニングイベントを開催させていただけるということは、非常にありがたいことだと思います。自分が所属しているところではございますけれども、東北大学高等教養教育学生支援機構に共催を許していただいたということに関しては深く御礼を申し上げたいと思います。

今回、第 1 回大会の初日ということでございますので、第 1 回大会の今後の予定を、少しご紹介させていただきます。本日、無料の公開シンポジウムでございますが、明日から有料イベントですね、通常の学会という形で対面で行います。



明日、1 日、基調講演、私が務めさせていただきましても、それから研究発表などがございまして、3 日目、明後日になりますけれども、企画シンポジウムがございます。その後に、・・・「協議会」という学会独自の仕組みがあるのですが、・・・高等学校等協議会、大学等協議会のイベント、これは協議会参加メンバーのみに限られているものですが、予定をしております。

大学と高校の関係者が同じ場所に集い、また、私のような入試の機関研究者、そして個人の立場で入試研究しておられる方が、一堂に会するという場これまでなかなかなかったものですから、できるだけそういう機会を生かして、今後の具体的な入試の改善いうことに繋げていければなと、その第一歩ということで、よろしくお願いいたします。私も討議の指定討論ということでこれから運営側に回りますのでこの会議を成功に導けるように一役になればなと思っているところでございます。それでは、皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

林如玉助教（司会）：

倉元先生，ありがとうございました。

ここでお知らせとお願いがございます。まず，本日の進行についてのお知らせです。来場参加の皆様はお手元の封筒に，オンライン参加の皆様は事前にメールにてご案内させていただいたオンライン参加者用ページに配付資料がございます。



配付資料のプログラムをご覧ください。第1部終了後に15分程度，それから第2部終了後に20分程度の休憩を挟む予定でございます。本フォーラムの終了は17時頃，午後5時頃を予定しております。なお，ご登壇いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては，配付資料に含まれておりますので，ご覧いただければと思います。

次に，参加いただいております皆様方へのお願いになります。このたびのフォーラムでは，討議のための質問票及び事後アンケートをウェブ上でご記入いただくようご用意させていただきました。

まず，討議のための質問票についてご説明させていただきます。来場参加の皆様は，第40回東北大学高等教育フォーラム討議質問票という配付資料に記載されているQRコードを読み取り，当該ウェブページにアクセスをお願いいたします。オンライン参加の皆様は，事前にご案内させていただきましたオンライン参加用ページより「討議質問票へ」を選択

してください。現在投影されているスライドの右下に表示されているQRコードからも質問票のウェブページへアクセスしていただくことができます。皆様方からの質問は第3部の討議に反映させていただきますので，ご入力第2部終了後の15時25分までに行っていただきますようご協力のほどお願いいたします。なお，基調講演，現状報告に対するご質問やご意見は，15時25分までの間であればお一人の方につき複数回，何度でもご記入いただくことが可能でございます。2度目以降続けて入力する場合には，「別の回答を送信」と表示されることがありますけれども，そちらを選択していただいて構いません。また，大変恐れ入りますが，討議のためのご質問，ご意見の受付は，今回はウェブからのみとなりますので，ご理解のほどお願い申し上げます。

続いて，フォーラム終了後のアンケートへのご協力のお願いになります。来場参加の皆様は，QRコードを読み取りウェブ上でご回答ください。オンライン参加の皆様は，事前にご案内させていただいたオンライン参加用ページより「アンケートへ」を選択してください。アンケートへのご回答は，フォーラム終了後にお願いいたします。

なお，今年度も参加された皆様方には，本フォーラムの内容等を記載した報告書を後日お送りさせていただく予定としております。皆様方のご協力のもと，本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので，よろしくお願いいたします。

基調講演者紹介

基調講演者

宮本 友弘（みやもと ともひろ）氏

1966 年茨城県生まれ

〔教員歴〕

メディア教育開発センター研究開発部助手	（8 年間）
びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部准教授	（5 年間）
聖徳大学児童学部准教授	（8 年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授	（4 年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構教授	（5 年目，現職）

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（メタ認知及び学習動機づけに関する研究）

〔主な著書、研究業績〕

宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸(2024). 東北大学の一般選抜におけるチェックリストを活用した主体性評価の実施結果について 大学入試研究ジャーナル, 34, 205-210.

宮本友弘(2023). 子どもたちの意欲の実態—全国学力・学習状況調査と PISA の結果から見えてくるもの— 指導と評価, 69(6 月号), 12-15.

宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸(2022). 東北大学志望を促進する要因の検討—新入学者アンケートから— 大学入試研究ジャーナル, 32, 69-76.

宮本友弘・久保沙織（編）(2021). 大学入試を設計する 金子書房

宮本友弘（編）(2020). 変革期の大学入試 金子書房

宮本友弘(2019). 児童期の学力の発達に関する縦断的研究 風間書房

〔学会活動等〕

「指導と評価」（図書文化）編集委員（8 年目）

日本テスト学会理事（7 年目）

大学入試学会理事（1 年目）

基調講演：高校教育の転換と大学入試のジレンマ

東北大学高度教養教育・学生支援機構

宮本 友弘 教授

【講師紹介】

林如玉助教（司会）：

それでは、早速、第1部の基調講演に移らせていただきます。「高校教育の転換と大学入試のジレンマ」と題して、東北大学宮本友弘先生よりご講演いただきます。宮本先生、よろしくお願いいたします。

宮本友弘教授：

皆さん、こんにちは、東北大学の宮本と申します。本地基調講演を仰せつかって、このテーマで話させていただきます（スライド1）。

プロフィールにございます通り、私これまで3つの大学を経験しております。最初は滋賀県にあるスポーツ大学に勤めておりました。その後、保育系の女子大、そして現在、東北大に勤めております。こうした経験を振り返ったときに、今回のフォーラムのテーマのキーワードの1つである大学入試の多様化については、身をもって体験しております。そして、いろいろ思うところがございます。そういったことを踏まえて、今回、大学側の視点から、こういったテーマで話させていただきます。

本日の具体的な内容なんですが（スライド2）、まず、今回のフォーラムのキーワードの1つでございます多様化につきまして、データを使って現状を確認していきたいと思っております。次に、もう1つのキーワードでございます新学習指導要領です。そちらについての行政文書を中心に、いろいろ読み解いていきたいなと思っております。

また、多様化において重要なキーワードに



なってくるものの1つに、パフォーマンス評価があります。その手法について、大学入試との関わりから少し考察していきたいと思っております。そして、もう1つが、学力の3要素です。これをどう把握していくのかについて、私がこれまで児童を対象に行った研究などを紹介しながら、私なりの解釈をお示ししたいと思います。

以上を踏まえて、最後にまとめとしてこの後の討議での視点となるようなことをいくつか申し上げたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、大学入試の多様化の現状ということで、選抜別の大学入学者数割合の推移です（スライド3）。こちらは、下に記載してまず通り文部科学省から毎年発表されている「入学者選抜実施状況」に基づいて作成しています。この図では、前学習指導要領が高校で実施された2013年を基点とし、そこからの変化を示しています。

これを見ると、まず、入学者数全体の数についてですが、2013年は60万人と少しでしたが、直近のデータでは62万人となっています。この手のデータが示される際には、た

務められる中村高康先生の著書にも記されていることですが、戦後日本の大学入学者選抜の歴史の変遷には、基本的に2つの潮流があると言われています。それは、「共通試験」と「多様化」です。ただし、「多様化」が指す内容は、時代背景や社会状況によって変わるものです。

多様化にはさまざまな側面があり、倉元直樹先生はこれを「多様化の3つの側面」として整理しています。まず1つ目は「選抜資料の多様化」です。これは選抜方法の多様化や、評価尺度の多次元化とも言えます。先ほど確認した選抜区分の違いなども、この選抜資料の多様化に関連する話です。ポイントとしては、学力検査だけに頼らず、調査書や面接といった学力検査以外の選抜資料を積極的に取り入れることが重視されています。

次に「学生集団の多様化」です。これは、留学生や帰国子女、社会人といった多様な層を受け入れる流れを指しています。最近では「女子枠」といった話題も注目されています。

3つ目は「受験機会の複数化」です。これは、1人の受験生に対して同一年度内に複数の受験機会を保障することを指し、特に国立大学の受験回数が強調されてきました。

現在の状況が、先ほどのデータで示した多様化へと方向づけられている要因についてですが、かつては受験競争の解消が政策課題として挙げられていました。そのため、一般選抜以外の選抜区分が求められてきたと考えられます。しかし現在は、先ほども触れたように「少子化」にもかかわらず、大学への入学者数はほとんど変わっていないのが現状です。こういった状況を表す言葉として「高等教育の大衆化」という表現が使われることもあります。さらに、定員確保や管理定員の管理といった経営的な側面も重要な要因となっています。そのため、現在の多様化を何か1つの要因に絞って説明するのは難しい部分があると思います。

とはいえ、やはり「高大接続改革」の影響は軽視できないのではないかと考えています。先ほどの片柳成彬室長のお話にもありましたように、「学力の3要素の多面的・総合的な評価」という点が、大きな要因の1つとして考えられます。

次のスライドに移ります（スライド9）。さて、「高大接続改革」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。改革の目玉として、多くの方が共通テストでの記述式問題や英語民間試験の活用を想起されるのではないのでしょうか。これらの施策は直前で見送られたため、当時の新聞では「高大接続改革が頓挫した」とか「つまづいた」といった報道も見られました。しかしながら、これらはあくまで1つの施策に過ぎず、改革の基本コンセプトである「学力の3要素の多面的・総合的な評価」は、現在も継続しています。つまり、高大接続改革は終わっていないということです。

2014年の答申を受けて策定された大学入学者選抜実施要項では、基本方針の中で「学力の3要素」が強調されています。ここでいう3つの要素とは、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、そして「主体性・多様性・協働性」です。これらを入試方法の多様化や評価尺度の多元化を通じて、しっかりと評価するよう、2016年以降、大学入学者選抜実施要項に明記されています。その後、表現が多少変わった部分はあるものの、基本的な方針は継続されています。この方針に基づき、各入試区分において具体的にどのような選抜資料が用いられているのかが問われているのです。

最新の令和7年度の実施方法に基づいて作成すると（スライド10）、選抜区分は大きく「一般選抜」「総合型選抜」「学校推薦型選抜」の3つに分けられます。二重丸は主な選抜資料を示しており、一般選抜では当然学力検査や小論文等が含まれますが、赤字の箇所注

目してください。先ほど触れた学力の3要素のうち「主体性」に関して赤色で○を付した資料を活用して積極的に評価するよう指示されているのです。同様に、総合型選抜や学校推薦型選抜では、青色で○を付した資料を用いて「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」を適切に評価することが求められています。

このような状況を踏まえると、一般選抜も総合型選抜や学校推薦型選抜も、その実際の内容や運用において、選抜区分間の境界が曖昧になりつつあるとの指摘もなされています。その経緯を考える際、そもそも総合型選抜の元となったAO入試について触れる必要があります。AO入試には明確な定義がなく、大学ごとの「自由設計入試」とみなされることがありました。つまり、自由度の高い入試として運用されてきたのです。その結果、AO入試は既存のさまざまな入試区分との境界領域を曖昧にする形で実施されてきたという歴史があります。

このような背景から、AO入試に由来する総合型選抜が拡大しており、その動向は冒頭でお見せしたグラフにも表れていると考えられます。先ほど「多様化には3つの側面がある」と申し上げましたが、現在起きているのは選抜資料の多様化だけではなく、それ以上に「複雑化」や「独自化」が進行しているのではないかという点です。これが、ここまでのデータを踏まえた上で現時点での私の認識です。

続きまして、もう1つのキーワードである新学習指導要領と高大接続改革について述べたいと思います（スライド11）。現在実施されている高校の新しい学習指導要領にはさまざまなポイントがありますが、その中でも特に重要視されているのは、高校に限らずすべての学習指導要領において「資質・能力の3つの柱の育成」が掲げられている点です。これは、ご来場の高校の先生方はご存じかと思

いますが、「学力の3要素」を踏襲した内容になっています。

さらに、教科や科目の再編が行われており、「探究」が特に重視されるようになっていきます。その一例として、これまでの「総合的な学習の時間」が廃止され、新たに「総合的な探究の時間」という名称に変わりました。

そして、観点別評価が導入されました。これまでも観点別評価は求められていましたが、実質的には指導要録に記入欄がなかったため形骸化している面がありました。しかし、今回の改訂から指導要録に記入することが義務付けられたのです。

以上が目に見える形での大きな改訂のポイントとなります。こうした改訂の方向性については、コンピテンシーベースの改革の日本版であるという指摘があります。これを提唱されているのが京都大学の石井英真先生です。石井先生は学習指導要領の改訂や学習評価において、オピニオンリーダーとして活躍されており、実際に政策の立案にも関与されている方です。「コンピテンシーベースの改革の日本版」と言われると、そもそもコンピテンシーベースの改革って何だろうという疑問が出てくるかと思います。コンピテンシーとは何かというと、簡単に言えば「社会が求める実力」のことです。具体的には、職業上の実力や人生における成功を予測する能力のことを指します。こうした能力の育成は、今や世界的な潮流になっています。その代表例として、OECDが提唱するキー・コンピテンシーが挙げられるでしょう。日本においては、その先駆けとして「生きる力」が挙げられると思います。「生きる力」は、前々回の学習指導要領の改訂時に示された理念ですが、今でも重要な教育理念として位置づけられています。

こういったコンピテンシーを育成するにはどうすればいいのか、という話になると、「真正の学び」を通して育成される、という

ことになります。「真正」という言葉は英語でオーセンティックと言いますが、具体的にどんな学びかという、学校の外や将来の生活で実際に遭遇するような本物の活動、あるいは本物のエッセンスを保持した活動のことです。その際、「知っている・できる」、「わかる」、「使える」という3つの知識の状況が想定され、その中でも特に「使える」レベルの知識とスキル、さらに情意を一体的に育成することが重要だと強調されています。なお、これらは、教育学者ブルームという有名な方の「教育目標の分類学」に基づいているようです。

さらに、真正の学びを通して育成されるものを評価するにはどうすればいいかという、真正の評価、つまりオーセンティック・アセスメントが必要だと言われています。そのため、豊かなテストや豊かなタスクの工夫が重要だということが強調されています。では、豊かなテストとはどのようなものでしょうか。例えば、PISAの問題がその一例です。また、日本の場合だと、最近の学力調査の問題や共通テストの問題が挙げられます。日常的な文脈を反映させたり、会話文を取り入れたり、そういった工夫がされており、これによって真正な評価が可能になるとされています。さらに、豊かなタスクとしては、筆記試験以外のパフォーマンス課題による評価が重要だと考えられています。以上が、今の学習指導要領を大きく方向付けている考え方の1つです。

行政文書を確認したところ（スライド12）、もう1つ大きな流れがありました。それは、繰り返しになりますが、高大接続改革の中で提案されている内容です。改めて申し上げますと、新学習指導要領の改訂は小中高まで教育を対象とした話です。しかし、これが高大接続改革の一環として実施されている、という点が非常に強調されています。そもそも、現在の新しい学習指導要領に関する文部科学

大臣からの諮問では、高大接続改革を踏まえるようにという要請が元々ありました。それを受けて、中教審答申が出されました。その中では、「高大接続改革等の継続」という項目が掲げられています。その上で、高大接続改革の実現を目指して実施され、さらに引き続き強力に推進されるよう努めると明記されています。この答申では、複数箇所で大高接続改革や大学入学者選抜について言及されています。小中高の学習指導要領の改訂のために出された答申ですが、大高接続改革や大学入学者選抜について多くの記述がされています。

ちなみに、その前の学習指導要領改訂時の中教審答申（スライド13）、これは2008年のものです。そのときは、大学入試等についてどんなことが書かれていたかという、実は「企業や大学等に求めるもの」という部分だけです。そこには希望的な内容が少し書かれている程度でした。大学入学者選抜の改善については、「記述式などで思考力・判断力・表現力を問う出題の充実」や「高校生の科学や作文などでの各種賞の受賞歴を評価」、さらに「志願者のボランティア活動など社会参加の状況の評価」、そして「高等学校の教育課程、大学入学者選抜、学士課程教育を見通して学習歴の適切な評価」などが言及されていました。ここに書かれている内容は、現在の大高接続改革にも通じる発想が見て取れます。

改めて大高接続改革のコンセプトを確認しておきたいのですが（スライド14）、それは学力の3要素を通じて高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一体的に改革するというものです。高校教育では学力の3要素をしっかり育成し、入学者選抜では多面的・総合的に評価し、そして大学教育でさらにその力を伸ばしていく、というのが基本コンセプトです。このように、学力の3要素が非常に重視されています。

そこで、学力の3要素がどのように編成されているのか、少し見ていきたいと思います（スライド15）。これまでの行政文書の中で取り上げられてきた学力の3要素に関する非常に重要な内容をピックアップしたものが、こちらの表です。元々は学校教育法が改正されたことがきっかけです。平成19年（2007年）に第30条第2項に、小学校で育成するものとして「知識・技能、思考力・判断力・表現力、そして主体的に学習に取り組む態度」という3つの要素が明記されました。これは、そもそも教育基本法が改正されたことを受けて、具体的に何を重視すべきかを明確化する必要があったことから出てきたものです。そして、この規定自体は小学校向けのものですが、中学校や高校でもこれに準ずることとされました。つまり、小中高でこの3つの要素をしっかりと育成しなければならない、ということが明確に示されたわけです。

その後、前の学習指導要領の改訂に関する答申の中で「学力の重要な要素」として書かれていました。このときも「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」はそのままだったんですが、「主体的に学習に取り組む態度」は「学習意欲」という表現になっています。ただ、この答申が出るちょっと前に法改正が先に起きてしまったこともあって、当時のコンセプトだった「生きる力」や「確かな学力」との整合性を取ろうとしていた感じが見て取れます。また、この頃の観点別評価は「4観点」でした。だから、当時は従来の理念や評価の枠組みを意識しながら進められたと思います。

少し時間が経ってから、高大接続答申が平成26年（2014年）に出されました。ここで初めて「学力の3要素」という言葉が出てきます。そもそもこの「学力の3要素」という言葉を最初に誰が言い出したのかを調べてみると、この頃の学習指導要領に合わせて、指導要録を検討するワーキンググループがあっ

たんですが、そのディスカッションの中で、2009年頃に出てきた言葉だと思われます。さらにその後、2010年くらいには、いろんな教育系の書籍にも「学力の3要素」という言葉が出現するようになりました。それで高大接続答申の中では、高等学校と大学でこの3要素をしっかりと育成しなさいという話になっていった、という流れです。

今回の学習指導要領のための答申では、学力の3要素が「資質・能力の3つの柱」として示されています。この「資質・能力」というのは、いわゆるコンピテンシーと読み替えてもいいもので、だいたひ概念が広がっています。ただ、基本的には学力の3要素に基づいていることには変わりありません。そして、この資質・能力の3つの柱という考え方は、実は幼稚園教育要領や保育所保育指針、さらに幼保連携型認定こども園教育・保育要領にも明記されています。つまり、幼児教育の段階からすでにこの考え方が取り入れられています。

さらに、今回の学習指導要領を受けての指導要録では、「3つの観点」で評価することが決められました。これにより、学習評価も学力の3要素と完全に対応する形になっています。こうして見てみると、幼児教育から大学教育までが「学力の3要素」を育成するという一本の流れでつながっていることがわかります。

先ほどご覧いただいた高大接続改革のコンセプトに関連して、もう1つ大事なポイントがあります（スライド16）。大学入試が変われば高校教育も変わるという波及効果が期待されているんですね。この効果は「washback effect（ウォッシュバック効果）」とも言われています。つまり、大学入試が「学力の3要素」をしっかりと評価する形に変われば、高校教育もその流れに合わせて変わっていく、という考え方が強調されているわけです。

先ほど触れた今の学習指導要領の方針、2016 年の内容ですが（スライド 17）、そこにも同じような論理が書かれています。前段では、「小中学校は非常に良好である」ということが書かれています。一方で、赤字部分にあるように、次のようなことが指摘されています。「大学入学者選抜に向けた対策が学習の動機付けとなりがちであること」、「現状の大学入学者選抜では知識の暗記・再生や暗記した解法パターンの適用の評価に偏りがちであること」、さらに「一部の AO 入試や推薦入試においては、いわゆる学力不問」、そして「高等学校における教育が小中学校に比べて知識伝達型の授業にとどまりがちである」という内容です。どこかで見たような文章ですが、基本的には高校教育の問題、そして大学入学者選抜への批判が書かれているわけです。このように、学習指導要領の改訂方針の中にも高大接続改革の方針が盛り込まれています。同じような表現が、こうして改めて出ているわけです。

さらに、今の学習指導要領改訂のための中教審答申を読んでいくと（スライド 18）、「高大接続」という項目があります。その中に「大学入学者選抜は、高等学校における学びを価値付け、その成果を大学教育においてさらに伸ばしていくものとして機能する」といった内容が書かれています。要は、高校と大学の教育内容をしっかり接続させることが強調されているわけです。

ここで改めて「高大接続改革」について少し考えてみたいんですが（スライド 19）、日本の高大接続、高校教育と大学教育をどう繋げるのかという点については、川嶋天津夫先生と佐々木隆生先生によれば、2 つの要素があると言われています。それは「教育で繋げていく」ということと「選抜で繋げていく」という、2 つの要素です。このうち、日本では、教育接続が弱いという指摘があります。そもそも高校教育の目的は、「高度な普通教

育」や、学校によっては「専門教育」を行うことです。一方で、大学教育というのは、ここに書かれている通り「深く専門の学芸を教授・研究する」ことが目的となっています。小中高までは、学びが積み上げ式になっているわけですが、大学はその積み上げを前提としていないという特徴があります。こういった背景もあって、教育内容の接続がなかなか難しいとされてきたようです。

そのため、いわゆる大学入試を通じて接続を図り、学力選抜が高大接続改革を規定するという状況があったと言われています。ただし、大学入試においては、高校教育の基盤なる学習指導要領が改訂されるたびに、入試科目や教科、出題範囲を調整していくことで、高校教育に合わせて変更されてきた、という流れがあります。これは皆さんもご存じかと思います。しかし、今回の高大接続改革の流れを見てみると、学習指導要領の答申でも学力の 3 要素による接続が強調されていることがわかります。これは、いわゆる教育接続に近い考え方だと言えるのではないのでしょうか。

さらに、大学入試のあり方に関する検討会議について触れておきたいと思います（スライド 20）。これは高大接続改革の一環として設置されたものですが、共通テストでの記述式問題や英語の民間試験の導入が見送りになった際に、改めて大学入試のあり方について検討された会議です。その提言書には「高大の円滑な接続」という言葉が明確に示されており、そこで新しい学習指導要領との整合性についても強調されています。特に注目すべきは「高等学校学習指導要領の考え方と齟齬を来さない選抜」という表現です。これが意味するところは、大学入試が高校教育の理念や内容と食い違わないよう配慮すべきだということです。

このことに関連して、従来から言われている「大学入試の 3 つの原則」にも触れておきたいと思います。大学入試に関しては、文部

省が昭和 46 年に出した答申、いわゆる 46 答申で示した「公平性の確保」「適切な能力の判定」「下級学校への悪影響の排除」という 3 つの視点が存在します。戦後の日本では、大学入試はこの 3 原則のどれを重視するかによってさまざまな改革が行われてきました。

今回の提言では、これらの 3 原則を単なる原則としてではなく、拡張的に解釈し直すことで、現代の大学入試における役割や機能について改めて再定義しているように見えます。その中で、「下級学校への悪影響の排除」という原則が、発展的に拡張されたものと捉えることができます。これを踏まえると、先ほど述べた高大接続改革のもう一つのコンセプト、つまり「大学入試が変われば教育も変わる」という波及効果に加え、「学習指導要領に合わせて大学入試を変える」という方向性も読み取れるのではないのでしょうか。このように見ていくと、高大接続改革において学習指導要領が極めて重要な位置づけを持っていることが明らかになります。

続きまして、少し話がトピック的になりますが、こうした状況の中で特に問題になってくる点について、個人的な関心も含めて 2 点に絞ってお話ししたいと思います。1 つ目はパフォーマンス評価についてです（スライド 21）。学力の 3 要素をどう評価するのかという問いに対して、今の学習指導要領のための答申では、評価方法について明確な方向性が示されています。そこでは、パフォーマンス評価を取り入れなさい、さらにはペーパーテストの結果にとどまらない多面的・多角的な評価を行うことが大切であると書かれています。

パフォーマンス評価とは何かというと、先ほどお話しした「真正な評価」にあたります。具体的には、知識やスキルを総合的に使いこなすことを求める課題のことで、例えば実演や作品の制作などが挙げられます。ただ、これがなかなか難しい面があります。どうして

も評定者の主観的な評価になりがちです。そこで出てくるのが「ルーブリック」です。ルーブリックとは、あらかじめ決めた採点の基準や指針であり、それに基づいて評価しようというものです。こうすることで、できるだけ評価のブレを減らして信頼性を保とうとするわけです。

それで、このパフォーマンス評価の質を測定論的に考えるときに（スライド 22）、特に大事になってくるのが「妥当性」と「信頼性」です。皆さんも聞いたことがあると思いますが、人を評価するときに、この 2 つがしっかりしていないと適切な評価にはなりません。妥当性というのは、対象をどれだけの確に測れているかを示すもので、信頼性は測定の結果がどれだけ安定して一貫しているかを意味します。特に学力のようなものは、目に見えないし触ることもできませんよね。物質的な実在性が弱いため、本当に測れているのかという問題は常に付きまといます。

こういった点から見ると、パフォーマンス評価は妥当性が高いと意義づけられていることが多いんです。もちろん本当にそうかは議論の余地がありますが、パフォーマンス評価を重視する立場の人は妥当性が高いと主張しています。一方で、先ほど触れた評定者間のばらつきの問題もあって、信頼性の確保が難しいとされています。

ここで考えてほしいのは、測定論的には「信頼性は妥当性の必要条件」だということです。妥当性が高ければ信頼性も高いはずですが、信頼性が高いからといって必ずしも妥当性が高いわけではありません。とはいえ、「妥当性が高い」と主張するのであれば、信頼性も確保されていないと筋が通らないと思います。この点については、どうしても矛盾や疑問を感じざるを得ません。ただ、妥当性と信頼性の関係には、実践的にトレードオフがあるとも言われています。つまり、妥当性を高めようとするればするほど信頼性が下がり

やすく、逆に信頼性を高めようとするとうと妥当性が下がってしまう、という関係性が指摘されてもいます。

さらにもう1つ重要な観点として、実行可能性があります。これは現場で本当に実施できるのかという視点です。どんなに優れた評価方法や測定方法が考案されたとしても、実際に現場で実行するとなると、時間やコストの問題が出てきます。そういった意味で、パフォーマンス評価は時間も労力もかなりかかると一般的に言われています。

加えて、パフォーマンス評価を考える際に気をつけなければいけないのが、高校での学習評価と大学入試の評価は根本的に違うという点です。高校の学習評価は、学びの過程や成果を総合的に見るものですが、大学入試の評価は多くの場合「選抜」が目的になります。評価の目的や前提条件が異なるため、両者を同じように捉えることには限界があるとも言えるでしょう。小中高における学習評価について、評価の目的、評価の基準、そして信頼性の程度という観点から見ていくと、重要なポイントが浮かび上がります。小中高では、今特に強調されているのが学習改善を目的とした評価です。そうすると、評価の手法としては形成的評価が重視されることになります。形成的評価というのは、学習の途中で生徒の理解度や習熟度を把握し、指導や学習の改善に役立てるための評価のことです。

一方で、大学入試の評価になると、これはハイスティクスな評価になります。ハイスティクスとは、評価が受験者の人生に大きな影響を与えるような、利害関係の大きい評価を指します。大学入試では、評価の目的は「選抜」であり、求められる評価の手法は総括的評価です。総括的評価は、学習の成果や達成度を最終的に判断するための評価で、形成的評価とは役割が異なります。

さらに、評価の基準についても違いが見られます。小中高では、学習指導要領に基づく

目標準拠評価、いわゆる絶対評価が中心になります。目標準拠評価では、生徒一人ひとりの学びが定められた目標にどれだけ達成できたかを基準に評価します。これに対して、大学入試では相対的な位置付けが重要になり、受験者同士の比較を前提とすることが多いです。集団に準拠した評価、いわゆる相対的評価が基本になります。

そして、信頼性についても、小中高での評価と大学入試では求められる水準が大きく違います。小中高では、学習改善に役立つ情報が得られれば、多少信頼性が低くても許容されることが多いですが、大学入試ではそうはいきません。評価の結果が受験者の人生を左右することになるので、極めて高い信頼性が求められるわけです。こう考えると、同じパフォーマンス評価でも、高校の評価手法や基準をそのまま大学入試に持ち込むのは難しい。大学入試でパフォーマンス評価を導入するのは、技術的にも運用的にもかなりチャレンジングなことですし、相当の技術力や運営能力が必要だと個人的には思います。

ただその一方で、パフォーマンス評価が重要だという認識は確実に広がっています（スライド 23）。特に探究学習が注目されている今、その成果を測る手法としてパフォーマンス評価への期待も高まっている状況です。例えば、内閣府科学技術イノベーション推進事務局では「探求力評価」という言葉でこれを推進しています。具体的には、「大学の入学者選抜や企業の就職採用試験において、探求的な活動を通じて身につく能力や資質を評価する」というもので、ここで例示されているのが「学力の3要素」などです。また、こうした探求力評価に関しては、「評価を適切に活用しているグッドプラクティスを調査し、それを積極的に横展開していく」という方針も示されており、事例として、桜美林大学や大阪大学、お茶の水女子大学などの選抜が取り上げられていました。

研究文脈でも「探究型大学入試」という形で整理されていて、大きく2つに分けられています。1つ目は、探究学習や活動の実績をそのまま評価する「実績評価型」の入試です。これは、高校時代に取り組んだ探究活動やその成果を重視する形です。2つ目は、探究学習や教科学習を通して得た学びの力を、大学が独自に実施する試験を通じて評価する「実力評価型」の入試です。こちらは、大学が設定する課題に対しての取り組みや姿勢、場合によっては発言なども含めて、総合的に実力を評価するものです。さらに、これに加えて「自己分析評価型」と「課題評価型」という評価方法もあります。自己分析評価型では、探究学習や教科学習を振り返って、自分の学びを自己分析する力や、それを出願書類や筆記試験で言語化する力が評価されます。一方、課題評価型では、事前に示された課題や課題図書をもとにレポートを書いたり、口頭試問を受けたりして、探究学習や教科学習の総合力を評価する形です。

こういった整理を見ると、探究型大学入試はかなり多様な形で展開されていて、それぞれの特性に応じた分析が進められていることがわかります。実際にこういった探究力を評価するものや探究型大学入試がどうなのかという点については、三菱総合研究所が委託研究を行っています（スライド24）。これまでの話ともつながるんですが、研究結果を見ると、成果はかなり良好です。入試を通じて入ってきた学生の質は高いと評価されています。

ただ、その一方で課題もいくつか挙げられています。まず、運用面の課題として指摘されているのが、実行可能性や持続可能性です。パフォーマンス評価はどうしても時間やコストがかかります。探究型大学入試も例外ではなく、運用面での負担がかなり大きいということが課題として挙げられています。こういった評価方法を、現実的に続けていけるのかという問題です。

もう一つの課題が評価面の問題です。特に信頼性の確保、中でも評価者間の信頼性がポイントです。同じ受験生に対して複数の評価者が採点をした場合、その結果にばらつきがないようにするのは簡単ではありません。これはパフォーマンス評価の宿命とも言え、やはり重要な課題として挙げられています。こういった課題はあるものの、探究型大学入試が持つ意義は大きいと思います。今後、運用面や評価面の課題をクリアするための改善や工夫がさらに求められているという状況だと感じます。

ここまで見てきたように、探究型大学入試やパフォーマンス評価には、実行可能性や持続可能性、そして評価の信頼性といった課題がつきまといます。特に評価者間のばらつきなど、パフォーマンス評価の特性上、避けられない問題も多いです。結局、こうした課題はまだ完全には解決できていないのが現状です。それでも大学入試にパフォーマンス評価を取り入れるためには、これらの課題にどう向き合うかが重要になってくると思います。

続いて、学力の3要素を一体的に把握するという点についてお話しします（スライド25）。これはコンピテンシーの説明でも触れましたが、人間の学力を情意的な部分も含めてどう一体的に評価すればいいのかについて、私自身も実証研究を行いました。

まず大きな課題となるのが、情意部分である「主体的に学習に取り組む態度」の評価です。この点については、学習評価に関するワーキンググループの報告書や国立教育政策研究所のガイドブックにも示されていますが、「主体的に学習に取り組む態度」は2つの側面から評価するよう求められています。

1つ目は、粘り強く学習に取り組む態度です。ここでは、主要な要因として学習の動機付けが重視されています。2つ目は、自らの学習を調整しようとする態度です。これには、メタ認知の要因が含まれています。この部分

が、当初よりも少し拡張されている点だと感じています。

さらに、知識・技能、思考力・判断力・表現力と主体的に学ぶ態度をどう一体化して評価するかという点も重要です。それぞれの観点で大きな差が生じないように評価を行うにはどうすればいいのか。これは、私自身も児童を対象にした研究を通じて、ずっと考え続けてきた課題でもあります。

そのときに、1980年代に Schmeck という研究者が提案したモデルがとても示唆的だと感じました（スライド 26）。簡単に説明すると、このモデルではモチベーションが起点となり、それに基づいて学習方略、つまり学習者が取り組むさまざまな方法が選択され、その結果として学習成果に繋がる、というものです。ここで注意していただきたいのは、動機付けが高いからといって、すぐに学習結果が出るわけではないという点です。大事なものは、適切な方法や学習の調整、効果的な攻略法といったものをうまく駆使することで、初めて学習の成果に結びつくということなんです。ここはモデルの中でも非常に重要な部分です。先ほどお話しした「主体的に学習に取り組む態度」の軸の1つである動機付けは、まさに「学習への意欲」のことです。そしてもう1つの軸である「自ら学習を調整しようとする態度」は、メタ認知にあたります。これらを経由して、最終的に学習の成績へと結びついていくというわけです。

実際にこれを測る場合、動機付けについては「行動観察」や「自己報告質問紙」といった手法がよく使われます。同様に、メタ認知に関しても「行動観察」や「自己報告質問紙」といった多様な方法があります。そして最終的な学習結果については、教師が作成するテストや標準学力検査、パフォーマンス課題など、さまざまな評価手法があります。私はこの研究を、学力検査を用いて実施してみました。

結果を申し上げる前に、学習動機付けの基本について少しお話しさせていただきます（スライド 27）。学習動機付けと聞くと、皆さんはどんなものを思い浮かべるでしょうか。大きく分けると、「自律か他律か」、そして「目的か手段か」という2つの軸で捉えられてきました。典型的な内発的動機付けというのは、学習そのものが目的で、自律的に取り組んでいる状態です。例えば、「面白いからやる」「好きだから自ら進んで学ぶ」といったような場合です。教育の中では、これが一番重要だとずっと言われてきました。一方で、外発的動機付けというのは、学習が手段であり、他律的に取り組んでいる状態です。例えば、「教師からやりなさいと言われたから仕方なく学ぶ」というような状況です。こういった2つの軸で、学習動機付けは考えられてきたわけです。

この2つの動機付けがずっと言われてきましたが、動機付けはそれだけではりません。最近では社会化された外発的動機付けというものも注目されています。これは、学習が手段ではあるけれど、自律的に取り組んでいる状態を指します。例えば、「憧れの大学に入りたいから学ぶ」という状況です。ここが実は、人間の動機にとって重要で決定的な部分だという考え方が最近出てきています。

なお、学習は目的であっても、他律的に取り組んでしまう場合は、疑似内発的動機付けと呼ばれたりもします。これはどういうことかということ、教師のお膳立てによってやる気を保っている状態です。表面的に面白いからやっているけれど、そのお膳立てがなくなった途端に、やる気が一気になくなってしまうようなケースです。こういう状態があるとされています。

近年特に注目されているのが、「自律か他律か」という次元でして（スライド 28）、ここで自己決定理論が非常に重視されるようになっていきます。どういうことかということ、動

機付けを考えたときに、外発的な動機、たとえば「叱られるからやる」というものと、内発的な動機「面白いからやる」の間には、実はいくつかのバリエーションがあります。外発的な動機付けにも段階があって、例えば「恥をかきたくないから勉強する」、「重要だから勉強する」、そして「面白いからやる」といったように、だんだんと自律的になっていく連続的な過程があります。単純に「面白いからやる」とか「叱られるからやる」みたいな二項対立ではありません。

私が行った実験ですが（スライド 29）、対象は小学校 5 年生です。Schmeck のモデルに基づいて、動機付け、学習方略、学習結果の関連性を検証してみました。具体的には、5 年生のときに「動機付けの 4 つのタイプ」と「メタ認知」に関する質問紙調査を行い、1 年後のテスト成績にどう影響するのかを調べました。小学生の場合、「面白いから勉強する」とか「重要だから勉強する」といった動機付けがメタ認知を促して、テストの成績に繋がるということがわかりました。ところが、中学生になると、先行研究では「面白いから」という動機付けはあまり効かなくなっていて、「重要だから勉強する」という動機付けが強く働き、そこからメタ認知が促されて成績に結びつく、という結果が出ています。

ここで言いたいのは（スライド 30）、ペーパーテストの結果にも「主体的に学習に取り組む態度」がちゃんと反映されることです。それに加えて、自律的な動機付け、つまり自分から学ぶという意識が大事になってきます。この自律的な動機付けを高めることで、メタ認知が促されて良い成績に繋がるのですが、そのときに発達段階によって「どの動機付けに関わるか」が変わってくるわけです。小学生のときは「面白いから勉強する」が一番効くんですが、中学生になると「重要だから勉強する」という動機付けが強くなります。おそらく高校生も同じように「重要だから」が

中心になっていくでしょう。そう考えると、学力の 3 要素を考える際には、発達段階による違いをしっかりと踏まえる必要があると言えます。同じ「主体的に学習に取り組む態度」でも、その中にはいくつかバリエーションがあります。教育学で重視される理念としての「真正性」も大事ですが、それに加えて、心理学的なエビデンスに基づく「生態学的妥当性」をどう整合させていくかが重要になってきます。ここが今、私が特に強調したいポイントです。

最後にまとめさせていただきます（スライド 31）。今まで見てきたように、現在の大学入試の多様化を見ると、選抜資料が複雑化し、独自化していることが分かります。これは、学力の 3 要素、つまりコンピテンシーについて「真正の評価」を実現しようとするためです。その結果として、各大学が選抜資料のユニークさを競い合うような状況が生まれている可能性があるという点について、倉元直樹先生からのご指摘がありました。

結果的に、高校は複雑化した選抜資料への対応にかなり苦労しているというのが現状です。それに加えて、私が以前私立大学に勤めていた経験からお話すると、定員確保という経営的な問題は本当に深刻です。

この問題に関して、最後に少しエビデンスをお示ししたいと思います（スライド 32）。これは入学者数から募集人員を引いた数字です。これを見ると、国立大学は全体的に、募集人員よりも多くの学生が入学していることがわかります。特に一般入試での合格者が多いということです。一般選抜以外の方法では、実は募集人員よりも多く取っていないという現状が見えてきます。それに対して、公立大学は全体的に見ると（スライド 33）、募集人員よりも多く入学者を取っていて、かなり安定している感じですが、両方とも多く取っているという状況が見て取れます。

私立大学では（スライド 34）、全体として

はほぼ定員通りの状況ですが、注目すべきは、一般選抜がますます定員割れを起こしている一方、一般選抜以外の方法では定員を大きく上回っていることです。結果的として、全体の定員の過不足が相殺されている状況がうかがえますこれも非常に大きな問題で、この後、どこまで議論できるかはわかりませんが、経営的な視点はやはり無視できない重要な要素だと言えます。

さらに、もう一度言いますが（スライド35）、パフォーマンス課題というのはやはり難しいです。真正な評価を基にした選抜方法は資料が複雑化・独自化していくわけですが、その妥当性や信頼性をどう検証していくのか、これも非常に重要な問題です。この点について、2016年度の実施要項には「入学者の追跡調査を通じて選抜の妥当性と信頼性を検証する」ということが強調されています。このことは、高大接続答申にも記載されています。ここが本当に重要なポイントだと思います。真正な評価を進めるにしても、追跡調査を実施することが重要です。

ただし、追跡調査をどう設計するかも非常に大きな問題です。例えば、高校教育から大学の入試、さらには入学後の大学教育に至るまで、学力をずっと連続性のあるものとして捉えていくのか、それとも大学入学後の一定の段階まで追跡するのか、あるいは大学入試で一旦リセットしてしまうのか、これによって追跡調査の考え方が大きく異なります。実は最近、追跡調査に関する論文を書かせていただいたのですが、その中でいろんな取り組みをレビューしてみると、どの立場でもそれぞれの考え方があることがわかりました。こういったことも含めて、真正評価というものが今後、本当にいいものかどうかということをしっかり検証していく、そのための調査の仕方も工夫が必要だということが、ここで私が強調したいところでございます。

最後にいろいろな観点をお示ししましたが、

これで私の基調講演を終わりにしたいと思います。

（拍手）

林如玉助教(司会)：

宮本先生、ありがとうございました。ただいまの宮本先生のご講演に関するご質問等につきましては、先ほどご案内させていただきました通り、ウェブ上での入力をお願いいたします。ここで、休憩とさせていただきます。今から約15分休憩を挟ませていただき、15時35分から第2部を開始させていただきます。

基調講演

高校教育の転換と大学入試のジレンマ

宮本 友弘
(東北大学)

1

本日の内容

- 1. 大学入試の多様化の現状
- 2. 新学習指導要領と高大接続改革
- 3. 「パフォーマンス評価」と大学入試
- 4. 「学力の3要素」の一体的把握
- 5. まとめ

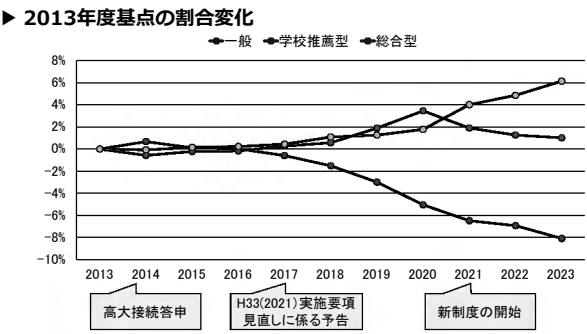
2

大学入試の多様化の現状①



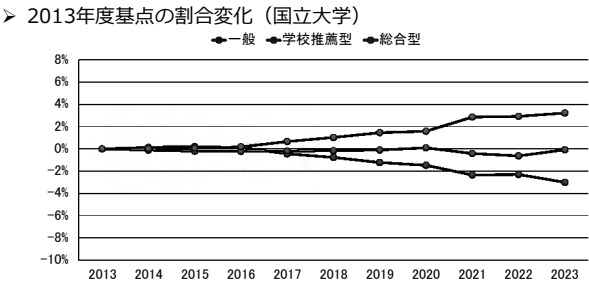
3

大学入試の多様化の現状②



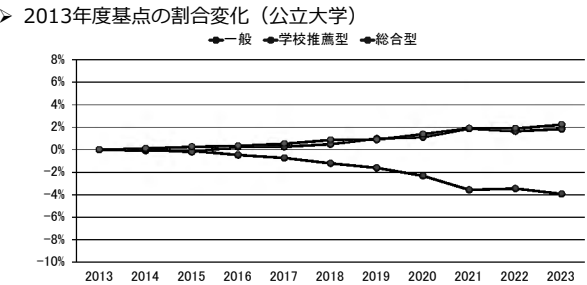
4

大学入試の多様化の現状③



5

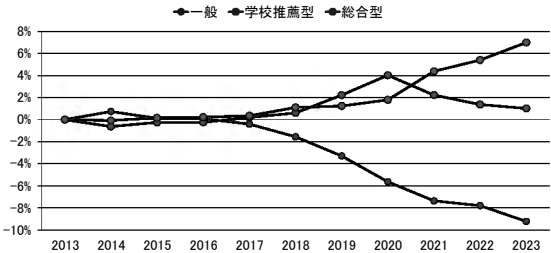
大学入試の多様化の現状④



6

大学入試の多様化の現状⑤

➤ 2013年度基点の割合変化（私立大学）



7

大学入試の多様化の現状⑥

- 大学入試の「多様化」とは？
 - ・ 戦後日本の大学入学者選抜の歴史の変遷の2つの潮流：共通試験と多様化（中村,2020）
 - ・ 「多様化」が指す内容は、時代背景、社会状況等によって異なる
 - 多様化の3つの側面（倉元他, 2008）
 - ① 選抜資料の多様化（選抜方法の多様化、評価尺度の多様化）
 - ・ 学力検査以外の選抜資料（調査書、面接等）の積極的導入
 - ② 学生集団の多様化
 - ・ 留学生、帰国子女、社会人等の受け入れ
 - ③ 受験機会の複数化
 - ・ 一人の受験生に対して同一年度内に複数の受験機会を保障（国立大学特有）
 - 現在の多様化を方向づけているもの
 - ・ かつては「過度の受験競争の解消」という政策課題（倉元, 2022）
 - ・ 少子化（18歳人口が2021年から減少局面）、高等教育の大衆化、定員確保・管理（大学経営）
- 高大接続改革：「学力の3要素」の多面的・総合的な評価

8

大学入試の多様化の現状⑦

▶ 高大接続改革

- ・ 改革の目玉（共通テストでの記述式問題、英語民間試験の活用）は見送られたが、改革の基本コンセプトである「学力の3要素」の多面的・総合的評価は堅持
- ・ 「大学入学者選抜実施要項」には**H28(2016) 年度**から明記

（第1 基本方針）
能力・意欲・適性等の判定に当たっては、学力を構成する特に重要な以下の三つの要素のそれぞれを適切に把握するよう十分留意する。なお、高等学校の学科ごとの特性にも配慮する。
① 基礎的・基本的な知識・技能（以下、「知識・技能」という。）
② 知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力（以下、「思考力・判断力・表現力等」という。）
③ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度（以下、「主体性・多様性・協働性」という。）
また、各大学は、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）を明確にするとともに、これに基づき、入学後の教育との関連を十分に踏まえた上で、入試方法の多様化、評価尺度の多元化に努める。

※ 「主体性・多様性・協働性」という略記は、H29（2017）年度からは無し

9

大学入試の多様化の現状⑧

● 各入試区分の選抜資料 ※「令和7年度大学入学者選抜実施要項」に基づき作成

選抜資料	一般選抜	総合型選抜	学校推薦型選抜
調査書	○	◎	◎
学力検査	◎	○	○
共通テスト	◎	○	○
小論文	○	○	○
面接	○	◎	○
入学志願者本人の記載する資料	○	◎	○
その他	エッセイ、面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション、各種大会や顕彰等の記録、総合的な探究の時間などにおける生徒の探究的な学習の成果等に関する資料やその面談等	プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目等に係るテスト、資格・検定試験の成績等	

○：主要資料

「主体性等」を積極的に評価

「知識・技能」、「思考力等」を適切に評価

- ▶ 入試の実質と入試区分の境界線が曖昧に（倉元, 2022）
 - ・ 「大学による自由設計入試」（倉元, 2013）とされる、AO入試は既存の多様な入試区分の境界領域を曖昧化する形で実施されてきた(木村,2020)
 - ・ AO入試に由来する総合型選抜が拡大する傾向にもつながっている（？）
- 選抜資料の多様化 → 複雑化、独自化

10

新学習指導要領と高大接続改革①

● 高校の新学習指導要領のポイント

- ・ 「資質・能力の三つの柱」の育成 ← 「学力の3要素」を踏襲したもの（市川, 2019）
- ・ 教科・科目の再編：「探究」の重視
- ・ 「観点別評価」の導入（指導要録への記入） など

▶ コンピテンシー・ベースの改革の日本版（石井, 2023）

- ・ コンピテンシー：社会が求める実力(職業上の実力や人生における成功を予測する能力)
- ・ その育成は世界的潮流：OECDのキー・コンピテンシーなど
- 「真正（authentic）の学び」を通して育成
- ・ 学校外や将来の生活で遭遇する本物の、あるいは本物のエッセンスを保持した活動
- ・ 「知っている・できる」（知識の獲得と定着）, 「わかる」（知識の意味理解と洗練）, 「使える」（知識の有意義な使用と創造）のうち「使える」レベルの知識とスキルと情意を一体的に育成 ← ブルーム（Bloom, B. S.）の「教育目標の分類学」に依拠

➤ 真正の評価：豊かなテスト、豊かなタスク（パフォーマンス評価等）の工夫

11

新学習指導要領と高大接続改革②

▶ 高大接続改革の中で実施される改訂

- ・ 諮問（中央教育審議会, 2014a）において「高等学校教育について、中央教育審議会における高大接続改革に関する議論や、これまでの関連する答申等も踏まえつつ」検討を行うことが要請
 - ・ 中教審答申（中央教育審議会, 2016）p.70
（高大接続改革等の継続）
 - 今回の学習指導要領改訂は、高等学校教育を含む初等中等教育改革のみならず、大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革をも進めようという、高大接続改革の実現を目指して実施されるものである。
 - 第2部第1章6.（5）においても述べるように、高等学校教育における子供たちの学びの成果が、大学入学者選抜を通して適切に評価され、大学教育を通して更に伸ばしていくことができるよう、今回改訂の趣旨も踏まえつつ、高大接続改革が引き続き強力に推進されるよう求める。
- 答申の複数箇所「高大接続改革」、「大学入学者選抜」について言及

12

新学習指導要領と高大接続改革③

➤ 前学習指導要領の中教審答申（中央教育審議会，2008）pp.147-148

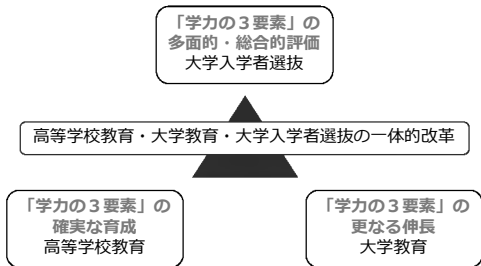
（2）企業や大学等に求めるもの
○ 次に、大学については、子どもたちの学習だけではなく、社会の在り方にも大きな影響を与える大学入学者選抜の改善に取り組むよう強く求めたい。
第一に、入学者選抜において、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等についてもバランスよく問い、これらの力を高等学校教育と大学教育が連携してはくむことが重要である。このことは大学教育の改善にとっても極めて重要であると考ええる。記述式など思考力・判断力・表現力等を問う出題の充実を求めたい。このような観点から、例えば、高校生の科学や作文などについての各種の質の受賞歴を評価することも有効な手法と考えられる。
また、学校教育において子どもたちの社会的な自立を重視する観点から、志願者のボランティア活動などの社会参加の状況を評価するなどの取組も重要である。
第二に、18歳人口の減少による「大学全入時代」における大学入学者選抜の現状は、高校生の学習意欲などに大きな影響を及ぼしている。中央教育審議会全体で、高等学校の教育課程、大学入学者選抜、学士課程教育を見直し、学習歴の適切な評価などにより学力の水準を確保するとともに、生徒・学生が目標をもって学習に取り組むことができるような改善・工夫について検討することが必要であると考えられる。

➤ 高大接続改革に類似した発想が見て取れる

13

新学習指導要領と高大接続改革④

● 高大接続改革のコンセプト



14

新学習指導要領と高大接続改革⑤

● 「学力の3要素」の変遷

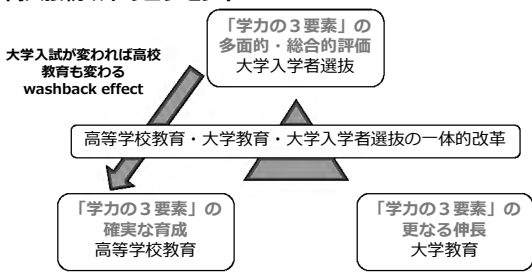
学習評価と完全対応				
学校教育法改正 H19（2007） 第30条第2項	中教審答申 H20（2008） 学力の重要な要素	高大接続答申 H26（2014b） 学力の三要素	中教審答申 H28（2016） 資質・能力の三つの柱	指導要録報告 H31（2019） 三観点
知識・技能	知識・技能	知識・技能	生きて働く 「知識・技能」	知識・技能
思考力・判断力・ 表現力等	思考力・判断力・ 表現力等	思考力・判断力・ 表現力等	未知の状況にも対応できる 「思考力・判断力・表現力等」	思考・判断・表現
主体的に学習に 取り組む態度	学習意欲	主体性を持って 多様な人々と 協働して学ぶ態度	学びを人生や社会に 生かそうとする 「学びに向かう力・人間性等」	主体的に学習に 取り組む態度
小・中・高等学校	「生きる力」「確かな 学力」「4観点」 との整合性	高等学校・大学	幼稚園教育要領、保育所保育指針、 幼保連携型認定こども園教育・保育要領にも	

➤ 幼児教育から大学教育までを「学力の3要素」の育成で貫く

15

新学習指導要領と高大接続改革⑥

● 高大接続改革のコンセプト



16

新学習指導要領と高大接続改革⑦

● 中教審答申（中央教育審議会，2016）p.48

（創意工夫に基づく指導方法の不断の見直しと「授業研究」）
○ ……特に小・中学校では、全国学力・学習状況調査において、主として「活用」に関する問題（いわゆるB問題）が出題され、関係者の意識改革や授業改善に大きな影響を与えたことなどもあり、多くの関係者による実践が重ねられてきている。「アクティブ・ラーニング」を重視する流れは、こうした優れた実践を踏まえた成果である。
○ 他方、高等学校、特に普通科における教育については、自らの人生や社会の在り方を見据えてどのような力を主体的に育むかよりも、大学入学者選抜に向けた対策が学習の動機付けとなりがちであることが課題となっている。現状の大学入学者選抜では、知識の暗記・再生や暗記した解法パターンの適用の評価に偏りがちであること、「一部のAO入試や推薦入試においては、いわゆる学力不問と揶揄されるような状況が生じていることなどを背景として、高等学校における教育が、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであることや、卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながっていないことなどが指摘されている。

➤ 小・中は良好

➤ 高校教育批判

➤ 大学入学者選抜批判

17

新学習指導要領と高大接続改革⑧

● 中教審答申（中央教育審議会，2016）p.122

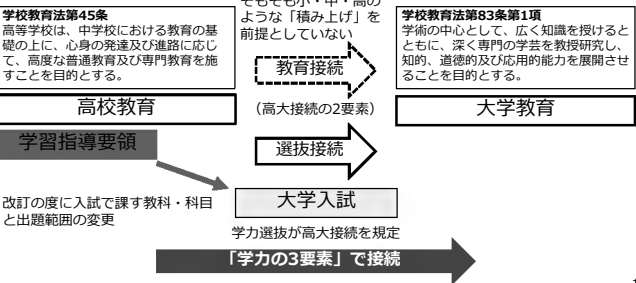
（5）高大接続
○ 現在進められている高大接続改革は、大学入学者選抜の在り方のみが議論されているわけではなく、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の在り方を一体的に改革してこうとするものであることに留意が必要である。
○ 本答申が示すように、次期学習指導要領に基づく高等学校教育は、生徒一人一人に資質・能力を育むことや、アクティブ・ラーニングの視点で生徒の学びの質を高めていくことなどを目指すものである。大学入学者選抜においても、高等学校教育を通じて育まれた生徒の力を多面的に捉えて評価していくための改革が進められている。こうした中で、大学入学者選抜は、高等学校における学びを価値付け、その成果を大学教育において更に伸ばしていくためのものとして機能することになる。

➤ 高大の教育内容の接続を強調

18

新学習指導要領と高大接続改革⑨

- 日本型の高大接続（川嶋, 2022; 佐々木, 2022）



19

新学習指導要領と高大接続改革⑩

- 大学入試のあり方に関する検討会議の提言（2021）pp.3-4

原則③：高等学校教育と大学教育を接続する教育の一環としての実施（高大の円滑な接続）

- また、新学習指導要領の実施に当たり、高校教育関係者が一丸となって、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を通して、生きて働く知識・技能の習得や未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養を目指す教育改革を推進しており、こうした高等学校学習指導要領の考え方と齟齬を来すことのない選抜に改善していく必要がある。入試改革に過度に期待することは適切ではないが、高等学校以下の教育に望ましい影響やメッセージを与え得る大学入学者選抜に改善することは重要である。

- いわゆる「大学入試の三原則」（文部省, 1971など）のうち「下級学校への悪影響の排除」を発展的に拡張
- 「大学入試が変われば高校教育も変わる」→「学習指導要領に合わせて大学入試を変える」

20

「パフォーマンス評価」と大学入試①

- 「学力の3要素」をどう評価するか？

・ 中教審答申（中央教育審議会, 2016）p.63

3. 評価に当たっての留意点等

また、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。

➢ パフォーマンス評価とは（西岡他, 2022）

- ・ パフォーマンス課題によって、高次の能力を可視化させ、直接的に評価する方法
- ・ パフォーマンス課題とは、知識やスキルを総合して使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような課題で、実演（プレゼンテーション、ディベート、演技、演奏など）と作品の制作（レポート、論文、ポスターなど）など
- ・ 課題の採点は、評定者の主観的評定によるが、その際、「ルーブリック」という採点指針を使用。

21

「パフォーマンス評価」と大学入試②

- パフォーマンス評価の測定論的特徴

- ① 妥当性（対象をどれだけ的確に測れているか）
 - 妥当性は高い（と意識づけられている）
 - ② 信頼性（測定の結果がどれだけ安定、一貫しているか）
 - 評価者間信頼性の確保が難しい
 - ③ 実行可能性（現場で本当に実施できるか）
 - パフォーマンス評価は時間と労力が相当にかかる
- 信頼性は妥当性の必要条件
両者の関係はトレードオフ

- 高校での学習評価と大学入試の評価の違い

	小・中・高での学習評価	大学入試の評価 （ハイスティクスな評価）
評価の目的	学習改善，形成的評価の重視	選抜，総括的評価
評価の基準	目標に準拠した評価	集団に準拠した評価
信頼性の程度	低くてもある程度は許容	高いことが必要

- 大学入試でパフォーマンス評価を導入するのはチャレンジング

22

「パフォーマンス評価」と大学入試③

- 探究への期待：大学入試でのより高度なパフォーマンス評価

- 探究力評価（内閣府科学技術・イノベーション推進事務局, 2022）
 - ・ 大学の入学者選抜や企業の就職採用試験の際に、探究的な活動を通して身につく能力・資質等（学力の3要素）の評価を適切に活用しているグッドプラクティスを調査し、積極的に模倣を進める
 - ・ 事例：桜美林大学、大阪大学、お茶の水女子大学など

- 探究型大学入試（田中他, 2023）

探究学習での学びや活動の実績自体を評価	探究学習・教科学習を通して得た学びの能力を、別の課題（独自試験）を用いて評価		
実績評価型	実力評価型	自己分析評価型	課題評価型
高等学校での探究学習の成果やプロセスなどを評価	大学が実施する試験において、設定された課題に取り組む姿勢や発言を含む実力を総合的に評価	探究学習・教科学習を総合的に振り返って自己分析する力、独自の出願書類や筆記試験で言語化する能力を評価	事前に示した課題や課題図書に基づくレポート、口頭試問から探究学習、教科学習の総合力を評価

23

「パフォーマンス評価」と大学入試④

- 成果は良好であるが課題も（三菱総合研究所, 2022, pp.236-237）

- 入試の運用面における課題
 - ・ 探究力評価の規模拡大を望む意見があるものの体制・費用対効果等の観点で課題
 - ・ 選抜方式の多様化による現場負担の増加
 - ・ 大学が本来求めている受験者層以外からの出願
- 探究力の評価面における課題
 - ・ 異なる評価者による異なる評価結果
 - ・ 大学が求める人物像と実際に評価を行う現場との共通意識の形成
 - ・ スキル重視による探究力評価の画一化
 - ・ 「成果」の過度な評価による高校教育の探究学習への悪影響
 - ・ 探究力評価のためのソフト・ハードが未熟

24

「学力の3要素」の一体的把握①

●「主体的に学習に取り組む態度」の評価

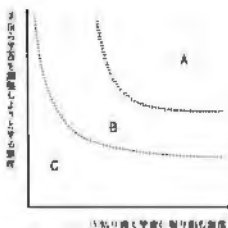
➢ 2つの側面からの評価

- ① 粘り強く学習に取り組む態度
 - ・ 要因 学習動機づけ
- ② 自らの学習を調整しようとする態度
 - ・ 要因 メタ認知

➢ 「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」との関連

- ・ 3つの観点ごとに大きな差は生じないことが想定

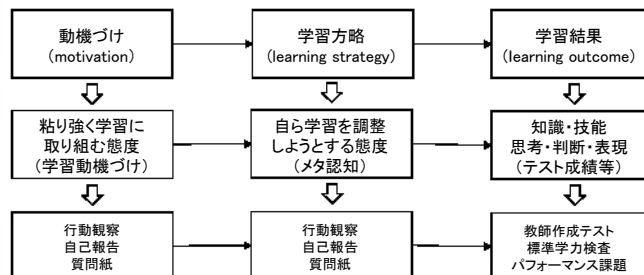
➢ どう統合するか？



25

「学力の3要素」の一体的把握②

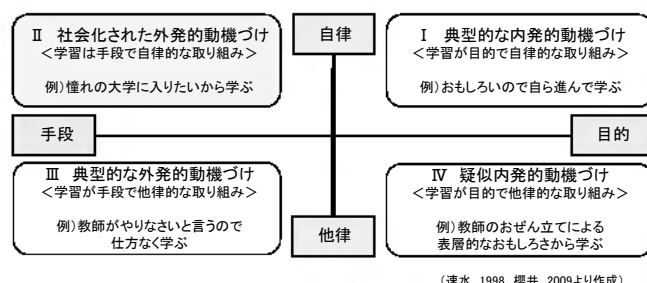
● Schmeck (1988) のモデルからの示唆



26

「学力の3要素」の一体的把握③

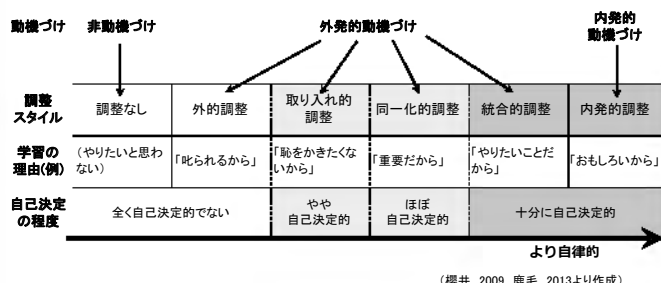
● 学習動機づけ再考



27

「学力の3要素」の一体的把握④

● 自己決定理論



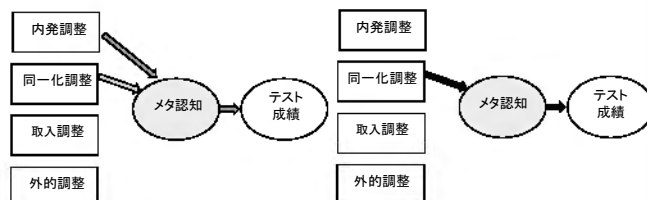
28

「学力の3要素」の一体的把握⑤

▶ 検証結果

➢ 小学生5年生 (宮本, 2020)

➢ 中学1～3年生 (西村他, 2011)



※ 内発調整、同一化調整は、自律的動機づけ

29

「学力の3要素」の一体的把握⑥

➢ ペーパーテストの結果にも「主体的に学習に取り組む態度」はしっかり反映される

- 自律的動機づけが鍵を握る
 - ・ 自律的動機づけを高めることでメタ認知が促進され、それによりテスト成績（知識・技能、思考・判断・表現）が促進される

➢ 発達段階によって関与する自律的動機づけが異なる

- ・ 小学生 内発調整（おもしろいから）、同一化調整（重要だから）
- ・ 中学生 同一化調整（重要だから）

▶ 「学力の3要素」については発達の様相の違いをもう少し踏まえるべき

- 理念としての教育的な「真正性」と、エビデンスに基づく心理学的な「生態学的妥当性」をどう整合させるか？

30

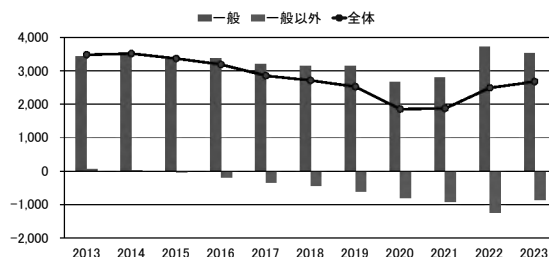
まとめ①

- 現在の「大学入試の多様化」は「選抜資料の複雑化・独自化」
 - ・「学力の3要素」というコンピテンシーについて「真正の評価」をするため
- 各大学が選抜資料のユニークさを競うような状況が生まれてもいる（倉元, 2022）
 - ・高校も複雑化した選抜資料への対応に苦慮
- ▶ 定員確保という経営的な問題

31

まとめ②

- 大学経営の視点：過△欠員（入学者数－募集人員）の推移（国立大学）

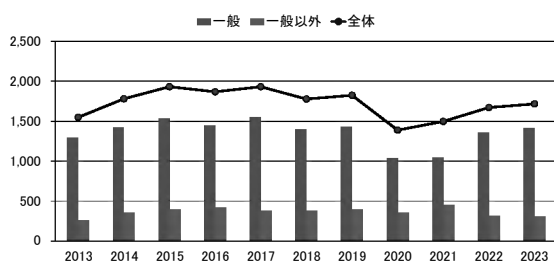


注）木村（2020）を参考に作成

32

まとめ③

- 大学経営の視点：過△欠員（入学者数－募集人員）の推移（公立大学）

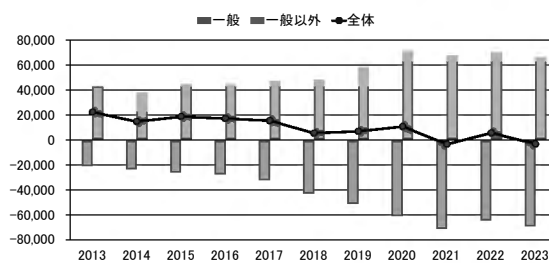


注）木村（2020）を参考に作成

33

まとめ④

- 大学経営の視点：過△欠員（入学者数－募集人員）の推移（私立大学）



注）木村（2020）を参考に作成

34

まとめ⑤

- ▶ パフォーマンス課題等の「真正の評価」による選抜方法の妥当性・信頼性の検証がますます重要

H27(2015) 年度要項
「各大学は、入試に関する研究委員会を設けて調査研究を行い、その成果を入試に反映させることが望ましい」

H28(2016) 年度要項
「各大学は、入試に関する研究委員会を設け、入学者の追跡調査等による、選抜の妥当性・信頼性の検証を行い、その成果を入試に反映させることが望ましい」

高大接続答申を受けて

- ▶ 追跡調査をどう設計するか自体も課題



35

謝辞

本発表は JSPS 科研費 JP21H04409, JP23K20711 の助成を受けたものである。

36

引用文献

- 中央教育審議会 (2008). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm
- 中央教育審議会 (2014a). 初等中等教育における教育課程の基幹等の在り方について（諮問） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm
- 中央教育審議会 (2014b). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf
- 中央教育審議会 (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 大学入試のあり方に関する検討会議(2021). 大学入試のあり方に関する検討会議 提言 https://www.mext.go.jp/content/20210707_mxt_daijigaku02-000016687_13.pdf
- 遠水敏彦(2013). 自己形成の心理―自律的動機づけ 金子書房
- 市川伸一（編）(2019). 2019年改訂 速解 新指導要録と「資質・能力」を育む評価 ぎょうせい
- 石井英真(2023). 中学校・高等学校 授業が変わる学習評価深化論 旺文文化
- 川嶋太津夫(2022). 高大接続改革の現在と展望 大阪大学高等教育・入試研究開発センター（編）未来志向の大学入試デザイン論(pp.15-31) 大阪大学出版会
- 木村拓也(2020). 入試の多様化の経緯と現状 中村孝康（編）大学入試がわかる本―改革を議論するための基礎知識（pp.45-65） 岩波書店
- 鹿毛雅治(2013). 学習意欲の理論―動機づけの教育心理学 金子書房
- 倉元直樹(2013). 自分が面倒を見る学生は自ら選ぶ 2014年版 大学ランキング, 64-65.
- 倉元直樹(2022). 大学入試の多様化、その終着点はどこに？ 現代思想, 50（12）, 138-147.
- 倉元直樹・富山明華・西郡大(2008). A O入試の実情調査(1)―大学入試の多様化とA O入試― 日本テスト学会第6回大会発表論文集, 82-83.
- 教育課程部会 (2019). 児童生徒の学習評価の在り方について（報告） https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602_1_1_1.pdf
- 三菱総合研究所(2022). 第6期科学技術基本計画に関する調査・分析等の委託 報告書 <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/6data/2021report13.pdf>

- 宮本友弘(2020). 資質・能力の三つの柱に対応した標準学力検査の活用【前編】―「主体的に学習に取り組む態度」を中心に― 指導と評価, 第66巻2月号, 46-49.
- 文部科学省 (2010). 高等学校（全日制の課程・定時制の課程）指導要録（参考様式） https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11373293/www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2012/08/07/1292900_03_1.pdf
- 文部科学省 (2018). 平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について（通知） https://www.mext.go.jp/component/b_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1397731_03.pdf
- 文部省 (1971). 教育改革のための基本的施策 今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について 中央教育審議会答申 大蔵省印刷局
- 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局(2022). 探究力評価への挑戦 主に大学入試における事例 https://www8.cao.go.jp/cstp/ky_gousei/kyoukukulinza/05_lireisyu_rs.pdf
- 中村高康(2020). これからの入試改革議論に必要なこと 中村孝康（編）大学入試がわかる本―改革を議論するための基礎知識（pp.v-xxi） 岩波書店
- 西村多久保・河村茂雄・櫻井茂男(2011). 自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス―内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるか？― 教育心理学研究, 59, 77-87.
- 櫻井茂男(2009). 自ら学ぶ意欲の心理学―キャリア発達の見点を加えて― 有斐閣
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治（編）(2022). 新しい教育評価入門―人を育てる評価のために[増補版] 有斐閣
- 佐々木隆生(2022). 大学入試の変遷と多様化 大阪大学高等教育・入試研究開発センター（編）未来志向の大学入試デザイン論(pp.32-51) 大阪大学出版会
- Schmeck, R. R. (1988). Individual differences and learning strategies. In C. E. Weinstein, E. T. Goetz, & P. A. Alexander (Eds.), Learning and study strategies: Issues in assessment, instruction, and evaluation (pp.171-191). San Diego, CA: Academic Press.
- 田中孝平・大野真理子・岡田航平(2023). 探求型大学入試における高大接続観―大学教職員へのインタビュー調査を手がかりに― 名古屋高等教育研究, 23, 437-457.

現状報告者紹介

現状報告者 1

加美山 若奈（かみやま わかな）氏

1985 年宮城県生まれ

〔教員歴〕

宮城県気仙沼西高等学校教諭（3 年間）

宮城県佐沼高等学校教諭（現職）

〔主な教育活動〕

国語科。

現勤務校にて進路指導部員を 9 年間務め、主に進学指導にあたった。

〔その他の特記事項〕

現在、東北大学大学院博士後期 3 年の課程に社会人学生として在籍。

現状報告者 2

松村成通（まつむら しげみち）氏

1965 年山口県生まれ

〔教員歴〕

山口県立美祢工業高等学校教諭（5 年間）

山口県立大津高等学校教諭（12 年間）

山口県立下関南高等学校教諭（16 年間）

山口県立下関西高等学校教諭（現職・3 年目）

〔主な教育活動〕

進路指導部長、バスケットボール部顧問

〔その他の特記事項〕

2014 年度 文部科学大臣優秀教職員表彰

2011 年度（2 年間） 山口県教育力向上指導員（教科指導）

現状報告 1：加速する大学入試の多様化と高校現場の実態 ——出願書類作成指導に関する調査から——

宮城県佐沼高等学校
加美山 若奈 教諭

【講師紹介】

林如玉助教（司会）：

それでは、お時間になりましたので、これより第2部、現状報告に入らせていただきます。現状報告の1番目としまして、「加速する大学入試の多様化と高校現場の実態——出願書類作成指導に関する調査から——」ということで、宮城県佐沼高等学校教諭の加美山若奈先生、ご講演よろしくをお願いいたします。

加美山若奈教諭：

それではよろしくお願いいたします。宮城県の佐沼高等学校に勤めております加美山若奈と申します。こちらにあります通り、大学入試の多様化が進む中で高校現場の実態についてお話しさせていただきます。特に先ほど宮本先生の基調講演にもありましたように、選抜資料の多様化や評価尺度の多次元化といった点について、私は出願書類の作成指導に関する調査結果を報告させていただければと思います。

出願書類は高校の現場では大学入試の入り口にあたるものとして重要な位置を占めています。生徒たちも大きな努力をしている部分ですので、その点について今回は報告させていただきたいと思います。

現在、私が勤務している学校は、地域の旧制中学校を前身とする地方の公立校で、進学拠点校として地域における重要な役割を担っています。しかし、いくつかの課題も抱えており、特に町の人口減少や少子化の影響で、入学志望者数が大きく減少しています。

それによって選抜というふうなところがな



かなか機能せず、ときには定員を割ってしまったりとか、あとはほぼ定員と同じぐらいの募集というふうな形になっています。そうしますと、生徒の学力ですとか、あとは希望進路が非常に多様になっておりまして、ほとんど進路多様校というふうな様相になっております。

こうした状況の中で、生徒一人ひとりの希望を大切にしたいという思いから、指導の個別化や多様化が同時に進められています。さらに、地域全体が少子高齢化の影響を受けているため、教育資源が全般的に不足している現状があります。大人たちのロールモデルが限られているだけでなく、体験活動の機会やモノ、人手といったさまざまなものが足りない中で、学校がそれをどうにか補おうと取り組んでいます。その結果として、進路の多岐化もまた同時に進んでいる状況です。

次のスライドに進みます。こうした状況の中で、新たに今回新学習指導要領への対応として、「探究的な学び」や「主体的・対話的で深い学び」が全教科・科目で求められるようになりました。そして、それに加えて、それらを観点別に評価することも義務付けられ

るようになりました。

現在の状況では、生徒間の学力差や目指すべき「学び」の形、それに関わる制度が、それぞれでうまくかみ合っておらず、齟齬を生じている状態です。特に探究的な学びや観点別評価に関しては、想定数が多くなることや、パフォーマンス課題やペーパーテストなど多様な方法で生徒の力を測り、それを総合して評価する必要が出てきています。このため、生徒にはさまざまな努力を求めなければならない一方で、それを教員が丁寧に見ていく必要もあります。

しかし、現在の 40 人規模のクラスや限られた時間、さらには学習量の多さを考えると、これを実際に進めるのは非常に難しいのが現状です。これをどのように乗り越えていくかが、今後の大きな課題になっています。

細切れの作業が増えることで、生徒の学習がマルチタスクのような形になってしまっています。その結果、基礎的な知識の定着や理解の深化が十分に図れず、生徒自身が自主的に学びを深めるための余白も十分に確保できない状況に陥っています。

さらに、大学入試における総合型選抜の拡大が現場に重い負担を与えています。先ほど申し上げたように、指導の個別化や多元化が進む中で、総合型選抜が一気に広がり、一つの大学で複数の選抜機会を設けている場合もあるため、受験が長期化する傾向があります。この長期化によって、学習指導要領の改訂と大学入試改革という両面からの変化が重なり、高校の現場にとって非常に大きな課題となっています。

地方公立高校の現状として、大学入試の多様化が教員だけでなく、生徒にも大きな負担を与え、学習活動を圧迫している状況があります。その中でも、入試の入口に位置する「書類」に関しては特に課題が大きいです。生徒の志望を固め、受験の土台を築くための重要な役割を担う書類ですが、その作成や指

導には非常に丁寧な対応が求められます。一方で、この書類に関わる業務そのものが現場にとって大きな負担となっており、解決すべき課題となっています。

大学入試で評価に用いられる書類として、現在スライドに示しているように、まず調査書があります。これは従来から使用されてきたものです。それに加えて、高校の教員が作成する推薦書もあります。こちらは主に学校推薦型選抜で使用されるものです。さらに、志願者本人が作成する志望理由書や学修計画書などの書類も評価に用いられるようになっています。

しかし、書類の評価に関しては課題が多くあります。特に、書類の様式が非常に多様化している点が挙げられます。異なる大学間で様式が異なるのはもちろんのこと、同じ大学内でも学部によって求められる書類の形式が異なる場合があります。そのため、生徒の志望先に応じた指導が必要となり、高校の現場では個別的な対応を求められる状況が生じています。

さらに、選抜における書類の扱いもさまざままで、参考程度の評価にとどまる場合もあれば、具体的に点数が割り振られる場合もあります。高校の現場では、それぞれの扱いを把握した上で、生徒にどの程度の労力をかけさせるべきか、あるいは全体の中でどの部分を重点的に頑張らせるかを考えています。また、生徒自身がどのような部分で努力したいのかも丁寧に聞き取り、相談に応じながら指導を進めています。

また、教員が記載する書類についても、記載方法やルールが未だ十分に確立されていないという課題があります。さらに、志願者本人が記載する書類については、多くの生徒が自力で作成するのが難しいというのが実情です。このため、書類作成に関する指導において、現場ではかなり手間取っている状況が続いています。

参考までに、大学入試で評価に用いられる書類がどのような場面で利用されているかをこちらにお示ししています。総合型選抜や推薦型選抜の拡大に伴い、これらの書類の作成が必要となる場面が確実に増えていることがおわかりいただけるかと思います。多くの生徒がこうした書類を書く機会が増え、それに伴って高校でも指導する機会が増えている状況です。この点についてご理解いただければと思います。こうした中で、いくつかの問題点が浮かび上がってきますが、今回は大きく分けて2点に絞ってお示ししたいと思います。

問題点の1つ目として、選抜で書類を活用することに伴う懸念が挙げられます。この点は従来から先行研究などでも指摘されており、特に書類の信頼性や妥当性に関する課題が浮き彫りになっています。具体的には、受験生本人以外の力量に依存する部分が大きく拡大している点が問題視されています。申し上げました通り、高校では事前にこれらの書類を作成するための指導を行わざるを得ない状況です。しかし、作成や評価に関する基準やルールが未整備のため、どの程度指導を行うべきか、その指導のあり方が適切であるかが明確ではありません。さらに、書類に記載される内容には、生徒の活動実績や成果などが含まれるため、学校や地域の支援体制による差がどうしても大きくなりがちです。こうした状況は、現場としても非常に懸念している点です。

特に志願者本人が記載する書類については、評価の対象として体験や活動の内容が大きく関わってきます。そのため、学校や地域でどのように支援体制を整えるかが重要な課題となっています。しかし、地域や学校の体制には限界があるため、どうしても体験を「パッケージ化」するような形になりがちです。たとえば、学校側で「このような活動をしてはどうか」といった提案や計画を用意することで、生徒に活動を提供する形を取らざるを得

ない場合もあります。

このような体験の提供が進むと、そもそも主体性を評価するという目的と矛盾する可能性が出てきます。生徒の主体的な学びや経験を促すべきところが、学校側の用意した体験をこなす形に近づいてしまうことで、評価の本質が揺らぐ懸念があると感じています。

一方で、そうした体験の機会を自力で得ることが難しい生徒に対しては、機会の保障という観点から、学校側で活動を用意せざるを得ないという実情もあります。

また、書類の作成においては、添削指導が入ることが一般的ですが、最近では生成 AI の一般利用が広がっている影響もあり、どこまで書類が本人の力を正確に反映しているのかという点に対する懸念が強まっています。ここで参考としてご紹介するのは、私が社会人学生として東北大学教育学部で行った研究の一部です。この調査では、高校ごとの指導体制について、全国の高校教員の皆さまにご回答いただきました。その結果を示しているのがこちらのデータです。

多くの高校では、生徒一人ひとりに担当教員をつけて個別指導を行う形が一般的となっています。また、アンケートに回答いただいた教員の約9割が、書類作成や面接指導に関わった経験があると答えています。これにより、書類作成や面接指導が日常的に教員の負担となっていることが浮き彫りになりました。

問題点の2つ目として挙げられるのは、高校での書類指導における生徒と教員の負担の増加です。書類は他者の手が必ず入る性質を持っているため、個別指導が必要となり、その分労力がかかる実態があります。

特に、多様な進学先や書類形式に対応する必要があることから、指導内容や方法を一般化するのが難しい状況です。それぞれの選抜方法を正確に把握し、生徒一人ひとりに適切な支援を行うため、教員が多くの時間を割いているのが現状です。

さらに、書類の作成にかかる負担についてお話ししてきましたが、それに加えて評価に関する負担も非常に大きなものとなっています。多元的な評価を行うためには、多くの材料を収集する必要がありますし、生徒にとってはその材料を準備する作業が求められます。この過程自体が大きな労力となっているのが現状です。

また、評価基準が大学や学部ごとに異なる中で、高校内での評価をどのように接続し、一貫性を持たせるかという点も課題となっています。これは先ほど宮本先生も触れていらっしゃった通り、評価の妥当性や公平性を確保する上で大きな難題と言えます。

こうした状況の中で、書類のあり方について考えるための足がかりを得ようと、1つの調査を実施しました。その内容がこちらです。全国の51大学から出願書類を収集し、それが選抜の過程でどのように設定され、どのように扱われているのかを分析しました。

具体的には、書類の作成難易度を多面的に評価し、それを基にクラスター分析を行いました。その結果、書類の性質や扱い方に基づいて6つの類型に分類することができました。分類の詳細については、ここで大まかな形をご覧くださいと思います。

調査の結果から見えてきたことをここでご報告いたします。今回の分析では、出願書類の性質を6つの類型に分類しましたが、大きく分けて2つの傾向が見られました。第1類型から第3類型は教員記載書類を重視しないもの、第4類型から第6類型は志願者本人作成の書類を重視し、教員記載書類の重要性が比較的低いものでした。

特に書類の「書きづらさ」を指標として評価したところ、最も高い値を示したのは、教員記載書類を重視しない第4～第6類型の中でも、教科の学力点以外を重視し、多様な要素を書類で測ろうとするタイプのものです。

一方で、4から6類型の中で「書きづらさ

評価」が最も低かった書類は、学力点を評価する補足資料として位置付けられたものです。学力試験で測れない部分を面接で補うための資料として使われる形が、最も書きやすいと評価されました。

ここから私が申し上げたいのは、書類を用いて多くの要素を測ることは限界があるという点です。また、高校生が本来取り組むべき学習の観点から考えると、書類の複雑化や細分化をできるだけ緩和し、必要なリソースを確保することで、本来注力すべき活動に集中できる環境を整えていただきたいということです。

現場の視点から申し上げますと、学習評価や進路決定における現実的な必要性和、教育的理想からくる新たな挑戦的課題の両方を大切にしたいと考えています。しかし、その整合性をどうとるか、また現実的な解決策をどう見出すかが重要です。特に、過度な複雑化や細分化は避け、これを緩和していくことが必要だと考えます。

どうしても丁寧な評価や選抜という理想が、工程や資料の多さに直結してきた部分があるかと思います。しかし、そうではなく、生徒の実態を適切に把握するために必要な範囲とはどの程度なのかを見直す段階に来ているのではないかと、高校の現場としては感じております。

生徒の頑張りを正當に評価すること、そしてその頑張りを支えることの両面から、彼ら彼女らの高校生活を大切にしながら支援していきたいと考えています。また、その評価が過度な負担を伴わない形で行われることを願いながら、私の話を締めさせていただきます。

林如玉助教（司会）：

加美山先生、ありがとうございました。ただいまの加美山先生のご講演についての質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

加速する大学入試の多様化と
高校現場の実態
——出願書類作成指導に関する調査から——

宮城県佐沼高等学校
教諭 加美山 若奈

地方公立高校の現状

現勤務校：旧制中学を前身とする地方公立校（地域進学拠点校）

課題点

①人口減と少子化による志願者減
⇒ 生徒の学力と希望進路が多様

指導の個別化・多様化

②あらゆる教育資源が少ない

指導の多岐化

ロールモデル、各種体験活動、モノ、人手、支援や選択肢、その他情報……「学校」が請け負う

2

地方公立高校の現状

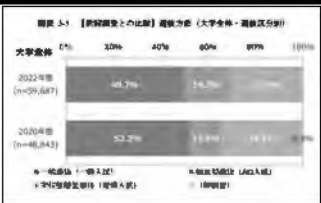
新学習指導要領への対応

- ①「探究的な学び」「主体的・対話的で深い学び」を
全教科科目で実施し「観点別評価」
⇒ 生徒間の学力差、目指される「学び」の形と制度の齟齬が課題
- ②科目編成の大幅な変更
⇒ 特に「国語」は、まとまった分量の文章作品に触れる機会が減

細切れの作業が増加し学習がマルチタスク化
基礎定着や理解の深化、自主的な学びのための余白が確保できない

3

大学入試における「総合型選抜」の拡大



(大学入試における大学入試の状況及び分析等に関する調査報告書 令和5年度、p.20)

多様な進学先の多様な選抜方法・時期・評価
⇒指導の個別化・多元化・長期化

4

地方公立高校の現状

大学入試の多様化が高校教育現場の教員と生徒とを圧迫

- ・選抜制度の多様化：総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜
- ・時期の複雑化：出願開始時期 9月～3月（夏休み以降は進路決定まで受験期間）
- ・評価の多元化：学力検査、小論文、面接、プレゼン、レポート、レクチャーレポート、グループディスカッション、高大連携事業への参加、書類、実技、探究活動ほか校内外での各種活動、資格・検定……

5

大学入試で評価に用いられる「書類」

- ・調査書（様式改訂）…ほぼ全ての選抜で利用
- ・推薦書など …主に学校推薦型選抜で利用
- ・志願者本人記載書類：志望理由書、学修計画書、実績報告書など
…主に総合型選抜と学校推薦型選抜で利用

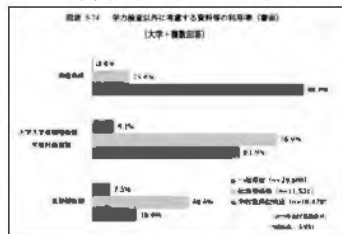
課題点

- ①様式が実に多様
- ②選抜における扱いも様々
- ③記載に関する手法やルールが未確立
- ④志願者本人記載書類は、多くの志願者本人が自力で記載できない

6

大学入試で評価に用いられる「書類」

総合型及び学校推薦型選抜における学力把握措置



(大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する研究調査 調査報告書 令和5年2月, p110)

7

問題点1：選抜に「書類」を活用することに伴う懸念

「書類」の信頼性や妥当性の課題

受験生本人の力量以外による部分が拡大
作成や評価にまつわる基準やルールが未整備

地域、学校、家庭の持つ資源を含めた支援体制等による差

【志願者本人記載書類】

- ・評価の対象として学校内外での諸活動等を大きく扱う設計
学校等での「体験パッケージ」拡大
- ・作成における添削指導、文章生成AIの一般利用拡大など

8

参考：高校における志願者本人記載書の作成指導体制

表1 選抜区分別 高等学校における出願指導体制

	生徒ごとき相当	施設ごとき相当	設備に相当	指導体制なし	合計
総合型選抜	151	10	51	9	221
公募型学校推薦型選抜	173	10	33	5	221

※国語科等毎（単位：人）の集計

※回答者毎（単位：人）の集計

● 國際通訊 ●

個別指導

表2 選抜区分別 高等学校教員における出願指導経験

	宝飾科	短大 課程	資格 取得	定時 課程	半日 課程	小・中・高 課程	専攻 課程	夜間 課程	大学 課程	大学 課程	大学 課程	大学 課程	大学 課程
総合学科	148	115	201	204	151	181	150	70	87	118	2	2	
	(52%)	(54%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	(67%)	
全学科	152	160	205	209	154	186	151	70	87	120	2	2	
総合学科	148	115	201	204	151	181	150	70	87	118	2	2	

※総合学科は、2019年度より22人へ
※総合学科は、2019年度より22人へ

○総合学科

9 割が経験

9

問題点2：高校における生徒と教員の負担

- ・ **高校での指導内容や方法を一般化しづらい**
多様な進学先の多様な書類形式と選抜方法の把握，検討
- ・ **作成までの負担が大きい**
受験先や受験方法との“マッチング”
複数の受験先に対応できる準備
受験プランの随時切り替え
実際の出願と志願者本人記載の書類作成指導
調査書や教員記載書類と本人記載書類の整合
- ・ **評価に関連する負担が大きい**
多様な評価のための材料収集，基準の異なる評価の統括

10

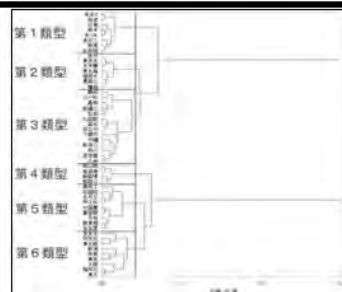
調査：書類に見る選抜の多様化・多元化

- ・全国 51 大学の出願書類を調査
 - ・総合型ないし学校推薦型（公募）選抜について
 - ・共通テスト受検後出願は除外
 - ・実技等の比重が高いスポーツ・芸術分野は除外
 - ・書類形式の多様さに着目して様式を収集
- ・多面的に「書きにくさ」を評価
 - ・教員記載書類と受検者本人記載書類の分量や項目等
 - ・配点やその他選考方法の組み合わせ

クラスター分析により6類型に分類

11

調査：書類に見る選抜の多様化・多元化



12

調査：書類に見る選抜の多様化・多元化

第1～3類型：教員記載書類を重視しない

第1類型【教科学力得点以外を重視】（N=8，指標9.6）

- ・調査書評点や共テによる学力得点等を重視しない場合が多い
- ・本人記載書類の記述量が多く、配点も高い傾向で面接も重視

第2類型【教科学力+発信表現力重視】（N=7，指標8.6）

- ・調査書等で判断可能な学力評点等を出願要件とする
- ・本人記載書類の記述量は多く主体性重視、配点は中程度の傾向
- ・面接に加え、パフォーマンス型の試験を課す場合が多い

第3類型【教科学力+基礎的表現力】（N=14，指標9.1）

- ・学力評点等を出願要件とするところが半数程度
- ・本人記載書類の記述量は多くなく、配点は参考程度の傾向
- ・面接と小論文など、その他の選抜方法を併せ課す場合が多い

書きつらさ指標
最高値
書類により測ろう
とするものが多い

13

調査：書類に見る選抜の多様化・多元化

第4～6類型：評点が出願要件，教員記載書類必須

第4類型【高校作成書類+学科試験等重視】（N=4，指標5.3）

- ・本人記載書類なし、教員記載書類で学力の3要素記載の傾向
- ・面接を課すのは半数程度、学科試験等を課す場合が多い

第5類型【主体性+基礎学力重視】（N=9，指標7.2）

- ・教員記載書類で学力の3要素の記載を求める傾向
- ・本人記載書類は主体性重視で記述量は中程度、配点は高めの傾向
- ・面接を課し、ほとんどの場合で小論文等の他の選抜方法も取る

第6類型【知技+思判表重視】（N=9，指標6.2）

- ・共テを課す場合が半数程度、書類配点は参考程度
- ・教員記載書類に主体性と思判表を記載、記述量は多くない傾向
- ・本人記載書類に主体性と思判表を記載、量は多めが半数程度
- ・面接と事前レポートやプレゼン、学科試験等を課す場合が多い

書きつらさ指標
最低値
学力試験で測れない
部分を面接で補う
ための資料

14

要望：複雑化・細分化の緩和へ

学習評価や選抜の多元化・多様化

- ・目的が異なる多様な「評価」の接続
- ・不必要な手順の複雑化や細分化

本来の目的が見えづらくなる
構造としてミスを引きやすい

生徒：評価基準が見えづらい → 努力の方向を定め難い、不安

学習以外の部分に時間と労力を割かなければならない

教員：説明責任や各記録等との整合性などにまつわる業務が増加

生徒のケアも含めた支援の必要が増える

本来行うべき学習や教育活動へのリソースの不足を招く

15

要望：複雑化・細分化の緩和へ

学習評価や選抜の多元化・多様化

進路決定における現実的な「必要」

不協和音

教育的理想からくる新しい挑戦的課題

指導・評価や選抜をめぐる
複雑化・細分化の緩和が必要

16

参考文献

- 株式会社リベルタス・コンサルティング(2023). 文部科学省委託調査
大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する研究調査 調査報告書
https://www.mext.go.jp/content/20230417-mxt_daigaku01-000028258_1.pdf (最終閲覧日2023年5月22日)
- 斎生直樹(2015). 大学入学者選抜における高校調査書. 教育情報学研究, 14, 1-13.
- 大学審議会(2000). 大学入試の改善について(答申). 大学審議会
- 中央教育審議会(2008). 学士課程教育の構築に向けて(答申). 中央教育審議会 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (最終閲覧日2023年1月19日)
- 中央教育審議会(2014). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～(答申). 中央教育審議会 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (最終閲覧日2023年1月18日)
- 中山和彦(1965). 高校調査書の信頼性についての一資料. 国際基督教大学学報 I-A 教育研究 = Educational Studies, 11, 185-205.
- 臨時教育審議会(1995). 教育改革に関する第一次答. 臨時教育審議会

17

現状報告 2：多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか ——西日本の地方公立高校の現場より——

山口県立下関西高等学校
松村 成通 教諭

【講師紹介】

林如玉助教（司会）：

続きまして、現状報告の 2 番目として、「多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか」というタイトルで、山口県立下関西高等学校教諭、松村成通先生よりご講演をいただきます。それでは松村先生、よろしくお願いいたします。

松村成通教諭：

よろしくお願いいたします。山口県立下関西高等学校から参りました松村と申します。このような機会をいただき、心より感謝申し上げます。はじめにお詫び申し上げますが、演題をスライドに記載したような内容とさせていただいておりますが、全ての高校の状況を完全に把握しているわけではありません。そのため、バランスを欠いたり、主観的な部分が含まれる可能性があることをあらかじめご理解いただければ幸いです。

本日の内容についてですが、はじめに簡単に自己紹介をさせていただきます。その後、総合型選抜と私自身の関わりについて、いくつかのエピソードを交えながらお話ししたいと思います。最後に、国立大学を中心に、現在行われている年内入試、総合型 AO 入試、そして推薦型選抜についての考えをお伝えできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に私の自己紹介をさせていただきますが、私は自分のことを「進路指導絶滅危惧教員」と呼んでおります。どうしてそのように



感じているのかについては、少し私の教員としての経歴をお話ししたいと思います。

スライドにも記載しておりますが、大学を卒業した後、このような経歴を歩んできました。そして、ここ 20 年以上にわたり、進路指導に携わることを中心に活動してまいりました。

良いか悪いかはさておき、このような経歴の教員は、実は山口県内にはほとんどおりませんし、皆様の周りでもあまり見かけないのではないかと思います。そういった理由もあり、この「進路指導絶滅危惧教員」という言葉で自分を紹介しております。

自己紹介は以上となりますが、ここでお伝えしておきたいのは、山口県の人事方針についてです。最近では 1 校あたりの勤務年数を短期にするという方針が取られています。多様なキャリアを積むという観点から、学科間の人事異動も増えていく傾向にあるようです。その結果として、普通科で 10 年以上連続して勤務したり、1 つの学校で 3 回以上卒業生を送り出したりする経験を持つ教員がほとんどいなくなることが予想されます。こうした

状況では、進路指導のノウハウを個人的に蓄積することや、他の先生方にその指導方法を継承することが難しくなるのではないかと懸念しています。専門高校や特別支援学校から着任された先生方が、大学受験に向けた志望理由書の作成や面接といった進学指導の経験がどうしても不足している中で、いきなり3学年の担任や進路指導主事としての役割を担わなければならないという状況が、今後増えていくのではないかと予想しています。

そのような状況下で、生徒や保護者とスムーズに連携を図りながら進路指導を進めていくことは、これまで以上にハードルが高くなっていくのではないかと感じています。この点については、山口県だけでなく他の県の先生方からも同様の状況があると伺っております。したがって、大学関係者の皆様には、こうした現状をご理解いただき、大学側からのさらなる情報発信や直接的なアクセスを通じて、お互いにコミュニケーションを深めていただければと思います。その上で、受験生が持てる力を十分に発揮できる入試環境の整備をお願いできれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

では、私の経験を踏まえながら、いくつかエピソードをお話しさせていただきます。まずはスポーツ高校時代のことです。この学校は、生徒たちが非常に純朴で、「山口県最後の楽園」と呼ばれるほど素晴らしい高校でした。その中で、平成17年度に私が3年生の担任をしていた際の女子生徒のお話を少しさせていただきます。

彼女は広島大学文学部を志望していましたが、一般選抜での合格は厳しい状況にありました。そんな中、夏休みに参加した入試説明会で「ゼミナール選考」という新しい入試が始まるという情報を得ました。この入試制度を知り、彼女に受験を勧めることにしました。というのも、この生徒は面談の際に「年に300冊以上の本を読む」と話してくれており、

いわば狂気的な読書家でした。そのため、この入試制度は彼女の特性に非常にマッチしているのではないかと考えたのです。しかも、このとき彼女が書いた志望理由書は圧倒的な説得力を持っていました。内容があまりに優れていたため、あえて初見のまま、一字も直さずにそのままエントリーしました。その結果、8倍という高倍率を見事に突破し、合格を勝ち取ったのです。この経験を通じて私が学んだのは、どうしても我々教員は生徒に手をかけすぎてしまう傾向がありますが、手をかけすぎずに、生徒のありのままの姿で評価していただくことも大切だということです。特に総合型選抜やAO入試においては、この視点がより重要だと学びました。

次に、下関南高校での経験についてお話しします。この学校は、私が着任した平成16年当時、生徒の80%以上が女子という特徴を持っていました。言語に関するポテンシャルは非常に高く、模擬試験でも全国平均をしっかりと取る力がありました。しかし、当時の国公立大学の合格率は20%を下回っており、進学実績としては非常に厳しい状況にありました。特に深刻に感じたのは、トップの成績を持つ生徒が「私はこの学校では頑張れません」と言った言葉でした。この一言は、進路指導のあり方を考え直す大きなきっかけとなりました。それまでは、AO入試や推薦入試など、多様な入試に向けた指導を中心に行っていましたが、この言葉は私自身にとって非常に重く響きました。

進路指導部長になった3年目に、それまでの指導方針を見直し、少し時間をかけてでも学習にじっくり取り組む姿勢を大切にしようと考えました。部活動などにも十分に組みませ、スタートは遅くなるかもしれませんが、そこで得た経験や学びを学習に活用してもらい、後期日程まで粘り強く挑む生徒を育てる方針へと切り替えたのです。

もちろん、生徒の意識を高めるために、行事の充実や言語活動の増加、面談の機会を増やすなどの取り組みを行い、生徒が自分の進路と真剣に向き合える環境を整えました。その結果、国公立大学の合格率は上昇しましたが、同時に推薦・AO入試の出願者が減るという変化も見られました。

確かに、国公立大学合格率は進路指導力の一つの指標にすぎません。しかし、それ以上に重要だと感じたのは、生徒たちが学びに真摯に向き合うようになり、卒業後に多方面で活躍しているという話を多く耳にするようになったことです。これらの成果は、学校としての手応えを実感させてくれるものでありました。

ただ、先ほども触れましたように、AO入試や推薦入試との距離が少し広がってしまった面もあったのではないかと感じています。しかし、その後、私が進路部長を務めて12年目となる令和元年に、東北大学の総合型選抜について初めて知る機会がありました。福岡で開催された説明会に参加し、その内容を詳しく伺いました。

この総合型選抜は学力を重視したAO入試であり、定員が多いこと、さらに合否判定が比較的早く出ることが大きな特徴でした。これらの点に魅力を感じ、その年から生徒に何気なく勧めてみるようになりました。

仙台で試験を受けてみないかと声をかける際、「模擬試験5回分くらいの価値はあるんじゃないか」と伝えながら勧めたところ、この年から毎年1名ずつ、3年間で計3名の生徒が出願しました。結果として、3名とも不合格ではありましたが、この挑戦が彼らの学びに対するモチベーションを大きく引き上げるきっかけとなりました。

特に、大学で学ぶ理由がより明確になり、それに伴って受験勉強への意欲も格段に向上していったことが印象的でした。その後、3名はそれぞれ北海道大学、岡山大学、電気

通信大学に合格し、進学していきました。結果論かもしれませんが、総合型選抜を経験したことが、一般選抜での成功にうまくつながったのではないかと感じています。この過程を振り返ると、総合型選抜を受験したことには十分な価値があったと分析しています。

次に、現任校である下関西高校についてお話しします。この学校はスライドにもありますように、地域を代表する伝統校であり、東大をはじめとする難関大学への進学実績も豊富です。また、探究科が設置されていることも特徴で、探究活動において素晴らしい成果を上げています。

しかし、その探究活動の成果を活かして年内入試に挑戦しようとする生徒は、現在のところあまり多くありません。これまでの下関西高校の生徒たちは、主に一般型で受験を選択しており、その傾向は引き続き大事にするべきだと考えています。総合型選抜については、私が着任し進路を担当する中で、過去2年間の合格者数はそれぞれ4名と1名でした。昨年度は東北大学のAOⅡ期に1名、AOⅢ期に1名が挑戦し、その中には医学部医学科への出願も含まれていました。いずれも不合格となりましたが、AOⅡを受験した生徒は現在浪人中で、医学部への再チャレンジを目指しています。一方、AOⅢを受験した生徒は歯学部に入學しました。この2名はいずれも女子生徒で、不合格という結果は残念でしたが、担任の先生の根気強い指導があり、現在それぞれの道で頑張っています。

このように、南高および西高で計5名の生徒の総合型選抜の受験に関わった経験を通じて、総合型選抜に対する自分の考えも前向きに変化してきたように思います。

では最後に、これまでの経験を踏まえ、現在の年内入試についての考えを述べさせていただきます。まず、本校は現在、一般選抜をメインとした進路指導を中心に据えています

が、生徒の個々の状況に応じて、AO や総合型選抜といった選択肢も効果的に活用する受験戦略を立てています。

いずれの場合も、大学合格を最終目標とするのではなく、自分が何を学びたいのかを明確にし、その目標に向かって主体的に取り組むことを重視しています。

ただ、その中で最近特に感じるのは、総合型選抜と学校推薦型選抜という2つの選抜方式の違いについての理解が、生徒や保護者のみならず、私たち教員の間でも十分に浸透していないのではないかという点です。実際、私自身も志望理由書の指導や面接練習を行う際に、「君は総合型だから」「君は推薦型だから」と明確に区別して指導しているとは言い難い状況です。

ここで、入試制度に精通されている先生方に対し、今さらながらスライドをご覧ください。多くは大変失礼ではありますが、確認のために総合型選抜と学校推薦型選抜の方法について少し整理させていただきます。まず、総合型選抜についてですが、このようになっています。学校推薦型選抜とは、このような入試方法になります。私が言いたいのは、両者を辞書的に確認すると、総合型選抜の「総合」とは、様々な要素を一つに合わせてまとめ上げることであり、「推薦」とは、自分が良いと思う者を他人にすすめるという意味です。このように考えると、両者は全く別物であると捉えるのが自然だと思います。

しかし、特に学校推薦型選抜については、個人的な意見ですが、私立大学において50%以上がこの方式で入学しているという現状を踏まえると、「推薦」という言葉の響きに大きな違和感を覚えます。普段、生徒には「日本語を正しく使いましょう」や「言葉を大切にしてください」と教えています。この「推薦」という言葉が、果たしてその意味を的確に生徒に伝え、私たち自身が実行できているのかについては疑問を感じています。そ

ろそろ何か別の言葉で表現できないかと考えることもあります。

そして、この2つの入試にきちんと向き合う際、我々教員側の課題として感じるのは、入学者選抜要項を全ての教員がしっかりと読んだ上で進路指導にあたるべきだということです。しかし、多忙を理由に、特に3年生を担当する先生方が熟読されていない状況が見受けられます。細かいことと思われるかもしれませんが、生徒に対する責任を果たすためには、まずは選抜要項をきちんと把握し、それを基に個別の進路指導に取り組むべきだと考えています。

生徒や保護者側の問題として、特に学校推薦型選抜に関して気になる点があります。本来、学校推薦型選抜は、学校が良いと思う生徒を推薦する選抜方式であるにもかかわらず、生徒が自ら「推薦してください」と申し出るケースが非常に多くなり、それが当たり前のような状況になっています。さらに最近では、保護者から「なぜ推薦してくれないのか」といった声を聞くことも増えてきました。

学校校推薦型選抜について、前任の下関南高校では、推薦願いと別に、生徒に推薦会議用の志望理由書を書いて提出してもらっていました。また、多くの学校と同様に独自の規定や内規を設けていました。具体的には、大学の募集要項の要件に志望者が適合していても、生徒指導上の問題があったり、成績が振るわなかったり、欠席日数が多い生徒については、十分に議論した上で、学校長の責任で校内選考において保留や不合格とするケースもありました。しかし、現在では、このような対応をすることが難しくなっているように感じています。保護者の年内入試、特に学校推薦型選抜に対する熱意が非常に高まっている現状があり、それに伴い、校内選抜で不合格とした場合に学校へのクレームが寄せられることを恐れているのではないかと推測しています。しかし、推薦書には「学校長の責

任において」という文言が明確に記されており、この点を踏まえ、私たち教員はもう少し誠実に対応を考えていく必要があるのではないかと考えています。

さて、高校現場では、アフターコロナの状況になり、生徒指導をはじめとしたさまざまな業務に忙殺されているという声を多く耳にします。皆様の学校ではいかがでしょうか。むしろ逆に、「最近職員にもゆとりが出てきた」「少し落ち着いてきた」「働き方改革の成果が感じられる」といった声が上がっているのでしょうか。

私自身、今の現場で「ゆとりが出てきた」といった言葉を耳にしたことは一度もありません。それどころか、各業務に奔走している先生方を日々目にしています。本校だけでなく、多くの学校現場がビルドばかりでスクラップの少ない状況に置かれていると感じています。このような状況では、入試制度の多様化に対応する余裕を持つことも難しいのが実情です。

入試制度もまたビルドばかりで、今回の共通テストの試験時間割が増えていることも、その象徴ではないでしょうか。2日間、夕方6時まで集中力を維持し続けることを求める現行の制度は、コロナ禍明けで生徒の体力が低下している中で、本当に適切な成果を測定できるのかという疑問を抱いています。

また、校内で行われる推薦会議が本当の意味で生徒を守る場になっているのか、という点にも疑問を感じています。推薦会議の目的は単に推薦者を選出するだけでなく、最終的には全校生徒を守るための議論の場であるべきだと考えます。

「守る」とは具体的にどういうことかといえば、一般選抜に向けて最後まで粘り強く努力できる生徒を育成すること、そして、推薦会議を経て出願が認められた生徒が合格後も気を緩めることなく勉学に励む環境を整えることに尽きます。

推薦で選ばれた生徒に対しては、厳しい生徒指導が必要だと感じます。特にアフターコロナの状況下で、生徒指導が甘くなっている傾向があり、出欠席の指導にその影響が顕著に現れています。また、年内入試で大学に入学した教員が増えている状況は自然な流れですが、現場ではその状況に気づいていないことがあるように思われます。

私自身も、こうした点については最近まで意識が向いていませんでした。特に年内入試で大学に進学した先生方が、3年生を担当する際、一般選抜、特に後期日程まで粘らせる指導を行うのは感覚的に難しいのではないかと考えています。また、私がその指導をお願いしても、すべての先生方に受け入れていただけるかどうかには自信がありません。これは若い先生方に問題があるというわけではなく、保護者も年内入試の経験者が増える中で、後期日程まで粘る指導はますます難しくなるでしょう。そして後期日程の募集人員が減少している現状も、その難しさを一層増していると感じています。さらに、3年生の担任は秋口から進路指導、特に受験学力の向上を目指して教科指導に力を注ぎたいところですが、現状ではそれが難しいと感じています。特に最近では、SNSを介した生徒同士のトラブルやいじめといった生徒指導上の問題が、3年生になっても解消されず、むしろ目にする機会が増えている印象です。こうした問題が進路指導に集中する障害となっており、担任の先生方に大きな負担をかけている状況です。

我々としては、学校推薦とは、学校を代表する優れた生徒を大学に送り出すことだと考えています。その生徒が大学で安心して教育を受け、研究活動に取り組めるようにすることを目指しているのですが、現状としてその思いにそぐわない状況が増えてきていることを危惧しています。

以上のように、教育現場には多くの課題が

山積している現状があります。その中で、特に国立大学の入試関係者の皆様をお願いしたいことがあります。

現在、多様な入試方式が求められている中で、学校推薦型選抜は長い歴史を持つ一方、総合型選抜はまだ導入から時間が浅く、十分に活用されているとは言えない状況です。この点を踏まえた上で、可能であれば総合型選抜の募集人員を増やし、徐々にその方向へシフトしていただけないかと考えています。

現在、学校推薦型選抜の割合が多い状況ですが、可能であれば総合型選抜への移行を進めていただきたいと考えています。その際には、学力を重視し、共通テストを課すなどの形で、さらに制度の充実を図っていただければと思います。

また、総合型選抜の出願期間についても検討をお願いしたいと思っております。現行では9月出願開始が一般的ですが、調査書の作成やその他の準備を考えると、現場では非常に厳しい状況があります。今年度から調査書の簡略化が進んだとはいえ、9月開始は依然として負担が大きいと感じています。

例えば、出願期間を10月以降に変更することで、進路指導や調査書作成に十分な時間を確保でき、生徒に対する丁寧な指導が可能になるのではないのでしょうか。今年度、私の地元の国立大学の総合型選抜も9月1日から開始されましたが、担任共々準備・対応がぎりぎりでありました。

本校では夏季休業中に前期・後期合わせて14日間の課外授業があり、お盆期間は閉庁日もあるため、担任が調査書を作成し、進路部や管理職が点検する業務を行う時間が十分に確保できていません。特に、夏休み期間の業務多忙化は働き方改革と矛盾しており、課題が多い状況です。さらに、調査書や推薦書の作成、受験料の振り込みに関する指導が生徒に十分行き届かない場合、ミスが発生するリスクも懸念しています。

また、大学の先生方は、生徒が十分な学びの力を蓄えた上で合格・入学することを望んでおられると思います。その核となるのが、先ほどもございました通り、学力の3要素だと認識しています。私の実感として、特に3年生は10月以降に学びが一段と深まり、成長する生徒が多いと感じます。この重要な時期において、教員と生徒が協力しながら、十分な学力を身につけることが求められます。

しかし現状では、放課後のわずかな時間が年内入試や推薦書の作成に充てられることが多く、その結果、授業や課外活動が疎かになる懸念があります。さらに、働き方改革の影響もあり、教員が生徒に十分なサポートを提供する余裕を持つことが難しい状況にあって、教科指導と年内入試指導を両立させることの難しさを強く感じています。特に、推薦書の作成は担任の先生方にとって非常に大きな負担となっているのが現状です。

一方的な話になってしまいましたが、国立大学で総合型選抜を導入しない理由については調査結果などで何度も目にし、その背景についても理解しています。しかしながら、高校現場が抱える限界が近づいていることを、ぜひご理解いただきたいと思います。高校側の主張が甘えや過剰反応だと思われるかもしれませんが、この問題は進路指導担当だけでなく、若い先生方の現状や意見を汲み取ることが重要です。特に、将来的に教員志望者の減少を防ぐためにも、現場の声、特に若手教員の声に耳を傾けていただけたらと願っています。推薦型選抜から総合型選抜へのシフトによって、1校あたりの制限がなくなると、応募者数が増え、倍率が高くなり、負担が増すことが懸念されます。そのため、書類審査については、既に検討が進められている生成AIの活用を、さらに加速していただけたらと思います。また、導入が進んでいるCBT（コンピュータ・ベースド・テストング）についても、さらなる普及をお願いしたいと

考えています。

また、先ほど加美山先生のお話にもありましたが、今回の報告にあたり国立大学の募集要項を詳細に閲覧しました。非常に複雑で、読解が難しい内容が多く含まれていると感じました。例えば、ある国立大学では募集要項の大綱だけで130ページを超えるものもありました。我々は保護者や生徒に対して募集要項をしっかりと読むよう指導しておりますが、私自身も読み進める中で理解が難しい部分があり、自身の力不足を痛感しました。こうした点についても、負担の軽減やわかりやすさの向上をぜひご検討いただければ幸いです。

最後に、高校現場では教員同士が教育観を本音で語り合い、議論を交わす場面が少なくなっているように感じています。かつてのように職員室で腹を割った議論をする機会が減っているのではないのでしょうか。私の報告が、批判でも構いませんので、少しでも先生方の話題や議論のきっかけとなれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

林如玉助教（司会）：

松村先生、ありがとうございました。ここで休憩を取らせていただきます。再開は、15時35分とさせていただきます。

なお、基調講演及び現状報告の2名の先生方への質問等の受付は15時25分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様はお手元のQRコードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより、またはスクリーンの右下に表示されているQRコードから、ウェブ上での入力をお願いいたします。それでは、休憩に入ります。



高

1

本日の内容

高

1. 自己紹介
2. 総合型選抜との関わり
3. 年内入試について
※現状報告とは離れるかもしれませんがお許しを

2

1. 自己紹介

高

「進路指導絶滅危惧教員」

3

1. 自己紹介

高

山口県立美祢工業高等学校(5年間)
山口県立大津高等学校
(12年間・3年担任6回)
山口県立下関南高等学校
(16年間・3年目から14年間進路指導部長)
山口県立下関西高等学校
(3年目・進路指導部長も3年目)

4

2. 総合型選抜との関わり（大津高）

高

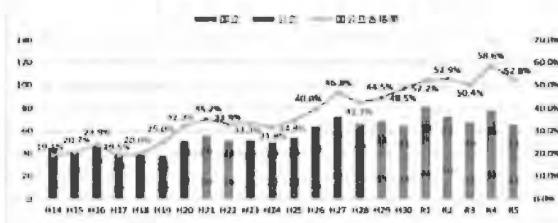
・平成17年度
広島大学文学部AO入試を受験した生徒について
→あえて何もしない進路指導があるということを学びました！

5

2. 総合型選抜との関わり（下関南高）

高

国公立大学合格総数・合格率



6

2. 総合型選抜との関わり（下関西高）

高

大正 9年 下関中学校 設置
昭和23年 下関高等学校 と改称
昭和24年 下関西高等学校 と改称
平成29年 探究科 設置
平成30年 スーパーサイエンスハイスクール 指定
令和 7年 文理探究科 設置(予定)

7

2. 総合型選抜との関わり（下関西高）

高

・過去2年間の総合型選抜の結果について(国立大学のみ)

令和4年度 合格4 横浜国立
岡山、山口、九州工
令和5年度 合格1
広島

※東北大学Ⅱ型1名、Ⅲ型1名出願

8

3. 年内入試に対して

高

・下関西高は、「探究科」設置校ではありますが、当面は一般選抜型をメインターゲットとしながらも、ケースに応じて年内入試を活用するという受験戦略を立てています。

9

3. 年内入試について

高

・総合型選抜とは？

詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に評価・判定する入試方法。

10

3. 年内入試に対して

高

・学校推薦型選抜とは？

学校推薦型選抜 出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料としつつ、評価・判定する入試方法。

11

3. 年内入試に対して

高

・総合型選抜と学校推薦型選抜の違いについての理解が不十分？

※生徒、保護者の理解も含む

※学校が推薦する型の選抜なのに

×学校が推薦する型選抜

○生徒が自らを推薦する型選抜

◎保護者が我が子を推薦する型選抜

12

3. 年内入試に対して

高

- ・現場では進路指導以外の業務に忙殺されているという話を多く耳にしますがいかがですか？
- ※逆にこのような話が聞こえてきます？
- 「最近、ゆとりがでてきたね」
- 「最近、暇だね。」
- 「働き方改革の成果が出てきたね」

13

3. 年内入試に対して

高

- ・高校現場が入試制度の多様化に対応できていないのでは？
- 例)・校内の推薦会議が全校生徒を守るための会議になっているか？
- ・教員で年内入試で入学した教員が増加しており、一般選抜、特に後期日程まで粘らせる指導が難しい。

14

3. 年内入試に対して

高

国立大学については共通テストなど十分な基礎学力を測定ための試験を課すという条件で年内入試については、学校推薦型より総合型選抜を中心として年内入試を実施することを加速化してもらえたらという希望があります。

15

3. 年内入試に対して

高

- ・総合型選抜の出願開始を10月以降にできないか？
- ・調査書作成が9月1日出願開始では厳しい現状。夏季休業中の多忙化→働き方改革との矛盾
- ・出願ミスの増加が心配
- ・教科指導と年内入試の指導の両立の難しさ。特に志望理由書の指導に苦慮している。

16

3. 年内入試に対して

高

国立大学で総合型選抜を導入していない理由(文科省委託事業調査より)

- ・「現在の入試選抜方法に特に問題を感じないから」
- ・「選抜に関係する業務時間の負担が大きいから」
- ・「十分な実施体制を整える人員の確保が難しいから」

17

3. 年内入試に対して

高

- ・倍率が高くなり、負担感が増すならば書類審査においては生成AIの活用を検討できないか？
- ※募集要項が複雑で教員のみならず、生徒、保護者も読解が難しい。

18

4. 最後に

高

ご清聴ありがとうございました。

何かありましたら
shigemichiman@yahoo.co.jp までご連絡下さい

19

指定討論者紹介

指定討論者

倉元 直樹（くらもと なおき）

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学，テスト学，大学入試学

〔主な著書、研究業績〕

日本テスト学会編 (2007). テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

倉元直樹監修，倉元直樹編 (2020). 「大学入試学」の誕生，東北大学大学入試研究シリーズ 第 1 巻，金子書房.

倉元直樹監修，倉元直樹編 (2020). 大学入試センター試験から大学入学共通テストへ，東北大学大学入試研究シリーズ 第 2 巻，金子書房.

倉元直樹監修，久保沙織編 (2023). 再考 大学入試改革の論理，東北大学大学入試研究シリーズ 第 8 巻，金子書房.

倉元直樹監修，倉元直樹・林如玉編 (2024). アドミッションセンターの現在と将来，東北大学大学入試研究シリーズ第 9 巻，金子書房.

〔学会活動等〕

大学入試学会理事長，日本テスト学会理事，日本教育心理学会会員等

〔その他の特記事項〕

日本テスト学会賞（第 16 回）(2023 年)

日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第 27 号）(2007 年)

日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）(1995 年)

討議——パネルディスカッション——



林如玉助教（司会）：

お待たせいたしました。それでは、お時間となりましたので、これより第 3 部、討議に入ります。

ここからは討議司会の先生方にマイクをお渡しします。よろしくお願いいたします。

中村高康教授（討議司会）：

皆さん、こんにちは。討議の方の司会を担当させていただく東京大学の中村と申します。大学入試学会の副理事長を務めております。本日の討議の方の司会は 2 名で、私と駒形先生が担当いたします。

駒形一路特任教授（討議司会）：

皆さん、こんにちは。東北大学で特任教授を務めております駒形と申します。今日は、中村先生と一緒に討議の進行を務めます。よろしくお願いいたします。

中村高康教授（討議司会）：

では、討議の進行について、事前に簡単にご説明させていただきます。まず初めに、指定討論を担当される倉元先生に、問題提起をお願いする予定で、そのために 20 分ほど時間を取らせていただきます。その後、登壇者の先生方への質問が出てくると思いますので、それに対するご回答をいただく時間を設ける予定です。

登壇者の皆さんには、興味深い発表をしていただいたこともあり、この後の時間でしっかりとコメントをいただけたと思います。また、相互に聞きたいことがある場合もあるかと思いますが、そうした点についてもぜひ積極的にお話しいただければと思います。討議司会の方からも、必要に応じてご質問などをさせていただければと考えています。その後、会場からすでに寄せられているたくさんのご質問の中から、時間の都合上すべてを取

り上げることは難しいのですが、いくつかを選んで登壇者の先生方にディスカッションしていただく形で進めていく予定です。

終了予定は夕方 5 時となっていますが、時間は一見あるようで意外と短く感じるかもしれません。テンポよく進めながら、皆さんと活発なディスカッションをしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。それでは、まず、最初に、倉元先生に指定討論をお願いしたいと思います。倉元先生、よろしくお願いいたします。

倉元直樹教授：

指定討論を担当させていただきます倉元です。ただいまのお話を伺いながら、感じたことや考えたことを簡単にまとめてみました。それがうまく質問につながればと思っております。時間も限られていますので、早速始めたいと思います。よろしくお願いいたします。

第40回東北大学高等教育フォーラム
大学入試学会第1回創立記念大会
公開シンポジウム

大学入試の多様化を考える
——新学習指導要領と総合型選抜の拡大——

指定討論

指定討論者 倉元直樹（東北大学）

JARUAS
大学入試学会
JAPANESE ASSOCIATION OF UNIVERSITY ADMISSION STUDIES

JARUAS

宮本先生の基調講演 (1)

- 大学入試の**多様化の諸相**
 - 統計的なエビデンス → 設置者による**違い**
 - 多様化**は時代背景、社会状況等超えたキーワード ← **マジックワード**
- マジックワード化の誘惑
 - 老舗は**生きる力**
 - コンピテンシー、真正な・・・、豊かな・・・、探究
- ヒールワード**（造語）もある？
 - 大学入試、選抜、暗記・記憶、ペーパーテスト**

10/7/2024
「フォーラム」公開シンポジウム
The Japan Association for University Admission Studies

まず、宮本先生のお話では、大学入試の多様化に関するさまざまな要素について、統計的なエビデンスをもとに、設置者別に国公立の違いをグラフで示していただきました。これは非常に重要なポイントだと思います。同じキーワードを用いても、実際に起こっていることは状況ごとに異なる、という一例を提示していただいたと感じました。また、討議司会の中村先生のことばを引用されていた部分も印象的でしたが、「多様化」ということばが、時代背景や社会状況を超えて一貫して使われていることに改めて気づかされました。

このようなことばは、時に「マジックワード」として機能するのではないかと私は考えています。実情の違いによらず「あるべき姿」として同じことばにまとめられてしまう、そういったことばは「マジックワード」と定義しておくべきだと思います。「マジックワード」は非常に便利だと思います。教育界においては、これまでも「生きる力」が一つのマジックワードとして長く機能してきました。宮本先生が挙げられた例の中でも、「コンピテンシー」や「真正な何々」「豊かな何々」といったことばがそのような役割を果たしているように感じます。そして、最近では「探究」ということばも教育界における新たなマジックワードになりつつあると、私自身は受け止めています。



「ヒールワード」ということばは私の造語で、適切かどうかは分かりませんが、こうしたことばも存在するのではないかと考えています。いわば時代を超えた「悪役」のような役割を果たすことばです。たとえば、大学入試に関連して「選抜」「暗記、記憶」「ペーパーテスト」といった単語は、それがただ出てきただけでネガティブなイメージを抱かせる傾向があります。これらは、ある意味でマジックワードになり損ねた存在と言えるかもしれません。さらに、高大接続改革や三位一体改革といったことばも、令和 3 年度の入試を契機とした方向転換の中で、ポジティブなイメージを失ってしまったように思います。その代わりに登場した新たなマジックワードとして、「学力の 3 要素」が非常に強力に位置づけられているのではないかと思います。

JARUAS

宮本先生の基調講演 (2)

- 没落したマジックワード候補
 - **高大接続改革** (三位一体改革、等々)
 - ← 方針転換でポジティブなイメージが消えた
- **学力の3要素**は高大接続改革に代わる今のマジックワード
- マジックワードの力: **思考停止への誘導**
 - 今の学習指導要領は高大接続改革の延長
 - **学力の3要素** (マジックワード) に**大学入試** (ヒールワード) を合わせる (屈服させる) ?

007/2024
コナニウム / 公開シンポジウム
3

この「マジックワード」という概念についてはポジティブな意味ではなく、学術的に見て否定的な側面を指摘したいと考えています。それは、思考停止への誘導という点です。たとえば、「学力の 3 要素」ということばが掲げられた瞬間に、それに基づいて何かを進めようとする動きが始まり、深い議論や批判的な検討が封殺されてしまう状況が生まれるのです。私自身、教育心理学の分野に関わってきた経験からも感じるのですが、「学力の 3 要素」ということば自体は、学術的な検討や理論に基づいて生まれたものではないのです。

この点について、宮本先生のお話を伺い、非常に納得したのは、現行の学習指導要領が高大接続改革の答申が出された 2 年後に策定されたものであるということです。つまり、現行の指導要領は、高大接続改革の思想や考え方に大きく依拠しているわけです。そして、高大接続改革が頓挫したのはさらにその後のことですから、指導要領自体にはその影響が残っているという点が非常に重要だと感じました。そう考えると、現在の状況は新たなマジックワードに合わせる形で「大学入試」というヒールワードが位置づけられ、ある種の方向性が示されているように見えます。表現は少し強いかもしれませんが、そうした力学が働いているのではないかと感じています。こうした流れの中で、宮本先生の講演では、「多様化」という概念を改めてフラットに捉え直す作業が行われていたように思います。特に、多様化の中でも「選抜方法の多様化」や「多元化」というテーマに焦点が当てられていた点が、重要な視点だったと感じました。これは単なるキーワードとしてではなく、実際に起こっている事象を丁寧に捉え直し、その背景や影響を考察する試みだったのではないのでしょうか。

JARUAS

宮本先生の基調講演 (3)

- **多様化**という概念をフラットに考え直す
- **選抜方法の多様化**、多元化に焦点
- **測定評価**の学術的検討は一つの方向性
 - 妥当性と信頼性の関係
 - パフォーマンス評価の実行可能性
 - 主体的に学習に取り組む態度の評価法
 - ← **理念と実施の間に乖離**
- 測定・評価の**エビデンス**の研究の重要性

007/2024
コナニウム / 公開シンポジウム
4

この後の加美山先生の現状報告でも、同じく「選抜方法の多様化」や「多元化」といった点に焦点が当たっていたと思います。これを測定評価という観点で学術的に検討するこ

とは、まさにその「マジック性」を取り除き、より実質的な準備を進めるための一つの方向性ではないかと感じました。たとえば、「妥当性」と「信頼性」の関係についてですが、これは古典的テスト理論に基づいた形式的かつ数学的な理論であり、私はゼミで毎年、この二つの概念の関係を数式を使って証明するという授業を行っています。基本的に、信頼性がなければ妥当性は保証されないというのは、この分野を学んだ人にとっては当たり前のことです。しかし、多くの場合、その前提が抜け落ちたまま議論が進められていることがあると感じます。そして、これをパフォーマンス評価に当てはめた場合、信頼性を確保するためにはかなりの工夫が必要であることや、実行可能性の問題として手間がかかる点が挙げられます。また、主体的に学習に取り組む態度、の評価方法についても、十分に考慮されていない場合、理念と実施の間にギャップが生じてしまうのではないかという問題も指摘されてきました。

JARUAS

宮本先生の基調講演 (4)

- **学力の3要素の一体的把握というテーマ**
 - 教育心理学、発達心理学、動機づけ理論
→ 真正な評価に選抜資料の多様化（ペーパーテストの排除）以外の可能性を見出す

学力の3要素 ≠ 選抜資料の多様化

【質問】

1. 教育用語の価値中立化の必要性・可能性？
2. 追跡調査に対する期待と問題点？

007/2014

フォーラム！公開シンポジウム

Design: Kenji Ito for JARUAS, eLearning Solutions

これを踏まえて、大学入試に限らず、現在進行中の教育に関わる問題に焦点を当てるという観点から、測定や評価に関するエビデンスの重要性が改めて示されたのではないかと私は理解しました。その後、宮本先生は「学力の3要素」のマジック性をそのままに置いた上で、それを一体的に把握するというテーマでお話しされました。その際、教育心理学

や発達心理学、特に心理学の中の動機づけに関する知見を活用しながら、実際には「真性な評価」が選抜資料の多様化と直接結びつかないという点を示されました。さらに、ペーパーテストの中にも学力の3要素を一体的に把握できる部分があるということが示唆されたと理解しました。ここについては、もしかしたら私の受け取り方に誤解があるかもしれませんが、もし間違っている点があれば訂正していただければ、と思います。

非常に強く感じた点は、大学入試を学問的に展開しようとしたとき、そもそも「大学入試」ということばそのものが、もしかしたら広がりを持っている可能性があるということです。基本的に、現在の大学入試における価値観や前提がまだ十分に切り除かれていないため、そこに乗じて成されている多くの議論があるわけです。政策が明示されると、どうしても、その影響を受けた議論が進みがちですが、まずそれを一度外し、価値中立な形で多様化を学力の3要素に関連づけて学問的に分析する場が必要だと思います。そのためには、まず「学力の3要素」ということばが持つ魔力を取り除き、中立的な学術用語として検討を進めていくことが求められるのではないかと思います。その可能性について、どのように考えるべきか、ということを質問したいと考えています。

次に追跡調査についてですが、選抜資料を事後的に評価することの一つの可能性として、どのように進めるべきかについて考えています。その際に、追跡調査が一筋縄ではいかないことを前提にした上で、どのように実施していくべきかという点について、もう少し詳しくお話を伺いたいと考えています。この点が2つ目の質問です。

続いて、加美山先生の講演についてですが、まさに高校が置かれている状況の多様性の一端を示していただいたのではないかと思います。今日も多くの高校の先生方が

参加されていると思いますが、おそらくご自身が勤務されている高校、あるいは過去に勤務された高校の状況がかなり異なると感じる方が多いのではないのでしょうか。加美山先生が現在勤務されている宮城県佐沼高校の現状として、かつて地域の拠点となる進学校だったものが、現在では進路の多様化が進んでいるという点が挙げられます。それが意味するところは、学力や志望が多様な生徒が一つの学校に集まっているということです。その中で、個別指導の重要性が増しており、その実践にはかなりの努力と工夫が必要だという点が強調されていました。

JARUAS

加美山先生の現状報告 (1)

- ・ 高校が置かれた状況の**多様性**の一端
- ・ 勤務校（宮城県佐沼高等学校）の現状
 - ・ 進学校 → 進路多様校化
 - ・ 生徒の**志望の多様性**の中での**個別的指導**
 - ・ 地域の**リソースの乏しさ**
- ・ 評価負担の増加 → 学習のマルチタスク化
- ・ 総合型選抜による進学準備の個別化
 - （大学を受験することの）負担の増加

9

JARUAS

加美山先生の現状報告 (2)

- ・ 志願者**本人記載書類**に焦点化
- ・ 入試の大前提：受験は**支援体制の勝負**
 - ・ 体験パッケージ化 ← 乏しいリソースの工夫
 - ・ 出願書類に関する個別指導のエビデンス
- ・ 多様化 → **教員の受験支援**の負担増加
- ・ 本人記載書類の類型化 ← エビデンス
 - ・ 作成しやすい書類、作成しにくい書類
 - ← 多様化（マジックワード）は実は**カオス化**

9

さらに、地域には十分なリソースがないという点も挙げられます。例えば、仙台市内の学校のようにすぐ隣に東北大学があるという恵まれた環境ではありません。そのような状況で探究活動を行うには、リソースを工夫して活用する必要があります。そこで、加美山先生が述べられたように、活動をパッケージ

化して提供する形を取ることが一つの解決策となっているということです。また、評価負担の増加により、教師だけでなく生徒たちの学習もマルチタスク化し、小間切れになってしまうという問題があります。総合型選抜による進学準備の個別化も、大学受験に関する学習の負担や心の負担が増加している状況を生んでいます。その中で、加美山先生は志願者本人記載書類に焦点を当ててお話しされました。

ここで重要なのは、現在受験をしている生徒たちの多くが、自分一人の力だけで受験を乗り越えているわけではないという点です。先ほど松村先生のお話の中では例外もあったようですが、ほとんどの受験生は支援体制に依存しているという現実があります。そのため、前述のように体験をパッケージ化するなど、限られたリソースの中で工夫し、何とか生徒たちの希望をかなえようとする努力が求められています。また、個別指導や出願書類の作成支援が非常に大変になっています。その負担をエビデンスで示すことが重要であると感じています。「多様化」というマジックワードが、実際には教員の受験支援負担を増加させている現実があり、さらに本人記載書類についても、作成しやすいものと作成しにくいものがあることが分かってきました。特に、探究活動の評価に関連する書類は非常に作成が難しいという問題が指摘されています。「多様化」ということばは、現実的には教育現場をカオス化させる要因となっているのではないかという懸念を抱いています。

そこで、質問があります。まず、入試の多様化は地域間格差を拡大させるのか、それとも縮小させるのか、そのメカニズムについてどのようにお考えでしょうか。また、生徒の力を伸ばす入試とは、どのようなものだとお考えでしょうか。

JARUAS

加美山先生の現状報告 (3)

【質問】

1. 入試の多様化は地域間格差を拡大するか縮小するか？そのメカニズムは？
2. 生徒の力を伸ばす入試とはどのようなものか？

0072024

最後に、松村先生のご報告をトータルで捉えられたかどうかは少し自信がないのですが、面白いと感じた点がありました。それは、総合型選抜と学校推薦型選抜の違いについての話です。

総合型選抜については、毎年、文部科学省から示される大学入学者選抜実施要項という行政指導文書が基になっていますが、その中で松村先生が記述された部分は、当初、そのように「受け止められている」とされていました。しかも、その部分については、松村先生が引用された内容がそのままリジッドに適用されるわけではないと思います。AO入試開始当時の状況を踏まえると、大学に対して一定の自由度を与えた点が重要です。まだ、「アドミッションポリシー」ということばが存在しなかった当時ですが、総合型選抜には「自分たちのアドミッションポリシーに合うような入試を設計してみなさい」というメッセージが込められていると理解しています。

JARUAS

松村先生の現状報告 (1)

- **総合型と学校推薦型の違い**
- 総合型選抜の定義について
 - 大学入学者選抜実施要項から
 - もとは大学審議会答申(2000)から「…と受け止められている」を削除
- 学校推薦型選抜の定義について
 - 生徒が自らを推薦する、保護者が我が子を推薦する、という見方

0072024

それに対して、学校推薦型選抜については、中村先生が非常に詳しい部分もありますが、基本的には学校長の推薦が求められます。しかし、現在では生徒自身が自らを推薦する形や、親が自分の子供を推薦するという形で受け止められているとお話されていましたが、私には非常に新鮮に感じられました。

JARUAS

松村先生の現状報告 (2)

- 教育においてビルドアンドスクラップがない状況
→ 大学入試も同様
- 推薦会議の役割 ← 生徒の力を最後まで伸張
- **年内入試で入学した教員の増加**
→ 一般選抜まで粘らせる指導の難しさ
- SNSの普及 → 進路指導上の困難
- 大学入試における**スケジュール問題**
 - 総合型選抜の出願時期
 - 生徒の学力伸張の時期と入試の早期化

0072024

教育における「ビルドアンドスクラップ」のない状況については、私も共感しています。この考え方は大学入試にも同様に当てはまるというご指摘も理解できます。もし、多様化がそのままカオス化につながってしまうとすれば、推薦会議の役割が非常に重要だというお話も面白かったです。特に「生徒の力を最後まで伸ばすための会議」という視点には、私も気づかなかった部分がありました。また、今後、「年内入試」で入学した先生方が増えていく中で、先生自身が一般選抜を経験したことがないために一般選抜まで粘らせる仕組みづくりが難しい、という点については、なるほど、と感じたところです。

JARUAS

松村先生の現状報告 (3)

【質問】

1. 「進路指導絶滅危惧教員」その含意は？
具体的に？
2. 学校推薦型ではなく総合型を望まれる理由は？大学の責任とは？
3. 生徒の目先の希望を叶えることと、将来につなげる力をつけることの両立について

0072024

SNS の普及が進路指導を困難にしている点についても、非常に重要な指摘だと思います。進路選択に関する情報があふれている中で、どの情報を元に進路を決定するかが難しくなっています。また、総合型選抜の出願時期や調査書を作成するタイミングの問題も、地元の高校からもよく聞いています。特に、10 月半ばに出願が求められる東北大学の AOⅡ期のような出願時期では、調査書を準備するのがぎりぎり、厳しいスケジュールになっています。それに加えて、学力が伸びる時期に入試がある、という根本的な問題にも触れられていた点が、非常に重要だと思います。

その上で、以下の 3 つの質問を考えました。1 つ目は、最初に自己紹介で触れられていた「進路指導絶滅危惧種教員」ということばについてです。もう一度確認したいのですが、具体的にどのような進路指導の先生が今、いなくなろうとしているのか、そしてそれがなぜ問題なのか、もし問題があるのであれば、どのような点が問題だと考えられるのか、教えていただきたいと思います。2 つ目の質問ですが、学校推薦型選抜ではなく、総合型選抜を望まれる理由についてお聞きしたいです。これはおそらく、大学側の責任に関することだと思いますが、その点について教えていただければと思います。そして、これに関連して、松村先生もお話しされた内容ですが、加美山先生にもお聞きしたいと思います。生徒の目先の希望を叶えることと、将来につながる力をつけることは、必ずしも同じではないという認識を持っています。その両立に関する現在の課題や、抱えている問題についてお話を聞かせていただければ、と思います。

中村高康教授（討議司会）：

どうもありがとうございます。それでは、それぞれの先生方にお答えいただきたいと思うのですが、登壇順で、まず宮本先生からお答えいただいてよろしいでしょうか。

宮本友弘教授：

はい、2 つほどご質問をいただいたと思います。1 つは教育用語についてですね。確かに「マジックワード」というものが存在すると思います。それが、まるで全てであるかのように、現場では「それに従わなければならない」という受け止め方をされてしまう場合があると思います。そして、その通りに進めなければいけない、という状況が起きることもあるかもしれません。



そういった場合、高校での受け止め方と大学での受け止め方は違うと思います。高校では、こうした政策的な用語が使われる場合、それをしっかり受け止めなければならない状況に追い込まれることが多いのではないのでしょうか。それに対して、大学では、たとえ何かが与えられても、それをそのまま受け入れるのではなく、「一体これは何なのか」と考える余地がある場合が多いように思います。

この点について、最近私は「政策対応型の制度設計」という言い方もしています。たとえ政策で指示された内容であっても、その用語の意味をきちんと考える必要があります。この点については、私も大いに賛成です。特に学術的な観点から、用語の意味をしっかりと検討する必要があると思います。

特に入試においては、私は測定の立場から申しますと、用語が明確に定義されていなければ測定も評価もできません。したがって、用語を明確に定義する必要がありますし、そ

れを裏付けるエビデンスも必要だと思います。

教育用語というのは、辞典などを見ても明確に定義されていない言葉が多いですね。

「マジックワード」として使われているのに、辞書を引くと載っていない言葉がたくさんあります。例えば「学力」という言葉についても、実は使われていない時期があったりします。荻谷剛彦先生は、「学力」という言葉を教育業界での最大のジャーゴン（専門用語）だと言い、「学力」について議論する際の難しさを指摘されています。

私自身も学生時代に「学力」について論文を書いた際、定義を試みましたが非常に難しいものでした。ある先生が話していたのですが、「学力」という言葉ひとつを取っても、以下のような異なる意味で使われることがあるそうです。真の学力を指す場合、理念的に設定された学力を指す場合、実際に測定可能な学力を指す場合。そのため、「学力」について議論すると、使う人同士で意味が噛み合わない状況がしばしば生じるとのことです。

こうした背景を踏まえると、「学力」のような用語については、学術的な裏付けをしっかりと行うことが基本中の基本であり、鍵になると考えています。

次に、2点目の追跡調査についてです。追跡調査は、大きく分けて相関分析と比較分析の2つに分類されます。相関分析とは、例えば入試成績と入学後の成績の相関を調べるものです。その際、相関係数を算出して関連性を見ていきますが、「選抜効果」という問題が存在します。

選抜効果とは、入学後のデータが合格者に限定されるため、相関係数が低く出てしまう現象を指します。この影響により、入試成績と入学後の成績との関連性を明確に捉えることが難しくなる場合があります。この選抜効果を正しく理解していないと、「入試成績と入学後の成績には関係がない」といった誤った結論を導いてしまうこともあるため、慎重

な分析が求められます。

補正式などの方法もありますが、適用には厳しい前提条件が必要であり、相関分析には限界があると感じています。むしろ、もう1つの方法として、選抜区分による比較手法が考えられます。具体的には、一般選抜とその他の区分を比較するアプローチです。ただし、この方法においても「どこまで追跡するのか」という問題が生じます。この点については、基調講演でも述べたように、影響力をどの範囲まで追うべきかを決めるのは非常に難しい課題です。この設定は、入試で何を測ろうとしているのか、すなわちアドミッションポリシーに大きく依存します。

また、大学入学後に高校時代の学びで得たものがどこまで活かされるのか、一般教育の範囲にとどまるのか、あるいは専門教育にまで影響を及ぼすのかといった点は、大学によって異なります。このため、追跡期間の設定が重要な鍵になると考えています。

これは直接的な質問ではなかったかもしれませんが、確認された内容についてお答えする形になります。ペーパーテストのあり方として、学力の3要素をしっかりと把握する余地があるという指摘についてです。学力の3要素については、よく考えてみると、学力観や学力モデルとして特に新しい発想ではありません。昔から、「見える学力」と「見えない学力」といった考え方があります。これもマジックワードの一種かもしれませんが、測りやすい部分と測りにくい部分があるという議論が長く続いてきました。特に、思考力や情意的な要素をどう測定するかについては、長年課題として取り組まれてきた分野だと思います。

先ほどの基調講演で私が申し上げたかったのは、真正性を有するとされる形式の課題だけが、学力を捉える助けになるのかという疑問です。そうではなく、学びに向かう意欲や、それに関連するメタ認知がしっかりと普通の

ペーパーテストにも反映されていく、という点が重要だと考えています。

特に大事なものは、形だけのアクティブラーニング（主体的な学び）ではなく「アクティブランナー」になることです。つまり、個人の中で生じる自律的な意欲です。ここで誤解してほしいのは、「重要だからやる」というのが他者から「これは重要だ」と言われて感じるものではなく、自分自身が「重要だ」と認識することです。そのような自律性を持った動機付けと、それに基づく学習方略、つまり「賢い勉強方法」の習得が結果に反映されるのです。これらの要素が、個人の中で起こるメカニズムとしてどのように作用し、それが大学入学後にも転移できるのかが課題となります。

表面的に課題の形が類似していることによって、それがそのまま転移してしまうと考えるのは避けるべきです。私が申し上げたかったのは、ペーパーテストであっても、十分にアクティブランナーとしてのメカニズムを反映できるという想定であるということです。以上です。

中村高康教授（討議司会）：

どうもありがとうございました。続きまして、加美山先生、よろしくお願いします。

加美山若奈教諭：

よろしくお願いいたします。

質問が前後するかもしれませんが、まず最初に、総合型選抜によって地域差が拡大するかどうかについてお話しさせていただきます。端的に申し上げますと、私個人としては、おそらく地域差が拡大してしまう面が強いのではないかと考えております。

地方では、都市部に比べて選択肢の幅が非常に狭く、さらに選択する際のコスト、例えば時間的なコストや労力的なコストなど、さまざまな面でハードルが高い場面が多く見受

けられます。たとえば、日常生活の中で無意識的に触れる情報、つまり、あえて自分で学習しようとか情報収集しよう意識しなくても目に入る情報の種類や量が、地方と都市部では桁違いだという点は、私自身も実感しています。



また、未成年にとっては移動のしやすさという点も大きく影響してくると思います。私たちが住んでいるような地域では、高校生くらいまではほぼ必ず大人の手を借りなければ遠くへ出かけることができません。行ける場所も非常に限られてしまいます。そのため、大人とのすり合わせや資金的な面での依存が避けられず、自分で計画して自分で出かける機会自体が少なくなりがちです。このように、大人との連携が必要不可欠になることで、行動の機会が限られてしまうという懸念があります。

次に、「力を伸ばす入試の形」と「生徒の目先の希望と将来の両立」という点についてお話しさせていただきたいと思います。その前提として、これまでの私たちの世代、私自身は今40歳手前くらいですが、現在の高校生や子どもたちの世代では、取り巻く社会環境が大きく変わっていると感じています。特に、触れるコンテンツが私たちの頃とはかなり異なっているのではないかと考えています。

我々の世代では、テレビが最初に身近な存在であり、それを通じてある程度一般的に共有できる話題がありました。また、受動的で

はありますが、だからこそ自分の関心に関わらず、広く受け入れられる情報も多く得られました。しかし、現在ではコンテンツが非常に多様化し、大量に流通しています。

その一方で、個人の時間が増えるわけではありませんので、各自が個別的に選択してコンテンツを消費する形になっています。さらに、ショート動画といった文化が主流になりつつあります。そのような状況の中で、私たちの世代では学習机に向かって頑張らなくても自然に身につけていたような力が、どうも低下してきているように感じます。

もちろん、現在の若い世代で新たに伸びた力もあります。しかし、これまで学習の前提とされてきた力の中で、見えないところで失われつつある力も存在しており、そういった力を補うために初等・中等教育の現場でフォローに苦労しているのではないかと感じています。

このように考えると、力を伸ばすことや将来につながる足がかりとして、目先の希望を叶えることも大切だと思います。しかし、重要なのは、基礎学力です。広い意味での基礎的な学習を支える力として、読み書きの力が重要だと感じています。これまで以上に、その力を大切にし、しっかり目を向けていかなければならないと考えています。

基礎学力に関して言うと、いわゆるペーパーテストが含まれることは多いと思いますが、その知識も新たに暗記するという点が、これまであまり好まれなかった部分もあるようです。しかし、それも非常に重要であり、私の考えでは、これは自分の考えを形成するため、あるいは他者の考えを受け入れる際や、自分の考えを他者に伝えるときに必要なものです。適切に、そして的確に意思疎通を行うための共通言語、共通知識を作り出すものだと考えています。

基礎学力は、適切な資料を使って読み解いたり、他者の考えを正確に理解して注意深く

接したり、あるいは自分の考えをしっかりと返したりすることに大きく関わっています。とはいえ、今求められている力の上に乗っかってくるものとして、限られた高校生の時間の中で、何を学ぶべきか、どのように学習を進めるべきかという視点も大切です。高校生という時期にしかできないこと、またその時期に最も効果的な学び方が何かを考慮に入れながら学習を進めていければと思っています。

プレゼンテーションや発表の機会ももちろん重要ですが、それに必要な力を養うためには、まず基礎学力をしっかりと身につけることが前提となります。社会人になってから、体系的に自分で勉強するのは難しいため、基礎学力をこれまで以上に大切にし、引き続き重視していく必要があるという視点がここから見えてきます。

以上です。

中村高康教授（討議司会）：

どうもありがとうございました。続きまして、松村先生、よろしくお願いします。

松村成通教諭：

失礼いたします。昨日、若い先生方から、これも言ってくれ、あれも言ってくれとお願いされた結果、内容が盛りだくさんになり、少し早口になってしまいました。特に「絶滅危惧教員」という言葉の説明が不足していたかもしれません。

この言葉についてですが、こちらにいらっしゃる先生方の中には、ベテランの先生方がいらっしゃると思います。そして、進路指導を担当された先生方や、長く進路指導主事をされていた先生方もいらっしゃると思います。私も先生方と同様、進路指導主事を長年、経験してきましたが、進路指導に携わることを望んで教員生活をスタートしたわけではなく、むしろ教員になった当初は進路指導がどのようなものか全く知りませんでした。しかし、

結果として長年この業務に携わることになり、今までそれを通じて見えてきたものや学んだことが多くありました。

私自身は、ある意味、バランスの悪い教員だと自負していますが、同時に一つのことに取り組むことで他の先生にない視点やバランス感覚を養うことができたとも思っています。そして、自分の持っている経験や知識を若い先生方に伝えることが、今私が考えている非常に大切なミッションだと思っています。

若い先生方は、特に ICT やデータ処理などに非常に優れています。私自身はその部分でついていけていませんが、そのスキルの高さには本当に感心しています。そうした中で、これから多くの経験を積んで、相談できる、相談に乗れるような教員になってほしいと願っていますし、私もそうなりたいと思っています。今回、その思いを伝えるため、「絶滅危惧教員」と言葉を使い、そういう教員がいるんだよというサインとしても、使わせていただきました。説明が不十分で申し訳ありません。2つ目の点についてですが、ある教え子の話を例に挙げると、その教え子は現在、獣医学部の教員をしています。ただ、どの大学かを明かすことには問題があると思うので、大学名は取って伏せますが、その大学の獣医学部全体の募集人数は30名で、入試方式としては、総合型選抜で6名、学校推薦型選抜で2名、一般選抜前期試験で20名、同じく後期試験で2名という、4回の入試を実施しています。その教え子と電話で話したとき、この複雑な募集について「これが一体誰にとって幸せなのだろうか？」という共通理解を持ちました。特に学校推薦型選抜で2名を募集するという点について、その位置づけがどうなのかについて大きな疑問が生じました。

最近では、1名の募集というケースも見かけます。そのような場合、高校現場の進路指導は非常に難しくなります。複数の受験に対する準備、特に今の学校推薦型選抜における先

生方、特に担任の先生方のご苦勞が本当に大変です。先ほども申し上げましたが、職員室に夜の7時や8時まで残業していて、何をしているのと質問すると、「明日までに生徒の推薦書を完成しなければならない」という答えがよく返ってきます。つまり、担任の先生方は時間とのプレッシャーの中で指導されているわけです。そういった中で、もちろん教科学力や面接の指導はこちらでしっかり行いますが、大学の方でもしっかり見ていただくために総合型選抜中心に年内の入試を実施して欲しいというメッセージを送らせていただきました。



次に、ご質問についてですが、これも非常に難しい問題ですね。基礎学力については、加美山先生が話された通り、本当にそうだと思います。全く同感です。しかし、同時に、総合的な基礎学力という観点から見ると、生徒が受験科目を絞りたいがる点が気になります。私は、それが科目の差別に繋がってしまうのではないかと危惧しています。大学に進学し、将来いろいろなことを学ぶ上で、科目に対しての差別的な考え方はすべきではないと思っています。それは、社会で生きていく中でも、他人を差別しないなどという考え方にも繋がっていくと思います。大学側もできるだけ多くの科目を受験科目にして欲しいと思っています。

また、生徒は「仕事」について非常に強い興味を持っています。例えば、「君は将来ど

んな仕事に就きたいか？」という質問は私はほとんどしませんが、敢えて聞くと、その答えは案外すぐに出てくるのですが、「社会の中でどんな人になりたいのか？」、「どんな活躍をしたいのか？」と聞くと、ほとんどの生徒が急に黙ってしまいます。さらに、「10年後、どんな自分になっているか知りたいかね？」という問いにも、「知りたくありません」と答える生徒がほぼ全員です。このようなやりとりを通じて、生徒はまずは目先の学習や特別活動などにしっかり取り組むことが、結果的に有意義な将来につながるのだと思っています。

また、先ほど「マジックワード」という言葉がありましたが、私が考えるマジックワードの一つは「仕事ください」ではなく、「学習の課題ください、何でもします」や「委員会の仕事ください、何でもします」だと思っています。「何でもします」がマジックワードの最重要ポイントで、同時に大学で通用する基礎学力を高校側が担保するには、まず与えられた課題に生徒を真摯に向き合わせることをだと思っています。

以上です。

中村高康教授（討議司会）：

どうもありがとうございます。3名の先生方には回答いただきましたけども、倉元先生の方から、さらに、何か感想があれば、お願いしたいと思います。

倉元直樹教授：

まず、宮本先生にお話しした「マジックワード」の話についてですが、これは「教育用語の価値中立化」ができないか、というテーマでした。したがって、この話は高校の先生方に向けたものではなく、むしろ教育関係の学問を志している方々に向けていたつもりでした。学術的な議論を行うとき、前提となることばにある種の価値が強く影響を与えると、

話が偏ったものになりがちだと感じています。そういったことに対して、常々疑問を感じていたということが背景にあります。

松村先生のお話や「絶滅危惧教員」について、私もよく理解できました。その絶滅危惧種が生き延びる場所として、私は大学入試学会が重要な役割を果たすと考えています。ここ数年、私は地元の先生方に向けて、現場の先生方というよりも、管理職の先生や教育委員会の方々に「進路は専門的な知識が必要である」という話をしてきました。東北地方では、そうした進路指導のエキスパートを育てるシステムが乏しく、うまく機能していない部分があります。その重要性については強調してきました。進路指導は、単に割り当てられた仕事をこなすものではなく、長年の経験と知識の蓄積が必要だということを理解していただきたいと思っています。将来に向けて、どこで進路指導のトレーニングを行うのか、という点も重要です。多くの情報は、いわゆる受験産業から流れてきますが、その情報は玉石混交です。だからこそ、私たちはその情報をしっかりと見極める目を養う必要があります。そのための場が、おそらく大学入試学会のような、さまざまな人が集まる場所だと考えています。少し大学入試学会の宣伝も含めて、コメントさせていただきました。

加美山先生は実は私の学生でもあり、時々雑談をすることがあります。最近話した内容の一つとして、全国学力調査に関する話題がありました。かつて小6の調査に使われた素材の一つに、バスの停留所の時刻表を読み解くという課題があったのですが、この課題に関して「できる子とできない子には、環境によって課題設定状況に対する理解に差があるのではないか」ということを、ある本に書いたことがあります。ちょっとした嫌味のつもりで書いた部分もあったのですが、実際に、特に田舎では、高校生になっても自分でバスの時刻表を見て、待って、乗る、という経験

すらできないという現実を聞き、驚きました。学校でどこまで補えるかという問題はありますが、少なくとも、こういった環境に基づくリソースの差が、暗黙のうちに選抜結果に入り込んでいく状況をできるだけなくしたい、というのが私個人の思いです。以上です。

中村高康教授（討議司会）：

ありがとうございます。では、登壇された先生方何か倉元先生のお話を伺いたい、あるいは相互にお聞きになりたいことがありますかね。どうでしょう。ないですか。

それでは、1つだけ宮本先生にお聞きしてもよろしいでしょうか。司会の特権ということで、先ほどの「マジックワード」の話と関連しているのですが、倉元先生の言葉を借りて、例えば「真性の評価」という言葉や、あるいは「マジックワード」になるではないかと思えます。というのも、今日、ある種の教育学における「マジックワード」が生まれるきっかけになっているのではないかという暗黙のメッセージを、倉元先生の言葉から感じてしまったんです。宮本先生はこの点について、どうお考えでしょうか。



宮本友弘教授：

そうですね、「真性の評価」という言葉は、かなり強い印象を与えたいと思います。それを「オーセンティック」と言い換えることができますが、そうすると、ますます「マジックワード」のように聞こえてしまうのではない

かという気がします。

中村高康教授（討議司会）：

「真性」と言われると、どうしても抵抗しにくい感じがしてしまいますよね。はい、私もそのような「マジックワード」に関しては、いつも悩まされております。どうもありがとうございました。

それでは、討議の司会を交代させていただきます。

駒形一路特任教授（討議司会）：

はい、参加者の皆さんから質問をいただきました。その中からいくつかピックアップいたします。宮本先生、よろしいでしょうか。私も非常に興味を持っているところですが。

「大学入試が変われば高校教育も変わる、学習指導要領に合わせて大学入試を変え」という部分が理解しにくかったので、もっと噛み砕いて、詳しくお聞きしたい」との要望が届いております。これに関しては、同じような質問が2つほど寄せられていますので、よろしくお願いします。

宮本友弘教授：

はい、これはスライドの20枚目に記載されている内容です。先ほどの説明でも申し上げましたが、大学入試には「3原則」というものが昔から言われており、その中の1つに「下級学校への悪影響の排除」があります。これは、大学入試のあり方が高校などの下級学校に悪影響を及ぼさないようにしなければならないということです。

例えば、以前あったような奇問など、非常に難しい問題が出題されると、それが高校の学習指導要領の内容から逸脱してしまい、高校教育に混乱をきたすことになります。ですので、そのような問題は出題しないように注意する必要があります。その一環として、学習指導要領に合わせる形で配慮がされてきた

わけです。つまり、あまり高校教育を乱すような入試は避けるべきだということです。

しかし、高大接続改革では、先ほど触れたコンセプトの 1 つとして、「高校教育を良くするために大学入試をどうするか」があり、少し踏み込んだ形になりました。つまり、単に負の影響を与えないようにするのではなく、プラスの影響を与えるようにしなさい、という方向に進んだわけです。この点については、倉元先生も指摘されていたと思います。要するに、負の影響ではなく、むしろプラスの影響を与えるべきだという理念があったと思います。

ところが、その後、さらに進化した結果、逆の方向に進んだような印象を受けます。学習指導要領にしっかりと合わせて大学入試を設計するべきだ、という方針に変わったのです。以前は、ハイスティックスのテストが高校教育に影響を与えるウォッシュバック効果が想定されていましたが、今ではその関係が逆転してしまい、むしろ学習指導要領にがっちりと合わせるべきだという方向になっています。このように、関係性が大きく変わったという点をお伝えしたかったのです。

駒形一路特任教授（討議司会）：

ありがとうございます。宮本先生、感覚的に、これ望ましいことですか。



宮本友弘教授：

もちろん、学習指導要領に逸脱したような問題を出すことは良くないことです。それは当然です。高校生の学びがあり、その先に大学入試があるわけですから、大学入試の重要性も理解しています。東北大学でも、そのためにさまざまな対応をしてきました。ただ、現在の学習指導要領に基づいて問われていることが、先ほど触れた「学力の 3 要素」に基づき、大学入試もその内容に合わせるべきだという方向性には少し疑問を感じています。

確かに、学ぶべき知識や思考力をしっかりと測る入試にすべきですが、学習指導要領の理念に過度に合わせて、大学が自分たちのアドミッションポリシーを省みずに、ただその内容にぴったり合わせることは少し違うのではないかと思います。

駒形一路特任教授（討議司会）：

ありがとうございます。私が高校の教員だった頃、某大学の試験問題には、学習指導要領からにじみ出ている部分も少しはあるかも知れないと聞いたことがありますけれども、確かに、難問や奇問を排除するためにそのような対応があったのでしょうか、それが逆に悪い方向に拡大解釈されてしまった印象を持っています。これで理解が進んだ方が多かったのではないかと思います。私自身もこれでよくわかりました。ありがとうございました。

さて、加美山先生と松村先生合わせてのご質問ですが、かなりざっくりとした質問です。先ほどのお答えの中にもあったかもしれませんが、「高校はどのような入試を望んでいるのか」という点です。高校側としては、大学が試験の学力だけでなく、普段の力を見ようとして書類を求め、その中で書類審査を行っているが、実際にはその書類作成が非常に大変で、ではシンプルな学力試験が一番望まれているのではないか、という質問ですね。松村先生からご対応いただけますでしょうか。

松村成通教諭：

シンプルな学力試験を望んでいるか、ということですね。要するに、最初の話に戻るかと思いますが、異動してきた先生方が大きな不安を抱えているわけではないにしても、日々の進路指導や生徒指導に対して不安を感じながら取り組んでいる姿が非常によく伝わってきます。そうした不安を少しでも解消するためには、シンプルな入試という方向性が必要だと感じています。

生徒の立場に立って考えると、簡単に言えば、一生懸命頑張っている生徒が正しく報われる入試とは何かを、教員が日々自問自答しながら、入試問題や大学側から出された課題について深く考えていくことが重要だと思います。その答えが正解かどうかはわかりませんが、常にそういった視点で取り組んでいます。

また、生徒としっかり対話を重ねながら、生徒自身と教員が新たな気づきを得られるような機会を作り、その中で入試問題や大学の入試制度について話し合い、学びあうことも大切だと思います。また、アドミッションポリシーが示されている今、それをどのように解釈すべきかを高校現場はしっかり理解し、大学側は入試をできる限りシンプルにしていたくことは、現在の高校現場の職場環境や多忙な先生方を取り巻く状況を考えると、非常に重要であると考えます。そのような方向性に是非とも進んでいただけたらと思います。

以上です。

加美山若奈教諭：

今おっしゃっていただいた内容と重なる部分が多いかと思いますが、やはり、シンプルで生徒が本来の力を発揮しやすい入試形式が求められているという点に共感します。学力試験や書類審査の形式が複雑すぎると、受験生や指導する側の負担が増え、その結果、本来の学力や努力が正当に評価されにくくなる

恐れがあります。

小論文や面接などを取り入れる場合でも、奇をてらった形式ではなく、生徒がこれまで積み重ねてきた努力や学びを素直に表現できるような形式が理想的だと考えます。また、生徒にとって何をどう準備すればよいかが明確であることも重要です。型が分かる入試形式であれば、生徒が安心して準備に取り組むことができると思います。

シンプルで公平な評価基準が設けられることで、教員や生徒の負担を軽減し、より良い教育環境を実現することが可能になるのではないのでしょうか。

松村成通教諭：

1つ伺いたいことがあります。先ほど募集要項について少し触れたのですが、読んでみると、年々アスタリスクの数が増えていくように感じられます。その中での質問なのですが、大学の先生方は他の大学の募集要項を目にする機会はどの程度あるのでしょうか？断片的にでも目にされることはあるのでしょうか？また、募集要項に関する情報交換などは、実際のところ行われているのでしょうか？

以上の点について、よろしくお願いします。

倉元直樹教授：

大学側の代表として申し上げますが、正直なところ、他大学の募集要項を真剣に詳細まで見ているわけではありません。ただし、研究という観点では、例えば加美山先生が興味を持たれた書類を集めて分析されたように、見る可能性はあります。とはいえ、言い訳のようになりますが、大学には独自の入試を設計し学生を募集する権利があります。そのため、他大学に口出しをすることは道義的に許されないという事情があります。ただし、研究の一環として「こういう傾向があります」と示すことは可能です。

また、日本の大学の特殊性として、入試方法が大学のブランディング戦略の一部として位置づけられている点が挙げられます。つまり、少し変わった入試方法を採用することで注目を集め、それが広報効果を生むという考え方があろうです。このような動きが結果的に互いの首を絞め合う状況を生み出しているのではないかと感じます。

もう一つ申し上げますと、他大学を評価する以前に、まずは入試の状況は非常に多様であることを認識する必要があります。シンプルに「学力検査がいいですね」と言ったとして、多くの高校が賛同したとしても、「それでは困る」という高校も必ずあります。単に「多様ですね」と結論付けるのではなく、グルーピングや類型化を行い、その中で最適な方法を研究し提案することには大きな意義があると思います。

業務上、例えば東北大学のような立場では、自大学の入試をしっかりと理解することが最も重要です。東京大学については、志願していた学生が東北大学に進学することもあり、その動向を把握する必要があります。しかし、それ以外の大学については、あまり関係がないという力関係の問題があります。入試業務のために他大学の情報をどの程度検討すべきかは、大学ごとに異なります。そういった意味では、私自身は不十分な対応をしているのかもしれない。

宮本友弘教授：

もう 1 人の大学の代表者としてお話をさせていただきます。他大学の状況を見る際には、例えば「情報の得点を何点にするのだろう」といった制度の変更が予告された場合に参考にすることがあります。その際、我々と似たような大学について募集単位ごとに確認してみると、正直なところ「ここはずいぶん複雑だな」と感じる場合があります。一方で、東北大学については手前味噌で恐縮ですが、募

集単位ごとの差がそれほど小さくなく、ある程度足並みが揃った形になっていると感じています。

これは先ほど話題に上がった「シンプルな入試が良い」という議論にもつながります。入試形式がわかりやすいことは、受験生にとってのメッセージでもあります。「何に対して努力すれば良いのか」が明確でなければ、受験生はどこに力を注げば良いのか分からなくなってしまう。その意味でも、わかりやすく明確な形を示すことが重要だと考えます。少し話が逸れてしまいましたが、大学側の立場として一言述べさせていただきました。

駒形一路特任教授（討議司会）：

中村先生も大学のご関係者ということで、他大学の状況についての意見があるとより良い議論ができと思いますが、東京大学についてはいかがでしょうか。

中村高康教授（討議司会）：

東京大学は少し特殊かもしれませんが、他大学の情報をそこまで詳しく見ていないのではないかと思います。ただ、見ている先生もいらっしゃると思います。少しお話してよいか迷いますが、東京大学では、入試制度や他大学の動向についてあまり積極的に関わっていない先生もいる印象です。一方で、密接に関与されている先生方は、他大学の情報や高校の学習指導要領についてもしっかりと見ていらっしゃるのではないかと思います。

ただし、専門分野的に関与が難しい先生方もいらっしゃるため、そういった方々にとっては「自分には関係がない」となってしまう場合もあるようです。その結果、関与の度合いに大きな差が生じているように感じます。

松村成通教諭：

はい、ありがとうございます。私の質問が少し分かりにくかったかもしれません。実は

制度についてというだけでなく、生徒や保護者が募集要項を読む際の話をしたかったのです。募集要項の中には募集内容を一覧表にしている形式があったりして読みやすいものもあるのですが、正直言って読みづらく誤解を招くようなものが多いです。そういう点で、他大学の募集要項を参考にされているのかお聞きしたかったのですが、思いのほか幅広い視点でお話をいただき、とても参考になりました。

駒形一路特任教授（討議司会）：

はい、ありがとうございます。その流れに関連する質問になるかと思いますが、神奈川県内の13私立大学が推薦書の様式を統一しようとする動きがあると聞きました。このような動きについて、高校側は歓迎するのでしょうか。松村先生、いかがでしょうか。

松村成通教諭：

そうすると、推薦書の中に各大学や学部で必要な内容が書かれないケースが出てきて、場合によっては大学側が少し困ることもあるのではないのでしょうか。それよりも、募集要項で生徒に求める学力を二重丸や丸といった形で一覧表にまとめていただけると非常に分かりやすいと思いますし、それに少し専門的な内容を加えて書くように指示していただけるといいのではないかと思います。

一方で、文章のみで細かい点について、しかも小さいフォントで書かれている場合は、非常に読みづらく感じます。この点については、保護者や生徒からもよく質問や意見を受けることがあります。

駒形一路特任教授（討議司会）：

神奈川県の話ですが、推薦書の様式や提出書類の様式に関するものだと思います。確か、愛知県の私立大学では、こうした取り組みをしばらく前から行っているような気がします

が、もし間違っていたら申し訳ありません。加美山先生、この点についていかがでしょうか。

加美山若奈教諭：

神奈川県の推薦書の様式について拝見しましたが、正直なところ、良い面と課題があると感じています。

まず、良い面としては、教員側でのスキルや伝達のしやすさが挙げられます。具体的には、「こういう書式になっているので、このような点を生徒を観察して積み上げていかなければならない」など、指導のポイントが明確になる点です。また、「こういったことをこういう表現で書ける」といった指導がしやすくなり、先輩から後輩へ、あるいは進路指導の経験者から新任者への伝達が容易になります。そのため、研修などもパッケージ化しやすいという利点があると思います。

一方で、課題としては、様式が書く内容を絞っているとはいえ、場合によっては負担が増える可能性がある点です。一部の大学では、生徒の名前や在籍確認だけで済むような簡易な推薦書を求める場合もありますが、それに比べると、統一様式では手間が増えることも考えられます。大学側が必要な部分に絞っていただければ、より効率的になるのではないかと感じています。

以上です。

中村高康教授（討議司会）：

現在、1つの大学や1つの学部の中で選抜単位ごとに複数の推薦方式や選抜方法がある場合もありますが、それに問題があるとは思わないのでしょうか。大学の側から見ても、そうした状況はどうなのかと感ずることがあります。

多くの場合、大学側はそれぞれの方式について自分たちだけの事情を基に要求しているため、比較的気軽に進めてしまっている可能

性があるのではないかとと思います。しかし、その結果、高校側にはどのような影響があるのか、お聞きしたいと思います。

加美山若奈教諭：

はい、もちろんそのような側面も否定はできません。従って、高校側としては、大学側が本当に必要とする情報に絞った形で推薦書や提出書類を求めているだけあればありがたいと感じています。例えば、材料をただ集められるだけ集めようというような様式だと、高校として対応が難しい場合があります。この点については、大学側で必要な部分を明確にしていけると助かると思います。

松村成通教諭：

提出書類の作成の実際についてのご質問についてですが、なかなか明確にお答えしづらい部分もありますが、ここで議論するよりは実際に作成される担任の先生に大学から直接意見を聞く機会を設けていく方が良いと思っています。推薦書については、進路指導担当が直接書くことはありませんので、担任の先生の視点や意見が重要かつ貴重だと思います。

最近ではオンラインで大学側と直接お話しする機会が増えてきました。進路指導担当と話をしたいというご要望もよく伺いますが、可能であれば3年の担任の先生方の声も直接聞いていただけると、よりストレートな意見が伝わるのではないかとと思います。ぜひご検討いただければと思います。

駒形一路特任教授（討議司会）：

はい、ありがとうございます。すみません、高校への質問ばかりになってしまっていますが、私立大学で学校推薦型選抜の指定校推薦が増加している傾向についてお聞きしたいと思います。

これが日常の学習指導や進路指導にどのような影響を与えているかについて、具体的な

事例や影響を教えていただければと思います。加美山先生、この点についていかがでしょうか。

加美山若奈教諭：

はい、ありがとうございます。本校に限ったお話にはなりますが、状況をお伝えさせていただきます。本校は近隣に大学がないという事情があり、生徒が高校に入学した時点で「大学とは何か」という基礎的な内容から指導を始めています。

そのため、特定の大学を最初から目指し、そのために自分の学習活動を組み立てる生徒は非常に稀です。このような背景から、本校においては指定校推薦の枠が生徒の行動を直接規定する場面は比較的少ないように感じています。

以上です。

松村成通教諭：

指定校推薦についてですが、これはあくまで個人的な意見になります。お話の途中でも触れましたが、保護者の熱量が一番高いのは指定校推薦入試だと感じています。この入試については、人気のある学部や系統から依頼があることは少なく、必ずしも生徒の志望と一致していないことが多くあります。本当は別の学部に行きたい生徒が、保護者の熱意によって「この大学ならきっと合格できるから受けなさい」と説得されることも結構あり、その結果、生徒が板挟みになる状況が増えていっているように思います。

また、進路指導全体に対する保護者の影響力が以前よりも格段に高まっていると感じています。かつて、私が担任をしていた時に、ある生徒が一生懸命頑張っているにもかかわらず模擬試験などで結果が出ず、精神的に追い詰められた際に、邪道ではありますが、指定校推薦を指導の1つの選択肢として利用して、生徒の精神的安定を図ったこともありました。実際、

それで立ち直ることができ、大学で頑張っている姿を見て安心したことがありました。しかし、最近ではそのような生徒をサポートする方向ではなく、保護者の意向が強く影響している印象があります。

以上です。

駒形一路特任教授（討議司会）：

以前に比べて、保護者の皆さんが大学進学に関する情報を集める量が格段に増えているという印象がありますか。

松村成通教諭：

はい、その印象は非常に強くあります。また、生徒同士で指定校推薦に関する校内の情報を共有し合い、さまざまな形で情報を集めている様子も見受けられます。

加美山若奈教諭：

本校の場合、どちらかというと、まだ従来の形が多いです。保護者の方々も、まずはゆっくり情報収集を進め、その上で「最終的には子ども自身に任せます」というスタンスの親御さんが多い印象です。

松村成通教諭：

すみません、1つ補足させていただきます。指定校推薦にはいろいろな条件があり、最近ではその条件が複雑で数も多くなりすぎているように感じます。それをエクセルなどで一覧表にして掲示する際、データの正確性に対して非常に不安を感じることがあります。もちろん、こちら側で作業をしっかりと行えば良いのですが、チェックを何度も繰り返しても、データを作成している途中で間違いに気づき「ひやり」とすることが時々あります。

駒形一路特任教授（討議司会）：

指定校推薦の枠の公表方法については、各高校でさまざまなやり方があり、苦勞されて

いる方もいらっしゃると思います。今日ご参加の皆様の中にも、同じように悩まれている方がいるのではないのでしょうか。学校ごとの事情によって異なるとは思いますが、例えば2年生の生徒が指定校推薦の情報を見て翌年に向けて準備を始めたり、それを保護者が勧めたりすることがあるなど、保護者の情報量がますます増加している印象を受けます。

また、最近の報道では、例えば週刊誌で「総合型選抜で下克上」といった内容が取り上げられることがあります。この「下克上」という表現についてですが、一般選抜では入れそうもない大学に総合型選抜で入ってしまうということの意味しているのだらうと思います。本来、このふたつを比べること自体おかしい話です。このような報道のあり方には疑問を感じますし、高校の進路指導をより難しくしている一因にもなっていると思います。少し余計なことを申し上げましたが、以上です。

中村高康教授（討議司会）：

少し理念的なお話もさせていただきたいのですが、宮本先生のご報告の中で、発達段階に基づいた学習指導要領の在り方について触れられていましたが、このような考え方について、高校の立場からすると、すんなり受け入れられるのでしょうか。

私自身は、宮本先生のおっしゃる内容に非常に共感しましたし、理解できる部分も多かったのですが、その点についていかがでしょうか。どちらの視点からでも構いませんので、ご意見を伺えればと思います。

加美山若奈教諭：

正直なところ、教員ごとに受け取り方が異なるのではないかと感じます。それは、先生方がこれまでどのようなことに興味を持って取り組んできたのか、あるいはご自身の経験から、それが納得感のある形で腑に落ちる感

覚を持っているかどうかによって左右されるのではないのでしょうか。

実際、高校の教員の中でも物事の受け取り方には大きな違いがあります。例えば、先ほど触れた働き方改革や進路指導の問題についても、同様に教員ごとに捉え方が異なります。そのため、こうした話題についての受け止め方も個別に大きく異なってくるのではないかと感じています。

松村成通教諭：

先生のおっしゃる通り、さまざまな先生方と近づき、話をする機会があるのは非常にありがたいことです。ただ、現在、研修が「あの研修、この研修、その研修」と多くなりすぎている状況もあり、時には「また別の話を聞かなきゃいけないのか」と感じられることもあるのではないのでしょうか。

だから、「この研修はこの目的のためにやるのです」といった一言を添えて説明いただくと、先生方にもより意義が伝わりやすくなると思います。先生方が悪いというわけではなく、そうした状況が重なって余裕を持っていない場合があるということです。

普段から親しくしている先生や、興味のある内容を話してくださる先生のお話は、すんなりと腑に落ちるのですが、そうでない場合もあることをご理解いただければと思います。

中村高康教授（討議司会）：

了解しました。私は、宮本先生の問題提起は、現場の先生方に対して非常に良いメッセージになるのではないかと感じています。学習指導要領や学力の 3 要素の話もそうですが、宮本先生が示されたように、幼稚園から大学までずっと同じ基準で考えるという現状について、私は以前から疑問を持っていました。

私自身もその点について話すことがあり、宮本先生をはじめ、研究者の方々からも似た意見が多く聞かれます。それに対して、現場

の先生方からはどのような声が上がるのか、またどのような温度感で受け止められているのかが気になるところです。もし可能であれば、現場でも「ここに問題があるのではないか」といった意見を共有し、協議していただくことが必要だと思っています。

学習指導要領や学力の 3 要素そのものを否定するのではなく、それらをより良く活かすために、もう少し柔軟で緩やかな捉え方をする必要はあるのではないのでしょうか。ガチガチに捉えるのではなく、柔軟な議論の場を設けることが重要だと感じています。今後も、その点について、現場ではどのように考えられているのか、お聞かせいただけると幸いです。

駒形一路特任教授（討議司会）：

そろそろお時間が近づいてまいりました。本日はご協力いただき、ありがとうございます。質問の受け答えはここまでといたします。

ここまでのお話を踏まえ、もし何か補足があれば、この機会にお聞かせいただければと思います。また、最後に登壇者の皆さまから一言ずつお話をいただきたいと思います。最初に、加美山先生からお願いいたします。

加美山若奈教諭：

はい、先に失礼いたします。本日は、このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

私自身の問題意識として、多様性が現場にどのように影響しているのかという点に注目しておりましたが、それにまつわるさまざまな観点からお話を伺うことができ、非常に多くの学びがありました。特に、課題の多さを再認識するとともに、新しい視点もたくさんいただきました。

特に印象に残ったのは、教員の意識の持ち方や、教員の代替わりに伴う体制づくりにつ

いてです。まさしく今が過渡期であることを強く感じました。そのような中で、生徒たちにとってより良い形で、そしてその後の成長につながるような入試の在り方を、大学と高校が協力して探っていける機会があることに感謝しています。

本日は参加させていただき、本当にありがとうございました。

松村成通教諭：

私も同じく、このような場を与えていただき、本当に感謝しています。話している内容が支離滅裂で、自分自身まだまだ未熟だと感じる部分も沢山ありますが、今回、本校の若い先生方にも参加してもらったことや、この会の前後で仙台第二高校様や仙台第三高校様に学校訪問をさせていただいたことが非常に貴重な経験になりました。この場でも御礼を申し上げたいと思います。

このように学校を離れて新しい視点を得られる機会は、とても大切だと感じています。また、他大学の方々もいらっしゃる中で、こうした形の会を引き続き開催していただければと思います。アフターコロナの時代において、若い先生方や中堅の先生方がしっかりと学べる場を守っていただければ幸いです。

本日は本当にありがとうございました。

宮本友弘教授：

はい、まず 1 点、補足させていただきたいことがあります。先ほどの質問で触れられた「下級学校への悪影響の排除」についてですが、私の説明が不十分でした。実は、大学入試の 3 原則には、「公平性の確保」「適切な能力の判定」、そして「下級学校への悪影響の排除」という 3 つが含まれています。この 3 つのどれか 1 つだけに偏ることは望ましくなく、バランスよく均衡を保つことが重要です。現在の高大接続改革では、「下級学校への悪影響の排除」に特に力が入っているように見

えますが、そのバランスが崩れていく可能性がある点には注意が必要だと思っています。

今回、この会に参加させていただいたことで、学習指導要領の話が高大接続改革と密接につながっていることを改めて確認することができました。また、自分自身がこれまで行ってきたことや考えてきた理念、エビデンスについて、「どのようにすれば現場に届くのか」を再認識するきっかけとなりました。エビデンスを「作る」「使う」ことはもちろん重要ですが、それ以上に「伝える」ことの重要性があると感じています。

私たち大学人が学術的な研究を進める中で、それを現場にどう伝え、どのように「腑に落ちる形」で共有していくかが、これからの課題です。そのためには、高校の先生方と大学人がしっかりとコミュニケーションを取れる場を設けることが、ますます重要になると思います。

本日はこのような機会をいただき、ありがとうございました。

倉元直樹教授：

いろいろなことを考えながらお話を伺っていたのですが、改めて感じたのは、大学入試の本質は「妥協の芸術」なのかな、ということです。これは私の造語です。申し訳ありません。1つの理念を徹底しようとする、と、多様な現実に対応しきれなくなる。大学入試にはさまざまな正しさがあります。例えば、「下級学校への悪影響の排除」という正しさと、「公平性の確保」という正しさ。この 2 つが完全に一致することはありません。

重要なのは、1つの答えに収束させるのではなく、皆が何とか許容できる範囲を見つけていくことです。大学入試に関わる者として、それがこの制度の面白さでもあると感じています。それぞれの立場が違う中で、全体を調整していく必要があります。その過程では「多様化」ということばの本当の意味を考えること

が大事です。「多様化」とは単に「それぞれがバラバラでいい」ということではなく、多様な現実の中で、どこなら飲み込めるかを探り、それを整理していくことだと思います。

東北大学に所属すると、どうしても東北大学の視点からしかものを考えられない部分があります。だからこそ、学会の場などで、さまざまな立場の方のお話を伺いながら、フラットに学問的な議論を進めていくことが重要だと感じています。

最後は大学入試学会の宣伝のようになってしまいましたが、できるだけ多くの方々に関わっていただき、少しずつ大きく育てていけるといいなと思っています。それが結果的にお互いにとって良いことになるのではないかと、改めて感じています。

以上です。

駒形一路特任教授（討議司会）：

はい、それではお時間となりました。登壇者の皆さん、ありがとうございました。長い間お疲れ様でした、お席の方に戻りください。

これで討議を終了したいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

閉 会 の 辞

東北大学理事
滝澤 博胤

林如玉助教（司会）：

それでは、最後に主催者を代表しまして東北大学理事，滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。滝澤先生，よろしくお願いいたします。

滝澤博胤理事：

皆さん，今日は午後 1 時から 4 時間という長丁場でした。本当にお疲れ様でした。私自身，4 時間でかなり内容が盛りだくさんだったなと感じています。「大学入試の多様化」という言葉がキーワードでしたが，確かに時代が変わり，社会や文化，人々の考え方や暮らしも変化する中で，大学入試が多様化していくのは当然のことだと思います。

今日は，大学側も高校側もさまざまな面で苦労されているというお話が中心でしたが，皆さんが非常に真剣に，多角的に物事を考えておられることがよく理解できました。

私自身は実は，本来工学部の応用科学の人間です。ですから，物事をもっと単純に捉え，ことの本質がどこにあるのか，どうすれば最適解にたどり着けるのかを，もう少しシンプルに考える方がいいのではないかと思います。現在あるさまざまな状況や問題点を並べた上で，そこからどうやって最適解にたどり着くかを考えることが，一番良い方法ではないかと感じています。なお，この点については，明日からの 2 日間にわたる学会で，ご専門の皆様方の議論に期待したいと思っています。

そこで最後に，実はこの高等教育フォーラムのポスターを眺めて締めくくることが，毎年



の私の役割となっております。ただ今回は非常に解釈が難しいポスターで、「これをどう受け取ればいいのだろう」と考えさせられました。この絵が伝えようとしていることについては，人それぞれ感じ方があるかと思いますが，私には地球を中心に天空が回っている古典的な天動説をイメージさせるものでした。そのときふと，「自分を中心に天空の星が回っている」という古典的な考えに浸っているうちに，足元から人が少しずつ離れていき，最後には木も朽ち果ててしまうような光景が浮かびました。

一つ一つの星がまさに **Shining Star**，つまりタレントだとすると，それが高校生を象徴しているように感じます。そして，高校生たちが外部を担いながら，大学を中心に足元をぐるぐる回り，自分を中心に次々と回遊してくる——そんな考えを抱いているうちに，いつの間にか，「それでも地球は回っている」という心理にたどり着きました。これは，やはり星の観測を繰り返した結果だと思います。

いろいろな方位を設定し，星を観測することで，初めて「自分の方が回っているのだ」と気づいた。それが地動説の本質ではないでしょうか。そう考えると，私たちもどうでし

ようか。星を観測するように、どの方位に目を向け、そこにどんな星があり、どんな輝きを持ち、どんな動きをしているのかを観察することが重要だと感じます。これこそが物事の本質を見極める一つの手段だと私は思います。

ただ、この点については、皆さんそれぞれにさまざまな考えがあると思いますので、ぜひ明日以降の学会で大いに議論を深めていただければと思います。本日は遅くまで貴重なお時間をいただき、大変有意義なひとときを過ごせたのではないかと思います。これからも活発な議論を繰り広げていただき、より良い入学者選抜のあり方を見つけていただければと願っております。本日は本当にありがとうございました。

(拍手)

林如玉助教（司会）：

滝澤先生，ありがとうございました。

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。お忙しい中、最後までご参加いただき、ありがとうございました。

講評 1：第40回東北大学高等教育フォーラムに参加して

青森県立青森北高等学校
教諭 奈良 孝史

1. はじめに

第40回東北大学高等教育フォーラムにご招待いただき感謝申し上げます。今回のテーマ「大学入試の多様化を考える—新学習指導要領と総合型選抜の拡大—」は、より高校の視点に近い、高校教員が実際に感じているところを反映させて設定していただいたのではないかと思います。大学は大学入試をどのように位置づけているのか、「大学入試の多様化」をどのようにとらえているのか、非常に興味深く拝聴しました。

2. 基調講演

高校教育の転換と大学入試のジレンマ

東北大学 教授 宮本友弘 氏

フォーラムのテーマである「大学入試の多様化」について分析した内容の講演で、現在の「大学入試」について改めて確認することができた。

講演では、はじめに大学入試の多様化の現状について、経年変化のデータから特に総合型選抜の割合増加について示した。その上で、多様化には選抜資料、学生集団、受験機会の3つの側面があることを指摘した。そして多様化を方向付けている要因として、少子化、高等教育の大衆化、定員確保を挙げた。続いて、これらの多様化の背景として新学習指導要領と高大接続改革があり、これにより学力の3要素の把握とパフォーマンス評価が求められることに言及し、最後に大学経営の視点から、定員確保という課題もあることを話した。

講演は筋道だったわかりやすいものであった。特に多様化には複数の側面があるとの指

摘には深く同意できた。その背景にある少子化と高等教育の大衆化は、高校でも全く同じことを感じている。

高校にとっての大学入試は、1つの大学でも複数の多様化が重なり合っているに加えて、大学も複数あるのでさらに多様化は広がっていく。混沌化しないようにするだけかなりの時間と労力が割かれているのが実際である。

多様化が進む現在だからこそ、現状の把握と整理から始めることが大切なのだということを改めて強く感じた。

3. 現状報告 1

加速する大学入試の多様化と高校現場の実際—出願書類作成指導に関する調査から—

宮城県佐沼高等学校 教諭 加美山若奈 氏

大学入試の多様化について、出願書類作成指導の点からの報告であった。同じ地方公立高校の教員として、現場の実感がよく伝わってきた。

はじめに、人口減と少子化で志願者が減り、生徒の学力と進路希望が多様化することで、指導も個別化・多様化する一方で、教育資源は少ないという現状を述べた。次に、そこに大学入試を当てはめて、総合型選抜が拡大しているが、その時期や評価の多元化が教員と生徒をより圧迫する方式であることに言及した。最後に、総合型選抜の評価方法のうち、書類について51大学への調査結果から、指導・評価や選抜をめぐる複雑化・細分化の緩和が必要という報告がなされた。

高校現場が多様化に振り回されていることはよく理解できる。現状把握のため出願書類

を分析した試みは興味深いものだった。大学には個性があり、それはアドミッションポリシーや出願書類を含む入試の内容にも反映される。さらに、推薦書以外は本人が作成記入するものであり、大学としては書類作成も含めて本人の力を評価するということだろう。しかし、実際の高校現場では報告にあったとおり、そうはいかずに教員が何度も指導しているのが現状だと思う。生成AIも身近になった現在にあって、選抜資料として書類を評価することについて大学にも考えてもらいつつ、高校の負担を減らす方法についても検討する必要があると感じた。

4. 現状報告 2

多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか—西日本の地方公立高校の現場より—

山口県立下関西高等学校 松村成通 氏

自己紹介の後、総合型選抜との関わりについて、前任校と現任校での経験を話した。そして総合型選抜と学校推薦型選抜について、どのような入試方法なのか生徒・保護者を含めて理解が不十分なのではないか、高校現場が入試制度の多様化に対応できていないのではないかと述べた。そして、総合型選抜の今後について、基礎学力測定のための試験を課す条件で加速してほしい、出願開始を10月以降にしてほしいという提案があった。

総合型選抜と学校推薦型選抜について、生徒・保護者を含めて理解が不十分なのではないかという点については全く同感である。ただ、教員については、理解はしていても昨今の社会の状況から難しいことも多いのかもしれないと思う。生徒や保護者に本来の趣旨をどれだけ説明しても理解が進まず、ただ「易きに流れる」傾向は年々強くなっていると感じる。

また、総合型選抜を加速するには基礎学力測定のための試験を課す条件で、ということも現場の教員からの切実な声だと思う。高校

が大学入試制度に対応できていないという言い方で、校内の会議や教員自身の大学入試経験の変化を例に挙げていたが、それだけではないだろう。教科指導と年内入試の両立は生徒にも教員にも大きな負担となっている。ある場合には公平を、ある場合には個別(特別)を求めてくる社会にあっての対応は非常に困難である。

5. 討議

指定討論者の倉元氏による講演者と報告者への質疑応答から始まり、主に大学側から高校の状況を聞く形で情報交換が行われた。

基調講演についての補足として、マジックワードは思考停止への誘導で、気を付けなければいけないという倉元氏の指摘が興味深かった。生きる力、多様化、高大接続改革、学力の3要素など、入試にかかわる多くの言葉がマジックワードとして挙げられていた。指摘されると、確かにどういう意味なのかあいまいなまま使っているとうなずけるのだが、普段は気づかない、というか考えないことが多い。まさにマジックワードは思考停止への誘導であり、言葉に振り回されているのだと感じる。

マジックワードに限らず、教員自身の「考える」ことが減っていると感じるのは、教員の多忙化と深く関係していると思う。現状報告にもあったが、多様化が個別化になり、特に地方の高校では、その個別の対応のほとんどが過剰に高校に委ねられている状況である。高校が受け持つ部分が大きくなりすぎており、この状況は簡単には改善できないと感じている。

6. 終わりに

私の経験としては、四年制大学への進学を希望する生徒が多い高校での勤務が19年になり、そのうち14年を進路指導部に所属している。その間だけでも大学入試は様々な変化してきた。もちろんそれは学習指導要領が改め

られるのに伴うものもあるが、少子化や多様化といった社会の状況にも対応してきた結果だったと思う。生徒にとってはその1年がすべてであることも重々承知だが、私個人の実感としては、手探りながらも時間をかけて大筋を作り、少しずつ改善しながらようやく定まってきたら、また次の改定がくる、という感覚になってしまっていることは否めない。

多忙化の解消に向けて、システム化、マニュアル化、共通化を進め、場合によっては業務を切り離す（アウトソーシングでは外部とのやり取りが増え、かえって複雑化することもある）ことを考え、実行もするが、現状報告にもあった通り、教員の異動サイクルの早さや、少子化に伴うクラス減や学校減による教員数の減少が影響し、その効果は薄いというのが現状である。教員自身の働き方に関する見方や考え方が変わってきている。様々な要因により、学校という組織に余裕が無くなっていると日々感じている。

このように大きな問題に対しては、知恵を結集して取り組むしかない。大学との縦のつながりと、高校同士の横のつながりが重要である。今回のフォーラムで得た知見は非常に貴重なものであった。

講評 2：東北大学高等教育フォーラムに参加して

岩手県立盛岡第三高等学校
進路指導主事 小原 謙一

今回のフォーラムのテーマは「大学入試の多様化を考える―新学習指導要領と総合型選抜の拡大―」というものである。総合型選抜の拡大により、生徒の選択肢や受験機会が広がるというメリットの反面、宮本教授の基調講演での指摘にもあるように、選抜資料や入試システムの多様化が現場に混乱を生じさせているデメリットの部分も感じている。混乱が生じているということは、今までのものと変わってきたということである。自分の進路に関する指導を振り返り、どういった部分が変化してきたのかを考えていきたい。

2020年以前の進路指導では、総合入試といえど東北大学のAO入試であり、推薦入試といえど、他の国公立大、私立大（指定校推薦含む）のものという印象であった。特にも東北の県庁所在地以外の地方公立高校に通う生徒にとって東北大学のAO入試は、東北大学に進学できる大きなチャンスであり、推薦入試もまた、国公立大学に進学できるチャンスとして捉えられていた。また、国公立大学進学者数を一定数確保することを目標とし、地域からも求められている地方公立高校にとっても、推薦入試の合格者をできるだけ多く出すことが重要な進路目標の1つであった。

私が以前勤務していた学校で3年生担任を務めた時は、多い時で40人クラスから半数以上の生徒が総合入試、推薦入試に挑戦することもあった。形式や記載内容も異なる相当数の推薦書や評価書を作成する業務に加え、生徒が記入する志望理由書等の指導もしなければならなかった。生徒作成書類も担任による指導、確認に加え、学年主任、進路指導主事、

副校長、校長に回覧、点検を受ける必要があった。生徒が自力で作成した書類がそのまま何の訂正や加筆もなく、回覧されることは皆無であり、ほとんどの場合は生徒に書き直しの指示を出さざるを得なかった。しかし、佐沼高校加美山先生の発表でもあったように、自力で内容を推敲し、適切な語彙、フレーズでもって表現できる生徒はほぼ皆無であった。よって、指導も当然、多くの時間を費やすことになり、提出期限がせまれば、教員側の案を生徒に提示し、それに従って作成させることもしばしばであったと記憶している。このような状況は現在も大きくは変わっていない。特に、学校推薦型選抜は学校を代表する生徒を出願するという教員側の自負のもと、より優れた書類を作成させる＝より長い指導時間ということになり、生徒と教員の負担が増加するという負のスパイラルに陥っている側面がある。

出願が無事終われば、次は面接、小論文の指導である。小論文の指導は、過去問演習によってまず型を身に付けることから始まる。面接も同様に型が重要になるが、教員の案を取り入れた志望理由書を自分のものとし、面接官の質問に対して会話をつなぐように受け答えできるには、やはり練習が必要になる。これが出願前の10月初旬から始まり、受験日の11月まで続いた。まさに、受験生を送るというよりも、受験生を作る作業だといっても言い過ぎではないような状況であった。また、放課後講習を行っている学校では、小論文、面接の指導は講習終了後に行うという暗黙のルールが存在し、書類作成同様に生徒と教員

にとって負担となっている。

現在のように「総合型選抜」、「学校推薦型選抜」と名称を変えて、3年目を迎える。従来と比較し変化したとを感じる部分は、出願期間や募集要項等発表時期の明確化である。総合型選抜の出願は9月以降可能ということになった。早いところでは9月2日から出願開始という大学もある。出願に間に合うためには、7月中に生徒の意志を確認し、調査書等の学校からの書類も8月中には校内決裁を経なければならない。私立大学の総合型選抜も拡大し、中には併願型のものもあるため、受験を希望する生徒も増えている。この背景には、「年内入試」という表現と、特別型選抜の入学者数が一般選抜を上回る（国公立は7割強が一般）という情報が広がり、保護者の特別型選抜に対するニーズも高まった結果ではないだろうか。それによって、宮本教授、加美山先生、松村先生が指摘する、書類や形式の複雑化＝カオス化という状況を招いていると考える。さらに、生徒に入試について質問を受けた場合に適切な助言をするために入試要項の内容を理解する必要がある。オンライン出願も普及した結果、マイページの登録や受験料の支払いなど、従来の書類作成に加え、以前にはなかった手続きが追加されている。過去の経験をもとに、指導することが容易ではなくなっているのである。それが、多忙感に結び付き、本来の業務である教科指導にも影響を与えているのが実情である。こうした生徒にも教員にも不幸な状況を多少なりとも改善するためには、要項の簡略化はもちろんのこと、大学側が書類のどのような点を評価するのか、明示する必要がある。例えば、東北大学は教員向けの説明会等において、書類の記載内容について説明されるので教員側は非常に助かっていると感じる。また、学校側が作成する書類についても、生徒の様子がわかる最小限のものに留めれば、多少なりとも現場の多忙感は解消されるのではないだろうか。

出願書類だけでなく、入試システムのあり

方についても一考を要するだろう。今回のフォーラムにおける下関西高の松村先生の年内入試に対する提言には、同意する部分が多々あった。まず1点目が学校推薦型より総合型選抜を中心にし、基礎学力確認のために共通テストの受験を課すという点である。松村先生が指摘していたように、現在の学校推薦型は学校からの推薦というよりも、生徒が自らを、保護者が生徒を推薦という部分があることは、以前から承知しており、違和感を抱いていた。また、指定校推薦も大変ありがたい一方で、校内選考で苦慮しているという話も耳にする。よって、学校推薦というシステムではなく、総合型選抜の中の評価材料として、学校での評定平均や課外活動、英語資格を取りこむことで、従来、学校推薦で出願する層もカバーできるのではと思う。また、出願時期を10月以降にする点にも賛成である。9月からの出願だと、前にも述べたが8月夏季休業明けより準備をしなければならず、文化祭準備、定期考査等で慌ただしい中の作業となる。また、前期までの評定平均を基準とすることで、少しでも学習に取り組む期間を補償できることになる。

加美山先生が指摘しているように、選抜に「書類」を活用することにも懸念を感じる。生成AIの精度が上がり、瞬く間に普及した。また、それを活用して志望理由を作成することを謳う業者も散見される。信頼性や妥当性が危うい中、生徒が作成する書類を点数化することは限界に達しているのではないか。課外活動や探究についても、教育資源の地域格差やSSHと非SSHの差によって内容も大きく変化する。入試に向かう指導においても、教員個人の経験やその学校が培ってきたノウハウが大きく影響する。生徒個人に帰することのできない要因を差し引き、その個人の内部で育まれたコンピテンシーを評価するべきである。「知識」、「技能」はもちろんのこと、「主体性」や「表現力」もペーパーテストで計測できると思う。「学力の三要素」という

“マジックワード”と相容れないように思われる“ヒールワード”とされるペーパーテストだが、学習に主体的に取り組んできたからこそその結果であり、学習過程で身に付けてきた表現力が答案の中に見受けられるのではないか。これを具現化しているのが東北大学のAO入試であり、合格している生徒はアドミッションポリシーと合致し、主体性、表現力、思考力のいずれも優れている生徒である。

今回のフォーラムは大学と高校が互いに入試について直接提案をしあえる貴重な機会である。大学側も高校訪問や説明会を行ってはいくが、入試システムについて意見を交換する場とはなっていない。やはり、大学入試について率直な考えを述べ合う場面は、総合型選抜が拡大していくこれからの入試には必要である。より多くの大学がフォーラムに参加し、高校生にも教員にも有益で、かつ円滑な出願ができる入試設計が広まることを願う。

講評3：第40回東北大学高等教育フォーラムに参加して

仙台市立仙台青陵中等教育学校

教諭 星山 史門

1. はじめに

このたびは、貴フォーラムに参加する機会をいただき、関係の皆様には感謝申し上げます。私自身は進路指導主任でも進路指導部員でもないが、「大学入試の多様化を考えるー新学習指導要領と総合型選抜の拡大ー」という、日頃感じていたテーマであるため興味深く聴けた。他校の状況と大学の考え方を知ることができ、大変参考になった。

2. 基調講演

「高校教育の転換と大学入試のジレンマ」

東北大学 教授 宮本友弘 氏

近年、一般選抜が半数割れや学校推薦型や総合型のいわゆる「年内入試」が半数を超えているという状況にある。大学入試の多様化の原因の1つはコンピテンシーベースである新学習指導要領に合わせて、それをはかる大学入試が変化しつつあるからである。これらの現状を高大接続改革と新学習指導要領に注目し、行政文書を読み解き解説頂いた。新学習指導要領の内容に高大接続改革の記述を盛り込むことからわかるように、高大接続改革を強力に推進する姿勢を強く感じた。大学側も高校側もこの変化への対応に追われているのが現状であろう。

また、宮本先生は、大学入試にパフォーマンス評価を導入することについても触れ、成果もあるが信頼性の確保やコスト面の克服できない課題もあると結論付けた。その背景には大学が行う成果を重視する評価と小中高での学習改善等の評価では明らかな差異があるからという内容であったが、大学側の苦勞が伺える話であった。

さらに、宮本先生は、ご自身の児童を対象にした実証実験についての話もあった。「主体的に学習に取り組む態度の評価」の1つの側面である「学習動機付け」は外的調整（叱られるから）と内発的調整（おもしろいから）の二項対立構造ではなく、グラデーションがあり、発達段階によって関与する自律的動機づけが異なる。学力の3要素については内発的様相の違いをもう少し踏まえるべきとのことだった。内発的動機付け（おもしろいからやる）の対義語として外発的動機付けには「叱られるから」だけでなく、「恥をかきたくないから」「重要だから」「やりたいことだから」等の種類があり、そしてそれが小学5年生では「おもしろい」が強く、中学生では「重要だから」が強いことについて興味深かった。「主体的に学習に取り組む態度」というものが発達段階で異なるので評価をする際、それらを意識しなければならないと感じた。

3. 現状報告 1

「加速する大学入試の多様化と高校現場の実践―出願書類作成指導に関する調査から―」

宮城県佐沼高等学校 教諭 加美山若奈 氏

大学入試の多様化により、入試回数の増加（選抜種類の増加）、出願時期の早期化、評価項目の増加等により、高校教育現場の教員と生徒の負担は増大している。その中でも、主に総合型選抜と学校推薦型選抜で利用される志願者本人記載書類には、学校内外での諸活動を記載するものもある。書類に記載するためには体験を経験しなければならず、学校で「体験パッケージ」を用意するなど本来の趣旨とずれる状態になっている。また、地域

・学校・家庭の支援体制に影響してしまう。

また、加美山先生のアンケート結果によると出願書類の個別指導を経験した先生は9割にも及ぶ。本人のみの力で作成していない文章が本人の評価になることについて疑問を感じざるを得ない。このために費やす教員の指導の負担も問題点である。加美山先生は書類で多くを測ることは難しいこと、本来行うべき学習や教育活動へのリソース不足を招くため、学習評価や選抜の複雑化・細分化の緩和を求めるという結論であった。

書類作成については私自身も相当の時間を費やして作成した記憶がある。生徒にとっても、シンプルな様式で、どう頑張れば良いかわかりやすい形になってほしいと望む。

4. 現状報告 2

「多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか 西日本の地方公立高校の現場より」

山口県立下関西高等学校教諭 松村成通 氏
大津高，下関南高，下関西高のご自身の経験を話して頂いた。大津高の何も手をかけずに8倍もの入試を合格した生徒の例は本来の総合型選抜のあるべき姿だと感じた。また，山口県にある下関西高の生徒に遠い地の東北大学のAO入試を受験させるのは相当の生徒との信頼関係があるものだと感じた。

特に共感できたことは，学校推薦型選抜において本来学校が生徒を推薦するものではあるが生徒自らまたは保護者が推薦をお願いするという現状がある。私立大学の入学者の50%以上が推薦入試合格者ということも背景にあるが，保護者の年内入試への熱量が大きいとのことであった。これは私の勤務している学校でも同様であり，大学側の条件を満たせば推薦を通す傾向がある。このような現状から松村先生が話すように推薦という単語とは別なものを使用することを検討すべきだと感じる。

また，近年の多忙な高校現場で入試制度の

多様化には対応できないため，出願開始時期10月以降にしてほしいという話も共感できた。出願開始時期が早いと，どの定期考査の成績までを成績に含めるかということが会議等を含めていろんなところに業務の煩雑化を招いている現状がある。

5. 指定討論

討議の中で，あたかもそれがすべてのように思われ，それに従わなければならないようなマジックワードがあるとの話があった。高校現場でも「学習指導要領が変わったから」や「こう決まったから」といった具合で，政策的なものは絶対であり，現場では差異量はないように思える。一方，大学では考える余地があるという話があったので，是非高大接続改革というマジックワードにとらわれず高校現場の声を聞いて入試制度を考えていただきたいと感じた。

「入試の多様性は地域間格差を拡大するか」という話題があった。目に触れる情報量の差や，移動しやすさの差から地域間格差は広がるとのこと。加美山先生の報告にもあるように総合型選抜の書類上に体験を記載する部分がある以上，学校間，地域間で環境が異なるし，バックアップ体制の差があると改めて感じた。地域間学校間での情報量の差は大学から高校への情報提供や高校から情報収集を行うことで，本来あるべきではない地域間格差を多少縮めることができるのではないかと感じた。

「学校推薦型ではなく総合型を望まれる理由」という話題があった。ある大学では全体の募集人数が30人のうち，総合型選抜が6名，学校推薦が2名，一般選抜前期が20名，一般選抜後期2名と4回の入試を実施している。このように選抜方法が多様化していると指導が難しく，書類作成の手間もあり，シンプルな入試であってほしいと思う。特に学校推薦の枠を残しつつ，募集人数が少ない大学では，どのような意図があるのだろうか。年内入試

を1つにすべきで、1つにするのであれば負担の少ない総合型選抜にすべきという意見には賛成できる。

「学習指導要領に合わせて大学入試を変える」という意味が変わっているという話題があった。以前は、大学側が独自に特色に合わせた入試を設定することができるという前提があり、下級学校（高校）への悪影響は排除しようという意味合いであった。現在は、学習指導要領の理念まで反映した大学入試を設定しなければならないよう変化していることが分かった。そのことについて宮本先生は、指導要領を逸脱しないのは当然であるが、あまりにも今の学習指導要領にあわせるのはどうなのだろうかと話した。たしかに、難問奇問の排除のためという目的は理解できるが、大学の特色が薄まるのは多様化ではないと思う。

6. おわりに

今回、高校側の事情を知ることができ、高大接続改革による影響は教員の負担を増大させていることが分かった。学習指導要領の改訂で高校現場では様々な変化があり、大学側も新しい入試に対応するために試行錯誤していることが分かった。入試制度が多様化していることにより、高大と受験生に不都合が出ているように感じた。このような状況が早期に緩和され受験生が何に頑張れば良いかが明確になり、受験に集中できるような制度になることを願う。

講評 4：第40回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立本荘高等学校
進路指導主事 平田 哲久

1. はじめに

改訂高等学校学習指導要領（新課程）施行から3年目を迎え、いよいよ新課程に準拠した大学入試が目前に迫ってきた。新課程で謳ってきた思考力・判断力・表現力が大学入学共通テストや個別学力試験、しいては総合型選抜・学校推薦型選抜試験で、各大学は受験生にどのように問いかけてくるのか。日々の業務の中でこの話題が絶えない中、招待参加者として本フォーラムに参加する機会を頂いた。フォーラムのテーマである「大学入試の多様化を考える——新学習指導要領と総合型選抜の拡大——」は正に高校現場における直近の課題であり、今後の進路指導の方向性について改めて考える大変よい機会となった。

2. 基調講演

「高校教育の転換と大学入試のジレンマ」

東北大学教授 宮本友弘 氏

宮本氏が述べているように、ここ数年の大学入試の多様化は高校現場でも強く感じている。以前だと旧AO入試や推薦入試は募集定員が少なく、教員だけでなく生徒にも、志願理由書作成や面接練習に時間が割かれることで、一般受験の学習が疎かになるといった風潮があったと感じている。近年は総合型選抜・学校推薦型選抜の募集定員増加と前後して、学力の三要素を多面的に評価しようとしている大学側の姿勢が、提出資料や出題傾向から窺える。新学習指導要領が大学入試の在り方を徐々に変え、学力の三要素によって高校教育との結び付きを強めた。高校側も、より一層大学との学びの接続を意識した教育を展開していく必要があると考える。

パフォーマンス評価を大学入試でどのように導入していくかは大いに関心がある。小・中・高では評価基準にルーブリックを用いることが多いが、到達状況は評価者の主観が前提にある。弁別性を図る選抜試験にどのように馴染ませるのか。正誤判定によって可否を判断できるペーパーテストと同等の信頼性をどのように確保していくか。また、仮に探究力による評価が主流になるとしたら、今度は探究力を育成する高校側の学校格差が顕著になる恐れはないだろうか。探究型学習は授業では実践されているものの、総合的な学習の時間等で発展的な学びを求めた際、学校間のみならず家庭間や地域間でも体験面等で差が生じていることは否定できない。大学側もその点を考慮していると思うが、高大接続の観点から高校側も探究力の育成について一層の精進が求められると考える。

年を追うたびに様変わりしていく大学入試に対し、試行錯誤しながら指導を重ねてきたが、大学側が何に基づいて入試改革を進めているかを複数の観点から知ることができた。進路指導のみならず、これからの高校教育の在り方について再考する契機となる基調講演であった。

3. 現状報告 1

「加速する大学入試の多様化と高校現場の実態 ——出願書類作成指導に関する調査から——」

宮城県佐沼高等学校教諭 加美山若奈 氏

加美山氏が冒頭で述べられている地方公立高校の現状は、そのまま本校にも当てはまる。地方のリソースの少なさを学校が請け負う状

況は、今後ますます加速化していくことは優に想像できる。新学習指導要領への対応は本校でも喫緊の課題であり、限られた授業時数の中でいかにやりくりしていくか、正に議論の最中である。選抜制度の多様化、評価の多元化によって、生徒の受験機会や受験方法が増加するよい面もあるが、高校側の指導も多様化していることは由々しき問題である。指導体制そのものは本校でも確立しているが、いざ運用すると、出願校ごとの提出書類や日程の違い、受験内容の違いへの対応に苦慮している。書類に見る選抜の多様化・多元化の調査は、出願書類形式の違いをクラスター分析することでグループ化されており、大変参考になった。出願書類形式を分類化できるのであれば、指導体制のグループ化につなげられるのではないかな。吟味した上で、今後の本校での運用の参考にしていきたい。また、資料内の「生徒：評価基準が見えづらい→努力の方向を定めがたい、不安」は、受験生の最も不安とする所だと思われる。教員側も受験生がどのように評価されたかは主に可否でしか判断できない。得点開示による点数差はある程度知ることができるが、提出書類や小論文、面接のどの点が評価されたかは自己採点が困難であるため想像することしなできない。よりよい生徒を大学に送りたい高校としては、氏が最後に述べた、「指導・評価や選抜をめぐる複雑化・細分化の緩和が必要」に同意する次第である。

4. 現状報告2

「多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか—西日本の地方公立高校の現場より—」

山口県立下関西高等学校教諭 松村成通 氏

松村氏が述べられているように、総合型選抜と学校推薦型選抜の違いについて生徒や保護者は、「学校推薦型選抜は推薦会議で審議の後に学校長の承認が必要であり、総合型選抜は基本的に不要」との認識ではないだろう

か。生徒としては志望する大学の受験機会として、一般選抜以外にどちらかがあれば出願するといったケースがほとんどである。高校側としては、どの生徒が総合型や学校推薦型に向いているかを見極める必要がある。現在本校では、集会等で受験方式について説明した後に、どの方式から受験を開始するか生徒が考えた上で総合型・学校推薦型選抜での受験希望を期間内に申し出た上で、全職員による出願・受験指導に取り組んでいる。また、氏が述べている「高校現場が入試制度の多様化に対応できていないのでは？」について、本校は指導体制は確立したものの、出願・受験指導する際の生徒への対応は、担当する教員個人に委ねられている面が大きい。複雑化する入試制度にチームとして対応し切れていない面もあり、今後の指導の在り方について考える大変よい機会となった。総合型選抜の出願開始の時期については、今年度より調査書の記載内容が簡略化されたこともあり、昨年よりも早い段階で対応できるようになっている。その分、総合型・学校推薦型選抜の指導が早期に始められるようになったが、早期に始められる分、指導が長期化し、結果的に多忙化の解消を困難なものにしている一面もあることは否定できない。多様化・長期化する大学入試に対して、生徒・保護者と共にどのように、諦めず粘り強く向かっていくか、改めて考えるよい機会となった。

5. 指定討論

東北大学教授 倉元直樹 氏

倉元氏から提示された数々のマジックワードは、高校現場の立場からも大変興味深い。現場では中央教育審議会答申や学習指導要領等、様々な文書で提示される様々なマジックワードを文脈から解釈し、試行錯誤しながら教育活動に落とし込んでいく。「学力の三要素」は正に現在、現場で学びの根幹をなすものとして、全ての教育活動との接点を見いだそうとしている最中である。「測定評価」に

についても同様で、学力の三要素を育成し、その到達度を見定めるため、宮本氏が述べていた教育用語のキーワードの存在として「指導と評価の一体化」が現場でのマジックワードとして浸透している。中等教育という枠組みの中で、政策に沿って運営していく高校教育において、マジックワードは中々に重みのあるものである。このような状況でどのようにして独自色を出し、教育をよりよいものにしてくかが学校ごとの、そして教員としての腕の見せ所なのだと改めて考えさせられる。そのためのエビデンスに基づいた明確な測定評価が学校として確立されなければならないと考える。「入試の多様化は実はカオス化では」という視点には、私自身大いに賛同する。大学入試改革は今もなお過渡期であり、今後どのように推移していくかを私たち高校教員は常に注視し続けなければならないと実感している。その推移を見極めることも進路指導においては重要であり、倉元氏が述べる「進路の専門的な知識を持った教員」の育成は、学校の枠を超えて都道府県単位で重要になってくると思われる。今フォーラムのような校外の研究会への積極的な参加奨励を切に願うものである。

質疑応答の中で加美山氏が述べていた「広い意味での基礎的な学習に向かう力、読み、書く力にこれまで以上に目をかけていかなければいけない」現状は、多くの学校に当てはまる喫緊の課題である。特に教育リソースの乏しい地方では、高校入学までの学習量が都市部に比べて不足していると思われる。探究活動におけるプレゼンテーションやレポート作成ももちろん大事だが、作成に必要な不可欠な知識・技能や思考力・表現力・判断力の基本的な部分、いわゆる基礎学力を早期の段階で育成することの重要性を痛感している。そのためには松村氏が述べたように「目先のことをしっかりやっていく」指導が必要不可欠ではないだろうか。

6. 終わりに

閉会の辞で東北大学理事の滝澤博胤氏が述べておられた「時代の変化と共に考え方も変容していく中で、大学入試が多様化するの当然」であり、「今ある様々な状況・問題点を並べたときに、どうしたら最適解に辿り着くかを考えるのが一番いい方法ではないか」この視点を校内だけでなく、県内外の高校や大学の先生方と様々な機会で共有していきたい。そして、生徒のよりよい未来のために引き続き日々の指導に務めていきたい。

このような貴重な機会を与えてくださった東北大学高等教育フォーラム関係者の皆様をはじめ、貴重なご意見をくださった発表者の方々に厚く御礼申し上げます。

講評 5：第40回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立米沢興譲館高等学校

教諭 高橋 渉

1. はじめに

私が東北大学高等教育フォーラムに初めて参加したのは、探究科設置校、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校、県の進学指導重点校である本校に異動した令和元年である。当時の進路指導課副主任兼探究科の学科長として本校の探究型学習を牽引する廣瀬辰平教諭がフォーラムにて現状報告を行うということで、当時進路指導課の専任だった私も一緒に参加した。その後、廣瀬教諭の異動により、令和3年度から探究課長（校務分掌「探究課」主任）を引き継いだ。課長主任としての業務とSSH事業にかかわる業務の繁忙に加え、コロナ禍もあいまって、フォーラムにはなかなか参加できないままであった。今回、昨年度の招待参加者である山形県立山形東高等学校の棚村好彦教諭よりお声がけいただき、久々のフォーラムへの参加と、講評を執筆する機会に恵まれたことにまず感謝を申し上げたい。

第40回東北大学高等教育フォーラムは、「大学入試の多様化を考える－新学習指導要領と総合型選抜の拡大－」というテーマのもとで開催された。現在、私は理数科（理数探究科）主任兼SSH事務局長となり、本校に異動してから6年間担任を持っていないため、大学入試に対して進路指導の立場というよりは探究型学習・SSH事業推進の立場からの雑感を記させていただきたい。

2. 基調講演

「高校教育の転換と大学のジレンマ」

宮本友弘氏（東北大学教授）

大学入試の多様化の現状として、一般選抜に加え、学校推薦型および総合型選抜が急速に拡大し、2021年には一般選抜の割合が50%を下回ったことが指摘された。大学入試の「多様化」には、選抜資料の多様化、学生集団の多様化、受験機会の多様化などの複数の側面があるが、宮本氏は高大接続改革、特に学力の三要素の多面的・総合的な評価が大きな要因の1つであると述べられていた。また、高大接続改革と学習指導要領への関連性を指摘されていた。

新学習指導要領では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」の三要素が重視され、観点別評価が導入された。この改革は、単なる知識暗記型の評価から脱却し、生徒の主体性を評価し、探究的な学びを推進する内容へとシフトするものである。確かに、大学入試において三要素を適切に評価しようとすれば、入試への工夫が必要となる。自由設計入試としての側面が強いAO入試、現総合型選抜が拡大するというのは大変うなずける話である。

また、学力の三要素を評価するにあたり、パフォーマンス評価の導入と主観的評定における採点指針であるルーブリックの活用についての測定論的特徴や、近年導入され始めた探究力評価や探究型大学入試について、お話を聞いて理解することができた。加えて、学力の三要素の一体的把握について、学習動機づけにおける自律的動機づけの重要性と、小学校と中学校という異なる発達段階において

関与する自律的動機づけが違うということを理解することができた。

3. 現状報告 1

「加速する大学入試の多様化と高校現場の実態 —出願書類作成指導に関する調査から—」

加美山若奈氏（宮城県佐沼高等学校教諭）

人口減少と少子化により、高校への志願者が減少傾向にある反面、生徒の学力と進路希望先が多様化し、指導の個別化・多様化により多忙化していることや、観点別評価導入後の生徒の評価と学力の実態との差、目指される学びの形と制度との齟齬があることが述べられていた。

また、総合型選抜の受験者が増加したことで、指導の個別化、多元化、長期化を生み、選抜の多様化、時期の複線化、評価の多元化などが高校現場の教員と生徒を圧迫していると述べられていた。特に大学入試で活用される「書類」について、その傾向をクラスター分析されていたのは新しい観点であった。分析結果の詳細を伺うには少々時間が足りなかったのが残念であった。

4. 現状報告 2

「多様化する大学入試に生徒・保護者と共にどう向き合うべきか—西日本の地方公立高校の現場より—」

松村成通氏（山口県下関西高等学校教諭）

所謂「年内入試（一般選抜以外の選抜）」志望者が増加している点について、一般入試を主としながらも、ケースに応じて年内入試を導入する戦略で受験に向かわせているとのことだった。宮本氏の講演にもあった、総合型選抜・学校推薦型選抜の違いが不明瞭になっていることにも言及されていた。「学校推薦型選抜は学校長が推薦する選抜のはずが、生徒または保護者が自らを推薦する形式の選抜になっている」との発言は、なるほどその通りであると感じた。

私見だが、近年、子どもに受験でつらい思

いをさせたくない、できるだけ早く受験を終えたいという保護者が増加傾向で、それが学校推薦型・総合型選抜への安直な出願や後期試験の辞退を生んでいるのではないかと感じているが、松村教諭は世代交代で若手教員の中にも年内入試で入学した経験を持つものが増えてきていることにより、後期試験まで粘り切る指導が難しくなっているのではないかと指摘されていた。

また、募集要項の複雑さや読解の難しさ、9月1日出願に向けた調査書作成の煩雑さと出願ミスの懸念についても言及されていた。

5. 指定討論

倉元氏、宮本氏による、「教育用語における『学力の三要素』や『多様化』がマジックワード化しており、思考停止に陥っている。具体的に何をしたらいいかわからないまま、従わなければならない」という話にははっとさせられた。SSH事業にかかわっていると、公の文章や専門用語に触れる機会が多くなるが、しっかりと定義を理解しているか、また、報告書や申請書を書く際の用語（取組をアピールするための造語なども含む）をきちんと定義づけた上で使用しているか、などの点について、「定義されていなければ測定できない」という宮本氏の言葉を念頭に、見直していかなければならないと感じた。

加美山教諭の質疑応答による、地方において普段から入ってくる情報量の違いや移動のしやすさの違いによる総合型選抜の格差拡大の懸念はまさに地方の公立高校である本校にも言えることである。

6. 終わりに

中教審答申、高大接続改革、新学習指導要領について、今回の講演をとおして理念や密接なつながりを理解することができた。

しかし、現状報告にあったように、観点別評価や大学入試の多様化は、高校教員にはかなりの負担感を与えている。学力の三要素を

評価するにあたり、パフォーマンス評価の導入とルーブリックが重要であるが、正解・不正解の丸付けとは異なり、ルーブリックの作成をはじめ複数評価者間の目線合わせを含めた評価そのものに相当の時間を要する。評価の材料のために事あるごとに生徒に文章記述を求め、それにABCをつけていかなければならない、生徒も与えられたわずかな時間にいいことを書かなければならない、長文をかかなければならないという強迫観念に縛られ、生徒、教師ともに「評価疲れ」を起こしている。大学入試においては、選抜方式や選抜書類が多様化し、担任や進路指導課の業務量が激増している現状である上、入試対策で一斉指導ができず個別対応となってしまう、担当教員の負担が大きくなってきている。

そのような現場の現状がある中でも、大学入試は刻一刻と様変わりしていき、高校の現場でも迅速な対応、先見性のある対応が求められる。講演でもあったように、「探究型大学入試」など、探究的な学びを推進し、入試に活用していく流れは加速していくだろう。本校は探究科設置校、SSH第Ⅳ期指定校として、再度、探究型学習とは何か、生徒に身に付けさせるべき資質・能力とその評価方法について、普通教科の学習と課題研究との円環性について、自律的動機づけを促し生徒が自ら学ぶ姿勢を作る指導法についてなど、様々なことを模索していかなければならない。

結びに、東北大学高等教育フォーラムは大学関係者や有識者の方々と、現場の高校教員が情報交換、意見交換できる貴重な場である。基調講演や現状報告をしていただいた方々に感謝申し上げるとともに、今後も本フォーラムが末永く継続されることを祈念し、参加させていただいた御礼といたします。

講評6：フォーラムに参加して感じた思いと今後に向けて

福島県立福島高等学校
進路指導主事 渡邊 優輔

1. はじめに

この度は、東北大学高等教育フォーラムの40回目となる記念すべき大会であると同時に、大学入試学会が設立されて最初の大会が、このように対面及びオンラインで盛大に開催されましたこと、誠にありがとうございます。貴学がこれまでに積み重ねてきた大学入試に関する様々な知見が、大学関係者の方々のみならず、高校現場での実践に携わる私たち高校教員にも広く共有されるこのような場は、本当に貴重な学びの場であると改めて実感しているところです。今後も、こうした知的かつ実務的で、真に有意義な高大連携が継続されていくことを心から願うとともに、大学の先生方の研究活動に敬意を表しつつ、実践家の一人としては、日々目の前の生徒たちによりよい教育実践を届けることができるよう、今後も努力したいという思いを強くしたところです。

東北各県から一人ずつ本報告書に講評を述べる機会を拝命いたしましたゆえ、誠に分不相応ながらもこの度の公開シンポジウムに参加して去来した若干の感想を述べさせていただきます。

2. 基調講演：宮本友弘先生「高校教育の転換と大学入試のジレンマ」について

基調講演にご登壇された宮本友弘先生のお話（以下、基調講演）は、まさに「目から鱗」であると同時に、「だからやっぱりそうだったのか」という胸がすくような思いがするお話でした。「1.大学入試の多様化の現状」の部分では、現在行われている総合型選抜や、「マジックワード」として実に多義的に用い

られている教育界の「多様化」の現状について、これまでの研究成果に基づく丁寧な解説がなされました。それにより、総合型選抜や教育界の「多様化」といったものの歴史的位置づけが明確になったと感じました。とりわけ、AO入試に由来する総合型選抜が拡大傾向にある現状において、多様化された選抜資料というのが入試準備の複雑化につながっているというご指摘は、現場で生徒とともに入試準備を進める者の一人として、実感を持って受け止められました。このような知見に触れることは、日々目の前の業務に忙殺され、自身が置かれている状況を冷静に顧みることをしづらい現場の者にとって、その立ち位置を客観的な視野で見直す重要な機会そのものです。

基調講演で特に秀逸だったご指摘は、「2.新学習指導要領と高大接続改革」にあったと感じました。それは、今次の指導要領改訂が、高大接続改革の中で実施されているという鋭い分析でした。一教員としての正直な感想を申しますと、いわゆる「身の丈発言」によって、改革の目玉とされた大学入学共通テストでの記述式問題の導入や英語民間試験の活用が見送られたことで、高大接続改革はその目的を達し得なかった、という実感を持っていました。しかしながら、2008年及び2016年の中教審答申がいずれも高大接続を理念として謳っているという点で地続きにリンクしていることや、幼小中高の学習指導要領に一貫して「学力の3要素」の育成という点が盛り込まれ、その上で「学力の3要素」を測る大学入試選抜を設計することで高大を接続させようという流れの中にあるという分析には、非常に

納得感を覚えました。高大接続は終わっておらず、むしろ今後も「引き続き強力に推進されるよう求める」という答申の文言を改めて読んだ時には、まさに「多様」な思いが湧いてきました。

また、基調講演の中で分析されていた高大接続改革のコンセプトの1つである「大学入試が変われば、高校教育も変わる」という論理（washback effect）について、私自身はかねがね思うところがありましたし、共通テスト受験者が既卒生を含めて50万人以下になってきた最近では、その思いはなおさら強まっています。その思いとは、この論理が全国におよそ100万人いる高校3年生の半分にしか当てはまらない理屈である、ということです。個人的な話で大変恐縮ですが、いわゆる指導困難校と呼ばれる高校を振り出しとした自身のこれまでの教員生活を振り返ると、大学受験をする／しないを理由に、授業の質を変えたり、教科の本質から逸脱した授業づくりをしたりするようなことは、決してなかったように思います。むしろ、大学受験を前提としない生徒が多い学校であればあるほど、教科・科目が有する知的な面白さに気付かせるように、生徒の興味・関心を引き出す授業展開をしないといけない、とさえ思います。

ゆえに、新学習指導要領の理念というものは、本来的には大学入試とは無関係に、現場の先生方の日々の実践を通して実現されるべきであろうと考えますし、そうでありたいと思っています。誤解を恐れずに言えば、前述した論理を大上段に構えてとなえることそれ自体は、日々様々な高校の現場で地道に実践を積み上げている高校の先生方を愚弄するものであるという思いさえ、抱くものです。その点において、基調講演の中で言及されていたような、今後の大学入試選抜が「大学入試の三原則」の1つである「下級学校への悪影響の排除」が発展的に拡張されて歪められかねない状況下にあるとすれば、現場の教員としても非常に懸念すべき事態にあると受け止め

たところでは。

基調講演の後半部の「3.「パフォーマンス評価」と大学入試」は、学術的な理論と現場での実証の両面を兼ね備えた内容で、これも納得感を覚える内容ばかりでした。大学入試でのパフォーマンス評価の導入はチャレンジなことで肯定的に捉えることができる一方で、大学入試の選抜方法としての「信頼性」について、学術的な知見を基に分析すると疑念が生じる余地を含むものであるという現状は、生徒の進路選択とその先の人生の針路をともに考える現場の教員としては、大変憂慮すべきことのように感じました。

また、「学力の3要素」に関するSchmeckのモデルによる分析は、非常に参考になりました。個人的には、このモデルを見た時には、柴田義松『学び方を育てる先生』（図書文化、1992.）で提示されている学力構造と近いものを感じました。柴田は学力を「学んだ力（基礎的知識・技能）」と「学ぶ力（自ら学ぶ力、学び方）」と「学ぼうとする力（学習意欲）」の3つの要素で構成されるとしています。そして、この「学ぶ力」に含まれる「学び方」の重要性を説き、「学び方の論理的側面」と「学び方の技術的側面」を教育内容として系統的にきちんと位置付ける必要性を強調しています。これは、対象の本質や法則性に迫る学び方の学習である「問うことを学ぶ」という真の学問方法の習得を通して、「学び方の論理的側面」という「ものの見方・考え方」を育むことを主眼とした学力論であると言えます。この論が主張された1990年代当時においてさえ、柴田は、「学び方」が注目されず、教えられてもいないと指摘していましたし、そもそもこの論はブルーナーが1960年代に提唱した「学び方を学ぶ」（learning how to learn）という着想に基づくものであったことを考えると、基調講演の中や最後の討議の場でも指摘されていたように、「学力」という言葉それ自体がマジックワードとして使われている昨今の混迷ぶりを理解する上で

は、古くて新しい「学力観」をめぐる研究動向を振り返る大切さを実感しました。現場に身を置くことで、ともすると忘れがちなこうした教育研究の蓄積について、自身の実践を省察する観点として常に持ち合わせなければならないという思いを強くしました。

最後に、基調講演の実証的な分析である「4. 「学力の3要素」の一体的把握」において、ペーパーテストでも「主体性評価」が可能であるという示唆がなされたことは、現場にいる者としてとても励みになるものでした。こうした児童に対する実証的な検証から得られた分析は、空理空論ではなく地に足のついた現場の実践を踏まえた貴重な提言であり、しっかりと胸に刻みたいと思います。

3. 現状報告1：加美山若奈先生の報告について

加美山先生のお話（以下、現状報告1）は、先生ご自身が現場での教員経験を経て、アカデミックな立場に身を置くというハイブリッドなご経歴の持ち主だからこそ、現場目線での現状分析が多分に盛り込まれた発表でした。総合型選抜の機会拡大がもたらした「多様化」の影響が、進学指導の混乱を招きかねない実態にあるという分析は、まったくその通りであると感じました。複雑化・細分化した入試選抜のあり方により、本来学校が行うべき学習指導や教育活動へのリソースの不足を招きかねない現状というものは、全国的に少子高齢化が顕著に進み、人口減少の先にある危機が現実化しつつある東北地区の公立高校の教員にとって、クラス数減に伴う教員定数削減の影響が年々厳しさを増してきている点とあわせて、大学入試の制度設計をされる先生方にしっかりと理解していただきたいと思いました。

また、生徒の「活動」や「実績」の土台となる、家庭、地域、学校の持つ資源、もっと言えば受験生を取り巻く文化的資本が都市部と地方では決定的に異なる、あるいは段違い

の格差があるという状況の中で、それらが「書類」によって大学入試で「評価」されてしまうことへの現状報告1における懸念についても同感でした。この点は、最後の討議の場においても、「入試の多様化」が地域間格差をもたらしている現状についての意見交換がなされました。そこでは、加美山先生から、生徒が日常的かつ無意識的に認知する（できる）情報量は都市部と地方では圧倒的に違いがあることや、テレビ視聴が中心だった時代には受動的ではあったものの子どもが意図せざる情報源に触れる可能性もあった一方で、SNS全盛の今日的状況では「選択的」に切り取られた情報源にしか接していない子どもが増えていることで、学習の前提となる一般的な社会的環境が変わってきていることなどが話題に挙がっていました。指定討論者である東北大学の倉元直樹先生からも、全国学力テストで「バスの時刻表を読む」ことを前提とした場面設定を含む作問があり、自分でバスを待つ乗ることもない（できない）地方の実情を踏まえた時に、テストの暗黙の前提が肥大化することは避けられるべきだろうという指摘がされていました。なかなか地方の実情が世間を実感を持って理解されていないことが多々ある中で、生徒にとって公平な受験とは何かというものを、改めて考えさせられる思いがしました。

現状報告1の通底にあった、生徒の地道な頑張りを適切に評価してもらえるような大学入試の制度設計であってほしいという切なる願いは、地方公立高校で生徒とともに考える実践家の一人として、本当に心から共感できるものでした。

4. 現状報告2：松村成通先生の報告について

報告冒頭で自身を「進路指導の絶滅危惧種」と紹介された松村先生のお話（以下、現状報告2）は、東北地方と中国地方という地域の違いを超えて、共感できる内容がたくさんあったように思います。

まず、教員の異動期間の短期化に伴い、進路指導のノウハウの継承に難しさがあるという指摘には、とても納得感を覚えました。本校のような地区の伝統校であっても、生徒にいわゆる難関大に挑戦しようと思えるに足る「実力」を付けさせるような日々の授業や校内模試の作問といった、これまで陰日向に継承されてきた不文律の学校文化のようなものが薄れてきているという声を聞く機会が、年々増えているように思います。同様の声は、他県の地域基幹校に視察で行かせていただいても、よく聞くようになった肌感覚があります。そこには、「受験指導」や小手先のノウハウや技術といった表層的な部分から、生徒に向き合う際のその学校ならではのスタンスの共有や目線合わせといった深層的で言語化しづらい部分も含めて、総体としてあるように思います。本県は全国で3番目に広い県土を持ち、それゆえ都市部（と言っても最大でも人口30万人程度の規模）のみならず中山間地域や利便性の乏しい地域にも学校があるため、「全県的な教員配置」や「校種・系列をこえた人事交流」というお題目のもとで、教員の異動が様々に行われている現状があります。そうした理念は、当然ながらある程度理解できる一方で、倉元先生が繰り返しおっしゃっているような「進路指導のエキスパート」を育てるという視点から見ると、人的資源の活用という側面では時に非効率な教員配置にもつながりかねない状況というのは、どの自治体でもあり得ることなのだと実感しました。

また、学校推薦型選抜の実態が、「学校が『推薦』する選抜」から「『生徒』が自身を推薦する選抜」や「『保護者』が我が子を推薦する選抜」に成り代わっていないかという指摘については、身につまされる思いになりました。校内選考の場が、学校として推薦したい生徒を選考する場ではなく、校内選考に対する生徒や保護者へのクレームの未然防止を徹底する場になってはいないか、という現状報告2の趣旨には、日々目の前の生徒対応で

抜け落ちてしまいがちで見失ってはいけないものを見つめ直す重要な契機となったように感じました。

また、現状報告2で最もはっとさせられたのは、教員そのものに対する未来予測でした。それは、総合型選抜をはじめとする「年内入試」（これは誤解を招く表現であるという指摘は本フォーラム内でありました）の受験機会が拡大することは、そうした選抜方法で大学に入学して教壇に立つ教員の増加につながり、そうした経験しか持ち得ない教員が、果たしてどこまで生徒に一般選抜、特に後期日程まで「粘らせる指導」ができるのだろうか、という問題提起でした。これは同時に保護者の未来予測でもあり、そうした保護者が増加していく中で、学校として真にやりたい進路指導というものがどこまで実現可能なのか、という未来への問いでもあるのです。社会状況の変化に伴い、学校を取り巻く環境もいろいろと変化してきた中で、ついに進路指導まで袋小路に入り込みかねない状況にあるというこの未来予測に対して、決して明るい気持ちになれなかったのは、きっと私だけではなかったのではないかと思います。自身を「進路指導の絶滅危惧種」と称した松村先生の真骨頂として、胸に響くものがありました。

だからこそ、生徒が学びにじっくり取り組めるための環境整備が大切であり、教員同士で相互の教育観を語り合う場を設けることの大切さを説く現状報告2は、とても切実性のあるものでした。「私たち高校教員は、何のために存在しているのか」という自問自答をしなければならぬし、その先にあるそれぞれの思いを、広く共有しなければならないと強く感じました。

5. 指定討論について

指定討論を振り返るだけの紙幅は残されていないので、指定討論者である倉元先生のお話をいくつか紹介して終わりたいと思います。まず、大学入試における測定評価については、

エビデンスを積み上げて学術的に検討していくことが重要であるということでした。「信頼性がないと妥当性は生まれない」という古典的な議論を踏まえて、パフォーマンス評価の実行可能性等についてはしっかり研究されるべきであるというご指摘は、現場で生徒を預かる者の一人として、大変心強く感じました。また、関連する内容として、宮本先生からも「大学入試の三原則」のどれか1つに過度に重きが置かれるのはよくないとした上で、研究としてのエビデンスを「つくる」、「使う」そして「伝える」のが大学から発信すべきメッセージであるというお話は、本フォーラムや大学入試学会が持つ社会的・教育的意義であると感じました。最後に倉元先生から、ある一点の理念によりかかりすぎず、バランスをもった全体の制度設計が必要であるというご指摘は、大学入試という分野に限った話ではなく、健全な批判的思考力の育成や開かれた公共空間での意見交換といった当たり前の大前提に立ち返るものであると感じました。

6. まとめにかえて

このような拙い講評を述べることになりましたが、本フォーラムを通じてなされた意見交換を踏まえて、今後、生徒に資する大学入試選抜というものが実現されることを心から期待いたします。それは、本フォーラムの発展形ともいえる大学入試学会の意義にも直結してくるだろうとも推察いたします。私たちのような現場で生徒を預かる教員一人ひとりこそ、このようなアカデミックな場と双方向のチャンネルを持って実践を省察しながら、日々生徒とともに考えていく重要性を述べて筆を置くこととします。

参考文献

柴田義松 (1992). 『学び方を育てる先生』 図書文化.

第 40 回東北大学高等教育フォーラムアンケート

(回収数 33, 回収率 8.4%)¹

1. 御所属

(1) 高校 : 20 名 (60.6%) (2) 大学 : 10 名 (30.3%) (3) その他 : 3 名 (9.1%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。

(1) よかった : 29 名 (87.9%) (2) どちらとも言えない : 4 名 (12.1%)

(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

(1) よかった : 30 名 (90.9%) (2) どちらとも言えない : 3 名 (9.1%)

(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

(1) よかった : 30 名 (90.9%) (2) どちらとも言えない : 3 名 (9.1%)

(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

5. ディスカッションは如何でしたか。

(1) よかった : 25 名 (75.8%) (2) どちらとも言えない : 6 名 (18.2%)

(3) 改善すべき : 2 名 (6.1%)

6. 時間は如何でしたか。

(1)短すぎた : 2 名 (6.1%) (2) ちょうど良い : 25 名 (75.8%)

(3)長すぎた : 6 名 (18.2%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

(後述)

ご協力ありがとうございました。

¹ 多重回答, 無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。¹

- 学校推薦型選抜・総合型選抜への関心の高まりには興味をもっていました。アカデミックな視点・高校現場の視点の両面から俯瞰できたため大変良かったです。(その他, よかった)
- 学習指導要領が大学入試にここまで大きな影響を与えるようになった時代はかつてなかったと思われる。総体としての入試とその変化を考えるにあたって指導要領に切り込むことは不可欠で、第一回の大会のテーマとしてはふさわしいものと思われた。(大学, よかった)
- 学習指導要領の改訂の時期が迫っている現在において、もう少し鋭角的な視点で大学と高校とが現状の課題を共有して欲しかった。本日の内容は、折角のこのチャンスをとらえきれない茫洋な印象を受けてしまいました。(高校, どちらとも言えない)
- 高校でも悩ましい問題なので。(高校, よかった)
- 高校で苦勞しているテーマに合致している。(高校, よかった)
- 高大接続には様々な問題がありますが、多様化という切り口は具体的な問題を明確にできるものの一つだと思いました。(その他, よかった)
- 今後の総合型選抜拡大に向けた情報収集となったため。(大学, よかった)
- 新課程入試を目前に控えており、特に興味深い内容であった。(高校, よかった)
- 新学指が始まって初めての入試を迎える学年の担任として携わっているが、正直不安なことが多く、他校の現場の教員や大学側の認識について意見を聴く機会がほしかったから。(高校, よかった)
- 進路指導と探究のつながりについて。(高校, よかった)
- 総合型選抜, 学校推薦型選抜に出願する生徒が以前より多くなり、対応が大変になっている現状がある。(高校, よかった)
- 多様化について大学も高校も苦勞しているが、これからの方向性が少しではありますが見えてきたから。(高校, よかった)
- 大学・高校の先生方いずれもベストチョイスでした。お三方とても勉強になりました。(大学, よかった)
- 大学入試だけでなく、大学入試に繋がる高校教育自体の見直しなども含まれており、色々と刺激を受けたフォーラムだったから。(高校, よかった)
- 大学入試に関わる課題をそれぞれ異なる立場の関係者がフラットな立場で議論, 考察ができ、問題点の収集, 整理, 改善, 提言が継続的に行える組織ができた。(高校, よかった)
- "大学入試のあり方というものは、「流動的」なものであることを学びました。
- どちらかという入試に合わせた対応ばかり考えていましたが、生徒を育てるという観点で社会変化の中どのような入試が望ましいのか、常に主体的に考え続ける必要を感じました。(高校, よかった)"

¹ 末尾の括弧内は所属, 選択された御意見.

- 大学入試改革が進み先行きの見えない中で、大学と高校の意思疎通が図れるテーマであったから。(高校, よかった)
- 内容とマッチしていました。初めて参加させていただきましたが、期待以上の充実したフォーラムでした。(高校, よかった)
- 入試の多様化が起きている現状を踏まえた内容になっており、それにかかわる内容が基調講演や現状報告で取り上げていただきましたので、テーマはとてもよかったと感じました。多様化が近年ではいろいろなところで言われている中で、その多様性とは何なのか多くの方の解釈があるかと思いますので、一斉に集まることができた今回の会のテーマとしてふさわしいものだと感じました。(大学, よかった)
- 本校でも学校推薦型選抜、総合型選抜の出願者が増えてきており、教員は書類作成や面接などの指導に追われています。生徒の入試なのに、バックにつく教員の入試的な側面もあるのではないかと感じています。そうでないことを願っていますが。最近の本校の悩みとマッチしたテーマでした。(高校, よかった)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- 「多様化」についての主観的な提言が欲しかったです。(高校, どちらとも言えない)
- マジックワードの受け止めかたが高校と大学で違うことを学ぶことができたから。(高校, よかった)
- 学習指導要領が変わる時にあわせて入試改革が進められてきており、高校改革も進められているという現状がわかった。(高校, よかった)
- 学習指導要領の内容と教育現場の実情が上手くマッチできれば良いと感じていたが、今回の基調講演で、キーコンピテンシーをベースにした改革と教育現場とのズレの一因を具体的に学べた。学習動機づけや自己決定理論等は高校教員が理解しなければならない知識だと感じることができ、学力の3要素の一体的な把握が反映されるペーパーテストを作成する意欲がこれまで以上に強くなった。(高校, よかった)
- 客観性のある内容で、参考資料やデータなどを用いてまとめたうえでの話であったため、大変勉強になりました。またコンピテンシーについては近年入試研究でも取り上げられているかと感じておりましたので、私自身の最近の興味関心のある領域であったためよかったとしました。(大学, よかった)
- 共通了解として必要な情報を(これまでの研究の総まとめとして)多々与えて頂いた。言葉の問題は国語関係者として最も危惧するところで、その点をおさえて下さったことが有難かった。「大学入試の三原則」など、以前論考で拝読して忘れていた点も思い出すことができ、極めて有意義だった。(大学, よかった)
- 考え方の変遷が聞けました。ありがとうございました。(大学, よかった)
- 高校教育について、「学力の3要素」や「学習指導要領」に基づいた講演で、自分自身が今課題として捉えている、歴史総合や地理総合などの新課程の科目に対する新たな授業方法についてより考えを深めることができたから。(高校, よかった)
- 高大接続答申以降の高大接続改革における成果と課題について、根拠をもって大変分かりやすくご説明いただいたことです。(大学, よかった)
- 主体性評価のあり方について、考えさせられました。(高校, よかった)

- 新課程における観点別評価についても触れられ、扱いに試行錯誤を強いられているが、ペーパーテストにおいても主体性を評価できることなど、今後に向けて学ぶことが多かった。また、学びのプロセスの理解も深まり、学問的にも興味深かった。(高校、よかった)
- 新学習指導要領と大学入試における現状を整理できたため。(大学、よかった)
- 大学側の見方がわかった。(高校、よかった)
- 大学入試に関する第一線でご活躍されている宮本先生のご講演は、私自身の今後の進路指導の根幹に大きく影響すると思われます。「入試問題はメッセージである」と長年指導してきましたが、本日のご講演でその根拠をいただくことができたのではと実感しています。(高校、よかった)
- 大学入試の多様化や高大接続改革などについて、気付かされたこと、新たに学んだことがありました。(高校、よかった)
- 探究型大学入試について。(高校、よかった)
- 頭の中が大変整理されました。(大学、よかった)
- 特に「学力の3要素」の何たるかが非常に分かりやすかったです。(その他、よかった)
- 漠然とした入試用語について多角的に切り込んでお話していただけたことがよかったです。(高校、よかった)
- 変化が先に立って、問題点を検証する暇もなく教員も生徒も試験に取り組んでいる状況なので、データをもとに改めて見直すことができたから。(高校、よかった)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 「学会」だと研究を本職とする大学の先生による大学側の視点が多くなると思いますが、高校の現場の切実な問題を知ることのできた貴重な機会だと思いました。(その他、よかった)
- ステレオタイプではない独自の視点で適格な指摘をされていて大変参考になりました。(大学、よかった)
- どちらも出願書類作成や生徒、保護者への対応など現場の大変さがわかる発表であった。(高校、よかった)
- リアルな内容で共感するところが多かった。(高校、よかった)
- 加美山先生の地方公立高校の実情も、松村先生の進路指導絶滅危惧教員も、いずれも共感させていただきました。県庁所在地から現在の学校に赴任しましたが、基幹校(旧制中学)でありながら、地方のリソースの少なさ、日常の刺激の少なさから来る生徒の受け身の姿勢を痛感しております。最近「素直・純朴＝無知」ではないかと邪推してしまいます。路線バスなど、朝夕に1本ずつきて終わりの路線がそこかしこにあります。都市部の学生との「日常の差」は日に日に広がっております。地方格差＝教育格差を痛感する毎日です。(高校、よかった)
- 現場が抱えている率直な意見と大学側からの認識を共有していただけたので、共通した不安感があることに安心感を覚えたから。(高校、よかった)
- 現場の困り感が滲み出ている、多くの高校教師がお二人の発表に共感していたと思う。今の時期から殆どの学校では3学年だけでなく全職員に割り振って小論文指導、面接指

導，総合型選抜の資料作成指導，担当教科の放課後課外をこなしている。今回の発表ではその多忙な中において，どこを削るのか？どこを簡略化できるのか？どこに不要性を感知しているのか？を示した発表だと理解している。（高校，よかった）

- 現場の実情が聞けた。（大学，よかった）
- 現場の率直な状況報告は大学側にとって貴重である。内情や学校の苦労・苦境を公の場やマスコミ取材で発言することさえ憚られる（匿名でも教育委員会が情報源を必死で探し回る）地域もあると聞く。ただ，探求学習以外で指導要領についての言及がほとんどなかったのが不思議ではあった。それほど内面化されているということか，あるいは日々の業務で精いっぱいということなのだろうか。（大学，よかった）
- 現状報告 1 私も大学院で学びたい 報告 2 まさに現場の声。（高校，よかった）
- 高校の進路担当教員として共感する部分が多くありました。（高校，よかった）
- 高校現場の現状が理解できました。とりわけ松村先生の「教員人事のスパンの短縮化」や「年内入試出身の高校教員の増加による，教員組織としての進路指導の難しさ」を実感することができました。（大学，よかった）
- 高校現場の実態やご意見を伺うことができたため。（大学，よかった）
- 私自身が高校教育の現場を知っていることもあり，現状報告については共感を持って聞くことはできたと思うが，新たな視点というのはあまり得られなかった。（高校，どちらも言えない）
- 松村先生が私たちの気持ちをしっかりと代弁してくれた。地域は離れていても学校を取り巻く現状が似通っていることがわかり親近感がわいた。推薦委員会の会議が学校の生徒全体のためになっているかというお話には，今までこの観点で考えたことはないが，とても大切な話である。機会があれば本校でもこの話をしたい。（高校，よかった）
- 他校の現状や問題点が本校に通じる部分が多く，参考になりました。（高校，よかった）
- 多様化にともなう教員への負担増など現場からの現状報告が聞けたことはよいと感じました。大学側からは感じ取れない教員の受験支援における負担について知れたことはこれからの入試改革等に重要な意見になることだと考えております。これからの本件については勉強させていただきます。（大学，よかった）
- 地域は違えども，同じような課題を抱えているということが分かりました。地方と都市部とでの格差は逆に見えてきませんでした。（高校，よかった）
- 入試の多様化が教員の多忙化を招いている一因であるが，生徒の志望を叶えるために先生方が尽力されていることを知ることができたから。（高校，よかった）

4. ディスカッションは如何でしたか。

- 「マジックワード」「ヒールワード」なるほど。（高校，よかった）
- それぞれの見解を興味深く拝聴させていただいた。それぞれの発表を深掘り、補足など、各発表をより理解できるディスカッションだった。（高校，よかった）
- マジックワードは高校教育の現場では正に呪文であると思います。近年ではポートフォリオ騒動が良い例でした。あれだけ苦労して蓄積したポートフォリオがさして役にたたないことが決まった時の、職員の落胆は今でも忘れられません。私たち高校教員は、政策に疑問を感じたとしても、ある意味で生徒を人質に取られているようなものです。二

度とあのような悲劇に遭わないことを願っておりますが、今後も政策に振り回されるであろうことは優に想像出来ます。現に今も「情報」に振り回されております。(高校, よかった)

- 基調講演・現状報告の内容をより深く捉えることができ、新たな視点をたくさん得ることができたディスカッションだったと思う。(高校, よかった)
- 高校の先生方と大学教員の関心事がかみ合わない部分が多かった。やむを得ないし、それがこうした場の意義でもある。(大学, どちらとも言えない)
- 指定討論者の質問設定が効果的でした。(大学, よかった)
- 質問を(できれば回答も)投影してほしかった。(高校, 改善すべき)
- 進路指導に特化した内容だったので高校・大学教員の方向性は同じでとても腑に落ちました。(大学, よかった)
- 先生方のお話をより深く理解でき、実りの多い討論だったと思います。(その他, よかった)
- 大学に入ったあとの転移について、自己の向き合い方が重要であることなど、多様化になっていくにつれて変わってきてしまうことの懸念点など、これは宮本先生の話の内容ですが、登壇していただいている先生方のディスカッションを通して多面的にディスカッションが繰り広げられていたので勉強になりました。(大学, よかった)
- 大学の立場、高校の立場、普段知ることができない見方に気付かされて、大変興味深かったです。(高校, よかった)
- 大学側と高校側でこのような情報交換をしていくことが、問題解決に繋がっていくと感じることができたから。(高校, よかった)
- 大学側の立場と高校側の立場の双方の観点からの発表があり考え方の違いがわかった。(高校, よかった)
- 大変良かったが、高校現場だけではなく大学入試の現場の実情についての報告も伺いたかった。(高校, よかった)
- 知りたい質問をしてくれていた。(高校, よかった)
- 内容というより、マイクの使い方(持ち方・発声の仕方)に工夫がほしいです。聴き取りにくい発声の方がいらっしゃり残念でした。(高校, 改善すべき)
- 予定があり、参加できず。(大学, どちらとも言えない)
- 様々な問題点について意見や考えをうかがうことができました。(高校, よかった)
- 率直に切り込んでいただけてありがたかったから。(高校, よかった)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- 「学力の3要素」と入試に関係する内容について。(入試の評価などについて)(大学)
- 4時間でも短く感じるほど充実しておりました。本件の続編を是非お願いします。(大学)
- オンラインでの参加を望みます。来年こそは、学習指導要領への提言をお願いします。また報道によれば、東北大学は全入学者を推薦入試で選抜したいとのことですが、そのことの意義と問題点とを研究者の立場でお話いただければと思います。(高校)
- オンラインの併用。(大学)

- ハイブリットにしていただけるとありがたいです。(大学)
- 学習指導要領と教育課程，大学入試，これらの関係は大変興味深いです。本校では増加の一途を辿る必修科目等，大学入試を見据えた際の教育課程で，現行の時間割で対応することがもはや困難な状況に直面しております。もはや授業時数を増やすしかない状況に追い込まれております。下関西高校の松村先生のお言葉をお借りすれば，働き方改革の成果など吹き飛んでしまいます。(高校)
- 現行がよい。(高校)
- 高校側と大学側の意思疎通をはかる場として今後もお願いしたいですし，これらの議論が高大連携や改革にいかされるようなフォーラムとなっていて欲しいと考えます。(高校)
- 今回と同様に，現地とオンラインの両方があると，校務の状況に合わせて自由に参加できるので良いと思った。遠方からきていることもあるので，できればもう少し早めに終了時間が設定してあると時間などを気にせず余裕をもって参加できたかなと思った。(高校)
- 今回のようにオンラインもあるとありがたいです。大学入試問題の作成や採点についてのお話も聞きたいです。(高校)
- 対面・オンラインの両方で実施していただきたいです。(その他)
- 大学入試の今後の変化，社会変化の中での教育変化などオンラインも併用していただけると有難いです。(高校)
- 同様の形式でお願いしたい。(高校)
- 入試の方向性と課題が見えるような機会を提供して頂きたい。(高校)
- 本質として中等教育と高等教育でどのような人物を育成していくのか，そのためにどのような試験であるべきかや，学習歴，活動歴，資質能力等の求める学生像のすり合わせが行えるようなテーマ。(高校)

8. その他，全般的な御意見，御感想をお寄せください。

- Wi-Fi を使わせてもらえるとありがたかった (高校)
- いろいろと考えさせられることがありました。現場に反映させていきたいと思います。(高校)
- さまざまな情報を得て，さまざまな考えをうかがうことができ，有意義でした。ありがとうございました。(高校)
- 運営等に携わっていただいた方ありがとうございました。1点要望があります。指定討論の際のスライドを資料としていただきたいのですが，可能でしょうか？ (大学)
- 学びの多い時間でした。感謝申し上げます。(高校)
- 学術的観点から現場を語ることは難しいと思う。教育学と進路指導についてこれからも検討して行きたい。(高校)
- 貴重な機会をつくっていただきありがとうございました。(大学)
- 共通テストが本格的に実施されます。この問題形式の是非について，テスト学会とのコラボでお願いできればと思います。ますます，生徒の学習時間や努力ではなく，先天的なリテラシーで選抜されていくような気がしています。いろいろと書かせていただきま

したが、本年も楽しく拝聴いたしました。ご尽力に感謝致します。ありがとうございます。（高校）

- 今回はオンラインでの参加となりましたが、有意義な時間を過ごすことができましたし、大変勉強になりました。（高校）
- 今回は諸事情があり初日しか参加できなかったのが残念でした。社会の変化で教育も変わるものだと思いますが、教育にも不易流行は存在すると思います。新しい教育改革であつても明治維新のような復古的な革新という側面を残しておく必要があると私は思っています。他方、0ベースで新たな教育システムを築くべきだと言う方もいます。私擬憲法を各自で作って論争をした時代のように長期的な目標から直近の課題まで議論ができる大学入試学会であれば、ありがたいと考えています。（高校）
- 倉元先生の指定討論の手法も大変勉強になりました。（大学）
- 多様な環境下にある学校現場の現状と普遍的な公立高校の悩みとを共有することができ、今後の指導に繋げたいと思うことばかりでした。また、学術的なご意見をお聞きすることができ、大変興味深かったです。ありがとうございました。（高校）
- 大変貴重なお話をありがとうございました。新たな気づき・視点を得ることができ、今回得たものを少しでも日々の授業や校務に生かしたいと思いました。ありがとうございました。（高校）
- 入試に関して、大学と高校が同じ場で論じることがこれまでになかったことで、共通して語り合えること、高校が話したいこと、大学が注視すること、など共通点と相違点が見えて、意義深い会だったと思います。明日からの研究発表等の学会にきたに期待が高まりました。（高校）
- 本日はありがとうございます。オンラインで参加いたしました。大変知的好奇心をくすぐる内容でした。私の視聴環境の問題もあるかと思いますが、マイクの持ち方によって声が聞きづらい場面がありました。次回開催の際はそのあたりもご配慮いただけますと幸いです。（その他）
- 本日は大変有意義な時間を過ごすことができました。週明けからの業務に生かせそうな内容が盛り沢山でした。初心に立ち帰り、日々の業務と教材研究、何より進路指導に精進したいと思います。本日発表された先生方、運営にご尽力された先生方に改めて御礼申し上げます。今フォーラムと大学入試学会の益々のご発展をお祈り申し上げます。（高校）
- 毎回参加してよかったと思う充実した内容を提供いただき感謝です。（高校）
- 名言「大学入試は（大いなる）妥協の芸術」を直接、倉元先生の口から伺って、感動しました。宮本先生の「政治を入れるとおかしくなる」というのもその通り。しかし実際には力を持っているわけで、私たちはそれに対して何ができるのか、と途方に暮れます。募集要項の難解さ…本学のものをあらためて見直してみます。学内で入試に関心を持っている教員、全体を見通している教員はほとんどおらず、それでいて「受験の機会は多ければ多いほどいい」と安易に制度変更をする学部があります。実際は倍率が落ちていることへの不安がさせているにもかかわらず、建前を前面に持ってくる。議論を理念に立ち戻らせる必要があると痛感します。ただ、学部自治がありますので、全学での方針

統一は困難です。高校の先生方とのさらなるやり取りが必要ですが、まずは大学側がしっかりしなければ、と思いました。(大学)

参加者統計

1 参加者総数: 431 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 163 名, 高校: 111 名, スタッフ等: 23 名, その他: 120 名)

1.1 来場参加者総数: 146 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 44 名, 高校: 39 名, スタッフ等: 23 名, その他: 26 名)

1.2 オンライン参加者総数: 285 名 (参加申込者数)

(大学: 119 名, 高校: 72 名, その他: 94 名)

2 参加者地域別

宮城県内: 78 名

宮城県以外の東北地方: 58 名

(青森県: 8 名, 岩手県: 13 名, 秋田県: 6 名, 山形県: 14 名, 福島県: 17 名)

東北地方以外 295 名

(北海道: 10 名, 茨城県: 8 名, 栃木県: 5 名, 群馬県: 2 名, 埼玉県: 7 名, 千葉県: 10 名, 東京都: 119 名, 神奈川県: 14 名, 新潟県: 6 名, 富山県: 1 名, 石川県: 1 名, 福井県: 1 名, 山梨県: 1 名, 長野県: 1 名, 静岡県: 8 名, 愛知県: 17 名, 三重県: 1 名, 京都府: 4 名, 大阪府: 22 名, 兵庫県: 6 名, 奈良県: 1 名, 島根県: 2 名, 岡山県: 7 名, 広島県: 10 名, 山口県: 5 名, 香川県: 1 名, 愛媛県: 2 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 12 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 3 名, 大分県: 3 名, 鹿児島県: 3 名)

2.1 来場参加者地域別

宮城県内: 48 名

宮城県以外の東北地方: 26 名

(青森県: 4 名, 岩手県: 6 名, 秋田県: 3 名, 山形県: 5 名, 福島県: 8 名)

東北地方以外 72 名

(北海道: 2 名, 栃木県: 1 名, 群馬県: 1 名, 埼玉県: 1 名, 千葉県: 1 名, 東京都: 28 名, 神奈川県: 1 名, 新潟県: 3 名, 石川県: 1 名, 福井県: 1 名, 静岡県: 2 名, 愛知県: 2 名, 三重県: 1 名, 大阪府: 5 名, 兵庫県: 3 名, 岡山県: 2 名, 広島県: 4 名, 山口県: 4 名, 愛媛県: 1 名, 福岡県: 3 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 2 名, 鹿児島県: 2 名)

2.2 オンライン参加者地域別

宮城県内: 30 名

宮城県以外の東北地方: 32 名

(青森県: 4 名, 岩手県: 7 名, 秋田県: 3 名, 山形県: 9 名, 福島県: 9 名)

東北地方以外: 223 名

(北海道: 8 名, 茨城県: 8 名, 栃木県: 4 名, 群馬県: 1 名, 埼玉県: 6 名, 千葉県: 9 名, 東京都: 91 名, 神奈川県: 13 名, 新潟県: 3 名, 富山県: 1 名, 山梨県: 1 名, 長野県: 1 名, 静岡県: 6 名, 愛知県: 15 名, 京都府: 4 名, 大阪府: 17 名, 兵庫県: 3 名, 奈良県: 1 名, 島根県: 2 名, 岡山県: 5 名, 広島県: 6 名, 山口県: 1 名, 香川県: 1 名, 愛媛県: 1 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 9 名, 熊本県: 1 名, 大分県: 3 名, 鹿児島県: 1 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第40回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	倉元直樹			
企画責任者	倉元直樹	宮本友弘		
事務局	大野真理子	林如玉	駒形一路	三戸望

当日スタッフ

石井裕基	加藤徳善	秦野進一
秦孝子	田中秀樹	竹浪綾子
木村香	李佳穎	盧泳詩
温昕	呂佳臨	

共催：大学入試学会

本企画の一部は、JSPS 科研費 21H04409 の助成を受けた

IEHE TOHOKU Report 88*

第40回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [21]

大学入試の多様化を考える

——新学習指導要領と総合型選抜の拡大——

発行：2025年3月

編集：倉元直樹，林如玉

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@grp.tohoku.ac.jp

印刷所：有限会社 明倫社

*No.55 以前は、CAHE TOHOKU Report として刊行

